

---

You & I -Reverside Drunker-

Y

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

You & I - Reverse Drunk  
er -

### 【Nコード】

N10200

### 【作者名】

Y

### 【あらすじ】

人型ロボットIRIAと共に他愛ない日常を過ごしていた女子高生、水無瀬優紀。

Pandora Protorion - (通称PP)のユーザーでもある彼女はオンラインゲームの最中、ふとしたことから今いる現実に違和感を抱き、その原因を調べ始める。

現実であるはずのものが虚構であり、夢であるはずの物に確かさがある。

緩やかな改変を経て、彼女の目に映し出された世界の姿とは。

## Start Day?

第一条 ロボットは人間に危害を加えてはならない。

また、その危険を看過することによって、人間に危害を及ぼしてはならない。

第二条 ロボットは人間にあたえられた命令に服従しなければならない。

ただし、あたえられた命令が、第一条に反する場合は、この限りでない。

第三条 ロボットは、前掲第一条および第二条に反するおそれのないかぎり、自己をまもらなければならない。

2058年の「ロボット工学ハンドブック」第56版 『われはロボット』より

>i22180—2360<

絵師：ななゆう

http://www.pixiv.net/member|il  
lust.php?mode="medium&amp;illus  
t|id"17695791

ある日の夏……。

「起きて優紀ちゃん」

とても無機質な、私を呼ぶ声。

「学校、行かなきゃいけない時間だよ」

学校……そうか、学校だ。

「ん……んっ……おはようIRIA」

「おはよう優紀ちゃん」

私は水無瀬優紀。みなせゆうき

どこにでもいるような普通の女子高校生なのです。

そんなでもってこの無機質な声で話すのは人型生活サポート用コミ  
ュニケーションロボット、IRIA。

サイズは私の身長の手分くらい。

でも人型、とっても可愛らしい姿。

いつからか忘れたけれど、ずっと一緒にいる大事な妹分。

「優紀ちゃん、ご飯できてる」

「ありがとう、すぐに行くよ」

そうして部屋を出て行くIRIA。

私は着替えるためにクローゼットを開けて制服を取り出す。

「……ふう」

着替え終える私。

これで学校に行く準備は完了だ。

もうすぐ夏休みだ、学校にいつでも特にこれといってすることは  
少ない。

だからといってサボることもない。

ただなんとなく流されて過ごす日々。

それには意味なんてないのかもしれない。

「うーん……案外そんなもんかもしれないなあ……」

なんて独り言をつぶやきつつリビングへ向かう。

「今日は莓ジャムのパンですよ優紀ちゃん」

「莓ジャム……」

莓ジャムは嫌いではない。

いや、どちらかというと好きなほうだけど……。

「えっと、白いお米は？」

「ありますよ？」

「なんでそれを出さないの？」

「いえ……特に意味はないですけど……」

「あのね、IRIA」

ため息をつきながら私はこの時たま駄目口ボ娘に説いてあげる。

「IRIAは充電好きだよね？」

「はいです、大好きですよ」

「それも家のコンセントするのが好きなんだよね？」

「はいです、人間のように言葉でうまく表現できかねますが」

「それをアルカリ電池で充電されるとどう思う?。」

「いいですけど……嫌ですね。なんといたら良いのかわかりませんが」

「そうそれ、”別にいいけど嫌”なの。今私そんな気持ち。」

「申し訳ないです……」

「いいのいいの、どうしても嫌! とかじゃないしね」

片手をひらひら振りながらパンをかじる。

ロボットだって人間の子どもと同じ。

わからないことは説明してやらなければならない。

ただ物分りが良すぎて融通が利かないことも多々あるがそれは仕方のないことだ。

ただこうしてともに生活しているとそれだけ私の行動パターン  
つていうのかな?

そういうものをインプットしていくものだから教育・指導はしな  
くてもよい。

なのになぜ私がこうしているのかというと……。

「人間と見ているから……かなあ」

「私をですか?」

> i 2 2 3 5 4 — 2 3 6 0 <

絵師：おに



「んー、そうそう」

いつの間にか声に出していたようだ、聞かれて困る内容ではないからいいけどね。

「私を、人間として・・・ですか」

「じゃあ聞くけどさ」

私はパンをおなかに流し込む。

「私とIRIAってどんな違いがあると思う？」

私は問う。

人間とロボット。ロボットは喋る。

ロボットは私を起こしにくる。ご飯を作ってくれる。

私の気分に合わせぎこちなくはにかんでくれる。

「えっと……それは……」

「演算しても駄目だと思う。これはそういう種類の問いじゃないよ。」

「……はい」

おちこんだようにうつむき、返事をするRIKA。  
それは彼女にインプットされた

”この場、この状況で一番適すると思われる人間の真似事”だ。所詮は真似事、この行動の意味などロボットにはわからない。

「じゃあ私学校行ってくるから、帰ってくるまでの宿題ね」

私はそう言い残すとイスから立ち上がり、玄関へ向かう。

「これ、お弁当です」

「あ、ありがとう」

お弁当を受け取るとカバンの中へしまう。

「じゃあ、よく考えてみてね。いつてきまーす」

「はいです。いつてらっしやい」

玄関を出る。

さあ、一日の始まりだ。

半日、なにもしない学校という意味のない行為をする。

意味のない行為。

意味のない行為といえは……。

「なんであんなこと尋ねたんだろう……」

人間とロボットの違い。

そんなもの尋ねるだけ愚問。

ロボットは機械。そこにはプログラムしかない。

でも、それなら人間は？

”脳”という大きなハードディスクを持っているだけに過ぎない。

ロボットとは違い”感情”という拡張子のファイルを保存できるHDD。

そんな認識。きっとその程度のものなのだろう。いや、それくらい凄いことなのだろう。

きつと、私の脳をUSBケーブルにつないでパソコンで中身を見てみたら

”0”と”1”だけが見えるのだろう。

いやいや、ちよつと特殊なプログラムだ。

”2”とか混じっててもいいかもしれない。

「はは……三進数だよそれじゃあ……」

あるかもしれないよ三進数。

……ないな、うん。

神は人間をつくった。人間はロボットをつくった。

ならばロボットはなにをつくる？

人間がロボットが二進数、人間が三進数だと考えるとすると神は四進数ということになる。

それならばロボットがつくったものは一進数のものになる。

”0”だけでしか己を表せない存在。

ならさらにそのロボットにつくられたなにかがつくったものはどうなる？

……零進数。

すなわち無だ。

” ”で己を表さなければならぬ。

でも” ”は組み合わせなんて持たない。

” ”は一つなのだ。

人間はたくさんいる。

ロボットだってたくさんいる。

ロボットがつくったなにかはちょっとだけだけどいる。  
でもさらにそのなにかがつくったものは一つしか存在しない。

「世界に一つだけ……か。まるで神様だね」

神に始まり神に終わる。

私たちは生み出しても、最後は神に行き着き、逆行しても神に行き着く。

全ては神へと回帰する。

神回帰論……なんてね。

「……馬鹿馬鹿しい」

だったら十進数とか十六進数とか凄いわ。

神の2倍も3倍も、4倍も上位の存在じゃないか。  
考え方がそもそも違うのかも。

「なら私たちって何進数でできてるんだろうっねえ……」

「無限進数」

「へ？」

ふと誰かの声を感じ振り向くとそこには……。

「おはよう水無瀬」

……  
たづかすま  
立木和真。

私のIRRIAに唯一興味を示してくれる同じクラスの男子。

「和真か……急に人の妄想にはいつてこないでよ」

まったくもって不埒な。

セクハラだ、セクハラ。

「いやいや、なんか興味深い内容だったんでつい」

「いくら興味深い内容でもセクハラはいけないと思う」

「え？ いまのつてセクハラになるのか？」

「うっさい、ならないっての」

よく口が滑っておもっていることを駄々漏れにしてみよう。

これは私の悪い癖だ。

「まあいいや……で、その無限進数って？」

なにやら意味深な言葉だ。

それはなにを意味するのだろうか？

「ロボットってさ」

彼は語りだす。

「0」と「1」の二進数でできてるよな？」

それは私の考えていたことと同じ。  
というか真理だ。

「なら人間ってどこがロボットと違うのか・・・」

それも私の考えていたことだ。

IRIAの宿題にもした、愚問のテーマ。

「それは感情だ」

そう、感情。

人間には感情がある。

「感情って拡張子のファイルはロボットには認識できない。それはなぜだろう？」

知らない……なんで？

「答えは簡単、大容量だからだ」

「それってどれくらい？1ペタくらい？」

「SI接頭辞で表すのならせめて一番大きいYottaヨタをもってこいよ・・・」

「あ、ヨタ知ってる。途方もない事を表す”与太話”ってその一番大きいSI接頭辞のヨタから引用したっていう」

「よく知ってるなそんなこと……まあそんなヨタなんかよりもっと大きなものだ」

「え？ それって……」

「そつだ……」 無量大数” ってやつだ」

無量大数…… つまり……。

「無限……」

「そのとおり、感情は数字で表すことはできない。だから感情はプログラミングすることはできない」

「それが無限進数？」

「そう、俺たちの脳はそんな大きなものをインストールしているんだ」

「ご大層な考察だ。」

本当にそうならどれだけ楽しいことか。

「でもさ、そんなに大きな容量保存できるならどうして数学の公式が覚えられないのさ」

数学の公式なんてそんなに容量つかわないでしょう。

「それは俺たちの脳が感情で埋め尽くされているからだ」

おお、なるほど。

あまりにも容量の大きいファイル”感情”

こんなもんを積んでいるからほかの物事が記憶できない……と。

「ならどうして、どうやって神は私たちをプログラミングしてんだろっね」

プログラミングが不能なはずの感情を、神はどうやってつくったのだろうか。

「多分、神は”無限”がなにかを知っているんだ」

「無限がなにかを知っている？」

「そう、俺たちは無限は数字で表せない大きななにか、としか認識できない……。でも神はその”無限”を数字以外のなにかで表すことのできる数学者なんだ」

「なるほどね……。その”なにか”ってやつをプログラムに組み込んで感情を作る……と」

「そう、つまり俺たちは”なにか”でできている。俺たちが理解しえないなにかでな。まるでロボットが自分たちがなにできているのか知らないみたいに」

「それはつまり、自分より上位の者でないとなにできているかわからないってこと？」

「まあ、そういうことになるんじゃないか？」

いきなりえらい投げやりだなあ……。

「どつたの急に？」

「学校」



彼の指差す先には学校。

そうだ、この考察ごっこはもう終わり。  
ただの暇つぶし、妄言だ。

キンコンカーンコン……

チャイムが鳴る。

急がないと遅刻になっちゃう。

「……でも」

でも、最後に気になったことがあった。

「ならば神はなにでできているんだろう？」

はははっ、きっとむちゃくちゃ凄いなにかだな。

神って凄いやつなんだなあ……。

そんなことを考えながら今日という一日がすぎてゆく。

意味のない、意味のない……。

本当に意味のないことだ……全て。

k a n z y o u . e x e

F i l e N o t F o u n d . . .

Start Day?

さて、もうすぐ夏休み。

学校は半日で終わるし、しかも授業も内容のないものばかり。

私的には意味のないこと。

悪い言い方だと”時間の無駄”ってやつ。

普段妄想で時間の大半を使ってるようなやつがなにをいう。

とか思ってるその人、私が妄想するのはなにも四六時中じゃないぞ。

登下校中とか、そういう時にしかやらないんだぞ。

あんな朝からぶつとんだような話をしているがまあいつものことだ。

バカな話は私の栄養になる。もちろん精神的な意味で。

「おはよう優紀」

「おっす宮子」

朝の挨拶を交わす。

この娘は須藤宮子。

ボーイッシュなイメージにきりつとした目。

そしてなによりかつこいいんだな、性格がさ。

「や、そんな本人の前でベタ褒めされたってなにも出ないよ?」

「あつれ、また口に出てた?」

「その癖直したほうがいいよ、なんかこう考えが丸出し……みたいなの?」

ふむ……いかにいかに、私の脳内が丸出しなんて恥ずかしすぎる。

「いやだからまた口に出てるって……」

「癖だから仕方ないんだよっ！くく、くやしい……でもっ……つぶや  
いちゃう！」

「あのねえ……」

あきれた顔の友人A。

朝からこんなバカと一緒に頑張ってご苦労様です。

「ねえねえ、なんの話？」

そこに参上しますはおつとり系筆頭、あまみやはるか天宮春香さんですよ。

ボーツとした表情に某パンダのように垂れた目。

そしておもわず手に絡ませたくなっちゃう長い髪。

「へブン状態……！」

「なにを言っとなるんだあんたは……」

「うるさい友人A、私は今脳内でこの垂れパンダの髪をだ……」

「誰が友人Aだ、そんでもって伏字の使い方がどうにも間違ってるぞ」

「お、おお……ツッコむねえ。でも脳内で髪触るのはいいんだ」

「ツツコミきれんだけだったの。」

……はっ！

ここまで来て私は春香をスルーしていることに気づいた！  
ほつらご覧、スルーされて涙目になつて春香さんが目の前に……

「え、なに？」

別に涙目でもなんでもなかった！  
泣かないのはいい子だけどそれはそれで寂しい。

「もう慣れたただだよ……」

ですって。

おっとり系の癖にあたふたしないとか何様のつもりだ！

「それで、なんの話をしてたの？」

改めて尋ねる春香嬢。

え、なにそんなに気になりますか。

「このおバカのいつもの癖についての話だよ。今も現在進行中の。」

「ああ、いつも考えてることが口に出ちゃうって……」

すいませんでしたね、色々と駄々漏れで。

「あ、そっぴやさ」

宮子がぼんつと手を叩きなにより携帯を取り出した。

「優紀は何レベルになったの？」

「？レベルって……？」

「なにボケてんのさ、Pandora Protorionモバイル版だよ。略してPモバ。」

「モバイル……版？」

まずここで説明しておこう。

Pandora Protorion（通称PPとかパンプロと呼ぶ）というのは今世界中で大人気のメディアだ。

まずRPGゲームとして発売され、どんどん続編が作られていった。

漫画になり、そしてアニメ化、小説にもなり今や知らない人はいないぐらいの人気ぶりだ。

なにを隠そう、私もPPの大ファンであり全てのゲームはやりこんでいる。

PPシリーズのキャラたちが集って戦う格闘ゲーム、PPCrOSS Fightってゲームが

あつて私はホームのゲーセンではチャンプとして君臨している。ちよつと話がずれたけど、ようは私はPPが大好きだつてこと。そのモバイル版……？なんてのは聞いたことないけど……。

「まさか優紀……知らなかった？」

知らないよそんな情報！

「そ、それっていつからなの！？」

「金曜日の21時ごろからだから……3日前くらいかな？」

うわあああああああああ、出遅れたああああああっ！！  
！！

すかさず携帯を取り出しPPの公式サイトへアクセスする。  
画面をどんどんスクロールしていく。

概要……ふむふむ、携帯オンラインゲームなのか。

……待て、いまランキング項目に下品な名前を発見した。

ランキング6位PN・カズLv70

これってまさか……。

「ねえ、和真は？」

ユーザー登録を済ませながら私は尋ねた。

「立木君ならさつきトイレに行くって言ってたよ。もう授業始まるのに……」

あの野郎、授業サボってPモバやる気だな！

さつきの70レベルは絶対和真だ！

くう……すぐに追いついてやるからっ！

ユーザー登録は済ませたから後は登録完了メールが来るのを待つだけだ。

凄く待ちどおしいこの時間。

ハンドパワーでも送り込んでやろうか。

「あのね優紀、念力送ったってメールはすぐに届かないって」

おおっと、とうとう行動までもが表に出てしまつとは……反省反

省。

ピ。ピ。ピ。ピッ！

おっ、メールの着信音だ！

「今日の授業時間は有意義に過ごせそう……」

おもわず怪しい笑みをこぼしてしまう。

「わ……こいつ授業サボる気だ……」

「失礼なっ、ちょっと携帯触るだけだよ」

そろそろ授業の始まる時間だ。

さあて……れっつぱーりー！ってね。

そうして授業が<sup>ゲーム</sup>始まった。

ポチポチポチっと……。

携帯のボタンをひたすら押している私。

このPPの世界観はファンタジーであり剣と魔法が飛び交うものである。

キャラクターたちはプロトという掻い摘んで話すとずばり魔法のようなもので戦う。

このプロトは”成すべきことがあるかぎり使える”便利な、そして強力なものである。

Pandora Prot Orionと、タイトルにもあるとおり重要なファクターであるのはお分かりいただけるだろう。

しかしこのプロトは敵も使ってきており、傷つけるための能力として扱われてきた。

第一作目、いわゆる無印PPのラストでプロトは”大人になれる  
い者への救済措置”だということが  
発覚するのだ。

「力がないものはなにも成しえないが力あるかぎりなにかを成すこ  
とは可能である」

これはPPの重要な人物「パンドラ」の言葉であり、人々がプロ  
トを使えるように仕組んだのはこの人物だ。

確かに力を持つことでいまままで成し得なかったことができるよう  
になった。

しかしその力のせいで傷つく人も増えた。皆が幸せにはなれない  
のだ。

傷ついた人は逆に高みを目指してやろうと決意する。するとプロ  
トに目覚める。

そのプロトを使って幸せになれば誰かが不幸になる。

この悪循環こそが狂気の男パンドラの狙いだったのだ。

開けてはならない箱の中身は人を不幸にする能力だったのだ。

そんな中、一人の青年が立ち上がった。

光の剣士シュナイダーは人々ではなくパンドラこそが悪だと悟り、  
その討伐の旅出る。

ちなみにシュナイダーは私の一番好きなキャラだ。

ゲームのラスト、シュナイダーは仲間とともにパンドラ退治に成  
功するが彼は奇妙な言葉を投げかけたのだ。

「まだ子どもだな」と……。

パンドラは消えたが以前としてプロトは消えないままだ。

世の中の辛い現実を受け止め、自力で頑張ろうとする人にプロト



は発現しない。

つまりプロトを持つ者はまだまだ皆子どもであり、それを持たないことこそが大人の証なのだと……。

そうパンドラは言いたかったのかもしれない。

戦いを終えたシュナイダーたちのプロトはまだ消えない。

彼等もまた、やり残したことがある子どもだったのだ……。

と、これが初代PPの大まかなストーリーだ。

このストーリーが人気を呼び、続編がたくさん出た。

大人になるためのRPGというジャンルはいまでも色あせることなく続いている。

今回そのモバイル版を今授業中にも関わらずプレイしているのだ。まずユーザーネームを決める。

私のは優紀からとって”Y o u”にした。

次に使用キャラを決める。

使用キャラはもちろん初代PPの主人公シュナイダーだ。

シュナイダーは光の剣士と呼ばれており、プロトを使って光の剣を生成することができる。

癖の無く、使いやすい接近戦主体のキャラだ。

今回のPモバでもそれは変わらず序盤のモンスターをばっさばっさと切り倒す。

授業も4時間目というところでレベルは12になっていた。

「そつえばこれってオンラインゲームなんだよね……」

フィールドを見ると何人かが集まって一緒にモンスターを倒している。

経験値分配システムなるものでパーティ全体に経験値がいきつくそうだ。

さらにパーティボーナスというものがあり一定の数のモンスターを倒すと経験値が少し増えたりもする。

つまりなにかしらパーティは組んでおいたほうが得なのだが……。

「宮子と春香は……授業ちゃんと受けてるしなあ……」

ということは適当にパーティを検索してどこかに入れてもらうしかないわけだ。

「ん？受信メール二件……？」

一度ホームページに戻り個別アカウントページに戻ると二件のメールが届いていた。

どうやらパーティのお誘いらしい。

まず一件目のメールには……。

「Hello! P P Would! 管理人より」と書かれている。

どうやらゲームを始めた時に届くメールらしい。

ならばもう一件はなんだろう？

まずはタイトルに目をやる。

そこには「神様」とだけ書かれている。

内容はこうだ。

「ようやく出会えましたね。もう何年も待ちわびておりました。ナナより」

と書かれている。

画面をスクロールするとこのユーザーの招待を受けますか？との

文字があつた。

どうやらパーティのお誘いらしい。

ぱつと見ではただのいたずらメールかもしれないが優紀はこの言葉を知っていた。

「確かこれってPP？天使編の中盤で敵の堕天使がシュナイダーに言う台詞だよね……」

相手はそうとうのPPファンらしい。割かしマイナーな場面の台詞をチョイスしてくるあたり

少し自分と重なる部分もあるかもしれない。

「いいよ、一緒に戦おうじゃない」

優紀はくすつと笑うとメールを送り返した。

「では俺の手を取るがいい。おまえが俺に……否、世界に相応しい器なのか確かめさせてもらうぞ」

相手に習って原作どおりのゲームの台詞でメールの文章を送る。

これでナナというユーザーとパーティを結成したことになる。

同じパーティ内の仲間のステータスが表示される。

Y o u L v 1 2   ナナ L v 3 3

う……結構レベルに差があるなあ……。

こりゃ頑張らないと。

すると今度はパーティチャットのウィンドウが開かれる。

「こんにちは」

ナナという人物からのチャットだ。

「こんにちは」

こちらを送り返す。

「よくあの場面がわかりましたね」

さらに返事が返ってくる。

どうやら私があのだの台詞の元ネタを知っていることについての話だろう。

「PP?は結構やりこみましたから」

「そうなんですか、私は?が一番好きなんです。Youさんは?」

「格ゲーのクロスファイトが一番好きかな?RPGならやっぱり初代です」

「クロスファイトですか、私もやったことありますが全然下手ですね」

「一応私ホームのチャンプなんですよ」

冒険そつちのけでPPの話で盛り上がる二人。

そんな中、私の一言でチャットが一時的に止まる。

怪しまれた?いやでも本当のことだしなあ……。

しばらくすると返事が届いた。

「……もしかして”姫”ですか?」

！？

なんで私のホームのゲーセンでの呼び名を？  
確かにあそこは色々盛んなところだけど……。

どうしよう、なんて答えようか。

嘘をつくのもなんだし……ここは正直に答えよう。

「はい、そうですよ。もしかして地元の方なんですか？」

とりあえず無難に返す。

「そうですね、あそこのゲーセンにはたまに行きますよ」

なんてこった……。普通に知られているじゃないか。

次はなんて変えそうか迷っていたらさらにメッセージが届く。

「あ、時間が来たので少し落ちますね。ではこれからよろしくお願  
いします」

そうするとナナはログアウトしていった。

キンコンカンコン……。

ちようどその時授業終了を告げる鐘が鳴り響く。

これで学校終了だ。

私もログアウトするとさっさと帰りの準備をする。

「あ、こら優紀！HRサボる気か！」

教室を出ようとするとうちに声をかけられる。

「じゃあね宮子、また明日！」

有無を言わず手を振ると私は走って逃げることにした。  
HRなんて一番無駄な時間だからね。  
さあて、放課後はなにをしようかなあ……。

## Game to Fight?

さて、やってきたのは野中FRTというゲームセンター。  
最近行つてなかったので腕が鈍っているかもしれない。

「おお、やってるやつてる」

今日もゲーセンの中は人であふれかえっている。  
もちろんPPの格ゲーも盛り上がっているようだ。

この格ゲーのシステムは2D画面で、ボタンはS、M、L、Pの  
4つにスティックが2本。

Sは弱攻撃、Mは中攻撃、Lは強攻撃、Pはプロト攻撃（特殊行  
動）となっている。

それぞれのボタンは各スティックに2つずつついており握るよう  
に押すボタンと親指で押すボタン配置となっている。

格闘ゲームにしては珍しいこの2本のスティックにも役割がある。

まず左側のスティックで移動やジャンプができる。

そして右側のスティックでは技を繰り出す際のコマンド入力を行  
うのだ。

この方式を取ることでによりコマンドと移動が別になり技を出す  
きの誤移動などが減るのだ。

ここで格ゲーにおける基本知識を覚えておこう。

まずコマンドを記載する際にいちいち下、右下、右などとは言わ  
ずに

電卓のテンキーをスティックに見立て236、という言い方をす  
るのだ。

電卓は基本的に

7 8 9

4 5 6

1 2 3

という並びをしておりこの場合は5を中心にして考えるのだ。

普通の格ゲーならしゃがみキックをするときには2 K（下入力しながらキックボタン）と

入力するのだがこのP Pでは2・2 M（左を下、右も下入力しながら中攻撃）としなければならないのだ。

この一見すると面倒なこのシステムのおかげでしゃがみ上段攻撃（2・8 Mなど）なる攻撃もできるのでよりテクニクスの要求されるゲームになっている、というわけだ。

「さあて、今は誰と誰が戦っているのかな？」

たくさんのギャラリィを掻き分け画面を覗く。

1 PはP N・ホタテ貝選手のシュナイダー。

2 PはP N・Q M G選手のギューカク。

シュナイダーは近接戦闘が得意な剣士であり上位キャラである。

一方のギューカクはパワーはあるものの動きが遅く使いにくい下位キャラである。

普通に戦えばギューカクに勝ち目はないのだが……。

このQ M G氏は魔法闘士と呼ばれておりギューカクを使わせたら右に出るものはいないという人物である。

ホタテ貝選手はそもそもシュナイダーがメインキャラではないはずなのだが……。



「お、お？ シュナイダーが押してる？」

試合はどうやらシュナイダー優勢の様子だがここでQMG氏のギューカクが反撃にでる。

「弱弱中強、はい、はい、そこでハンマー入れてもひとつ入れて…」

ギューカクがコンボに入りその様子を口ずさむように実況する。

「浮き上がりでエリアルほいほい……凄ーい！」

ギューカクのようなパワータイプには珍しい10コンボを決めて大ダメージを与えそのまま倒しきる。

「うわー……これ私勝てるかなあ……」

成功率のかなり低いといわれているコンボを決めたQMG氏のギューカクに少したじろぐ優紀。

「お、姫だ！」

「え？ マジで？」

「姫 k t k r ! !」

優紀の登場にざわつく周りの空気。

どうやらこのゲーセンのホームチャンプの名は伊達ではないらしい。

「さてと、久しぶりだけど大丈夫かな……っ」と

当の本人は涼しい顔をしながら筐体にコインをセットする。  
使用キャラはやはりシュナイダーである。

試合が始まる。

1PはPN・姫選手のシュナイダー。

2PはPN・QMG選手のギューカク。

優紀は開幕バックステップをとり距離を離す。

ギューカク相手には接近戦はいわゆる死亡フラグである。

すかさずPボタンを入れ込み光の剣を生成する。

シュナイダーのPボタン、すなわち特殊行動は光の剣の生成である。

シュナイダーには光の剣ゲージというものがあり生成している間は常に消費されていきゲージが0になると自動的に剣は無くなり一定時間使えなくなるというものである。

剣を出している間は強く、出せない間の弱い立ち回りをどうカバーするかが優秀なシュナイダー使いの課題である。

まずは剣でけん制。この光の剣はなかなかリーチが長く使い勝手のいいものである。

一時剣は終い、すばやい動きで接近する。

ギューカクは大きなハンマーで叩き落とそうとするがシュナイダーはそれを回避し、裏側へ回るとそのままS、Mボタンを同時押ししてギューカクを画面端へ投げる（2ボタン同時押しで投げ行動ができる）。

バウンドしたギューカクに対し、すかさず剣を生成しSML236Lの基本コンボで攻撃を加える。

さらにその攻撃の隙をPボタンの剣をしまうモーションでキャン

セルしさらにそこから2 L 2 3 6 Lでつなぎ

P ボタンの剣生成でキャンセル、さらにS M L 2 3 6 Lのコンボで大ダメージを与え剣をしまう。

「おおっ！出たぞ姫スペシャル！」

ギャラリーからは歓声がおこる。

この何度も剣をしまつては生成し、しまつては生成しながらつなげるコンボは単純にダメージが高いだけでなくコンボ終了時に光の剣ゲージが満タンになっておりその後の立ち回りがかなり有利になるコンボである。

このコンボは優紀が開発したもので俗に”姫スペシャル”と呼ばれているのだ。

さらに優紀は2 1 4 Pで上空から光の剣を生成するシャイニングレインを放ち相手を固め攻めを継続する。

その後もガードの崩し、立ち回りなどの徹底した動きでQ M G氏にストレート勝利する優紀。

「さあ、どんどんかかってきなよ！」

まるで子どものようにガッツポーズで喜び次の対戦相手を募集する優紀の姿はいつもの思慮深そうなものは一切感じられない。

2人、3人と次々に対戦相手をK Oしていくうちにどんどんと時間はずぎていく。

気づけばもう午後のいい時間帯になっていた。

あまり帰りが遅くなるとI R I Aを心配させてしまうかもしれない。

ゲームもそこに優紀は家にかえることにした。

「ただいまー」

夏といえどもすこしあたりが暗くなる時間、優紀は家に帰宅する。

「おかえりなさい優紀ちゃん」

「ただいまIRIA」

優紀はすっかり夕飯時の匂いにつられ思わずキッチンに顔を出す。

「今日のご飯はなに？」

「はい、今日はから揚げですよ」

見ると確かにたくさんのから揚げが揚げられている。

「っていうか凄い量……いまに始まったことじゃないけど」

そう、IRIAはなぜかいつも料理をたくさん作る。

まあ食べてみたら結局いつの間にか完食しているのだが。

「はい、出来上がりです」

そういうとIRIAは食器をテーブルへと運ぶ。

私はというと手伝おうとするといつも

「私の仕事ですから」

と、IRIAは譲ろうとしないのだ。

そんなわけでとりあえずテーブルにつく優紀。

「いただきまーす」

「はい、どうぞ」

優紀が食事を始めるとIRIAはいつも隣に座って食事の手伝いをする。

自分で食べられるからといういつも

「私の仕事ですから」

と、やはり譲ろうとしない。

普段は素直なくせにこんなところだけは妙に頑固なのだ。

まあそんな日常にもすっかり慣れてしまったので私はもうなにも言わない。

こんなことを繰り返していたら私は料理はおろか食事の仕方まで忘れてしまつかもしれない。

「それはおおげさですよ優紀ちゃん」

と、いつの間にやら声に出していたらしい言葉にIRIAが突っ込みを入れる。

「おおげさといえばこんな食事自体がおおげさだとおもっただよねえ……」

私は食事中、まったく手をあげることとはなく終始IRIAに”あーん”をしてもらうのだ。

恥ずかしいというか、みっともない感じもする。

「それは私の」

「仕事ですから、でしょ？」

いつもの台詞を発しようとするIRIAの言葉にかぶせるように優紀が先に言ってる。

「わかっているのだったらじっとしててください。はい、あーん」

いつもの日常では私がIRIAのイニシアチブを奪っているのに食事の時だけこの始末だ。

このままやられない放題なのも癪なので反撃してやることにした。

「そっぴやIRIA、私の出した宿題わかった？」

宿題とは今朝がたにIRIAに質問した”ロボットと人間の違いについて”のことだ。

このロボ娘はなにか答えをみちびきだしたのであるのか？

「ないのです」

一言だけ、IRIAが答える。  
なんだって？

「あー……IRIAさん？ないのです、とは？」

この言葉の意味を瞬時に理解することができずに聞き返す。

「ですから、私たちに違いはないのです」

えっと……つまり私とIRIAは一緒ってこと？

「あのね……いくらなんでも違いくらいはあるでしょ」

よもやこんな答えが返ってくるとは思わなかった。

もつとあたふたする姿が見られるとおもっていたのに。

「まずあんたは食事しないでしょ」

「できない理由があるのです」

「そんなシステムを積んでいないからでしょ」

「違います」

「何が違うの」

「違うのです」

「だから何が」

「優紀ちゃんにはわからないことです」

「はあ？なにそれ、否定をするなら説明をしてよ」

「@:「@:23@」:5・（& a m p・）82だからです」

「ほら、そうやってすぐノイズを出す」

「ノイズなどだしていません」

「きつと演算処理に失敗したのね、今日はもうシャットダウンしなさい」

「違います」

「だからなにが」

「私は（ ） u ” p p ” + + : ; . . . : . 1 p」

「だからなにが！」

「……」

埒が明かない。

今日のIRIAは一体どうしたというのだろうか？

こんなに外見は人間なのに、この子はやはり融通の聞かないロボットだ。

そもそもこの質問自体がこの子に対しての差別発言だったのかもしれない。

” ロボットと人間の違い ” ？

ずっと一緒に暮らして、仲良くして、そんなことをはつきりとさせてどうする？

いまさらそんなことを突きつけて、一体何になるというのだろう。IRIAに悪いことをしてしまった。

軽率だった。

「ごめんIRIA……私はあなたを下に見ているとかそんなんじゃないくてただあなたならどう答えるか興味があっただけだったの」



「いえ……優紀ちゃんは謝らなくていいのです。まだ不完全である私の不始末です」

「IRIAは不完全なんかじゃないよ」

「私は不完全です」

「そんなこといつちゃ駄目だよ」

なんていったらいいんだろうか……。

「そんなこと言ったらさ、私なんか数学はできないわ色んな忘れ物はするわ落し物はするわりバサ昇竜（格闘ゲームでのテクニック。なんらかの技で相手の攻めを切り返すこと）に失敗するわでミスだらけだよ？」

それに比べたらこの子なんて私なんかよりも精巧に生活している。

「そついう……. 物ですか」

「そついうもんなのよ」

言葉を選ぶって大変だなあ……。

私の思っていることがそのまま伝わればいいのに。

「伝わっていますよ」

少し笑顔になったIRIAが私の目をみて言う。

「優紀ちゃんの思いはいつでも丸聞こえです」

そうか、そうだったね。

「そうか、そうだったね」

「はいっ」

そんなやり取りがおかしく感じて、二人は万遍の笑みで笑いあうのだった。

食事を終え、自室に戻った優紀は一日の疲れからベッドに倒れこむ。

オーディオに手を伸ばし音楽をかける。

今日はベートーヴェンの”エリーゼのために”だ。

「はー……疲れた」

まさかIRIAがあんなに”人間っぽい”とは思わなかった。

いままではやっぱりどこかで一線を引いていた部分があったがやはり私にとってIRIAは家族だ。

そんなどこかに違いがあるとかないとか、考えるのはやめよう。しょうもないこと考えるくらいならなにか楽しいことをしよう。

そうだ、Pモバでもしよつと。

優紀は携帯を取り出すとさっそくPモバを起動する。

デフォルメされたシュナイダーがフィールドに出現する。

<こんばんは、姫>

チャットメッセージが入る。

今日同じパーティになったナナからのメッセージだ。

<こんばんはー>

私もあいさつを返す。

知らない人に姫って呼ばれるのには抵抗があったがこのナナにはある程度好感を抱いているのであまり気にならなかった。

<今日も凄かったですね、姫スペ>

姫スペというのは私の開発したコンボ、姫スペシャルのことだろうが問題はそこではない。

この人物は今日、あの場にいたのだ。

<見てたんですか？>

<はい、じっくり見せてもらいました>

向こうは私のことを知っていて、私は知らないなんてなんかずるい。

<声をかけてくれたらよかったのに>

<少し恥ずかしかったもので……>

まあそれはそうだ、私とて話しかけられたとしたら緊張していたに違いない。

<そういえば姫は”プロトモジュール”って知ってますか？>

続けてナナからメッセージが届く。  
プロトモジュール？なんだろう？

<知らないです、なんですかそれ？>

<通称PM。これを携帯に装着するとプロトが使えるようになるのです。>

……はい？

プロトってP Pの世界で魔法ってことだよ？

<えっ？どどういうこと？>

<……というたい文句で配布されているおもちゃですよ>

あ、なんだ……そういうことか。

<具体的にはそれはPモバの機能を拡張するもので色んなことができるようになるそうです>

へえ、それは凄い。

ちょっとやってみたいかも。

<なるほど、それはどこで売ってるの？>

<それが今は試験利用中で非売品らしいんです>

なんだ、残念。

<でも世界中の何人かの人はずでに手にしていて、色んなサービスをうけているらしいです>

それはずるいなあ。

私もほしいぞ。

<なんとか手に入れる方法はないの？>

<そこで姫の出番ですよ>

ん、これまたどうということなのだろう。

<私の出番？>

<今週の日曜日に野中FRTでPPクロスファイトの大会が開かれるそうです。その優勝景品だそうです>

ほほう、それはなんとしても勝ちに行きたい。

これは明日から修行しないといけないな。

<わかった、優勝できるように頑張るよ>

<はい、私も応援してますよ>

こんなチャットをしている間にもPモバでモンスターを倒すのは怠っておらず結局寝る時間帯になるとレベルは30になっていた。ナナもちよこちゃっているらしくレベルは41になっていた。

「あら、もうこんな時間か……そろそろお風呂に入って寝ようかな」

<そろそろ落ちますね、ではまたノシ>

そうチャットのログに残すと私はお風呂に入ることにした。

自分の部屋を出てリビングに行くとIRIAと誰かがなにか話をしていた。

……っていつかあいつは！

「和真っ！」

「え？ああこんばんは水無瀬」

なんでこいつがここにいるんだろう？  
というか、IRIAとなんの話を？

「悪い水無瀬、俺もう帰るから……じゃあまたな」

そういつて去ろうとする和真の肩を掴み動きを静止させる。

「ちょっと待つてよ、なんであなたがここに？」

それもIRIAと……。

「まあ……ちょっとな。もう帰るわ」

そういうと和真は私の手を振り切って家を出て行った。  
なんなのよあいつ。

人の家に上がりこんでおいてあの態度。

「ねえIRIA、和真と何の話してたの？」

あくまで特に気にしてないという風に問いたです。

「……すみません優紀ちゃん」

どうやら言えないことらしい。

ロボットにプライバシーはいらない、とまでは言わないけど私人蚊帳の外みたいでおもしろくない。

「そう……じゃあ私お風呂に入ってくるね」

色んなわだかまりを抱えつつ私は当初の目的どおりお風呂に入ることにした。

不貞寝……不貞お風呂ってやつかな。

次の日、昨日のことなどすっかり忘れいつもどおりの朝を迎えていた。

「おはようIRIA」

「はい、おはようございます」

うん、いい笑顔だ。

この子を見ていると今日も頑張るぞって気になる。

「今日の朝ごはんは？」

「今日は苺のジャムパンですよ」

……はい？

それは昨日も食べなかったっけ？

それについての話もしたと思うんだけど……。

「あかさ、IRIA」

「はい、なんでしょう？」



「なんで2日連続で苺ジャムなのさ」

IRIAは少し困った顔をしたと思ったたら急に頭を下げてきた。

「ごめんなさい、すぐ別のものを用意します」

そういつてテーブルの上の朝ごはんを片付けようとするIRIAを私は静止させる。

「大丈夫大丈夫、昨日も言ったけど”別にいいけど嫌”なだけだから、ね？」

でも……と、渋るIRIAを半ば無理やりイスに座らせると私もその隣に座る。

「ほら、はやく食べさせてよ。自分で食べちゃうよ？」

「だ、駄目です。私の仕事です」

すぐさまパンを適度な大きさにちぎり私の口へ持ってくる。

「ん……んぐ、ずるいよIRIAは」

パンを飲み込みわざとふてくされたように言う私。

「だってこんなに優しくて可愛いんだもの、なにも言えなくなっちゃう」

「そ、そんなこと……は」

「あはっ、照れてる照れてる」

少し頬を赤く染めるIRIA。  
でもこれはプログラミングされたことであって……いや、そんなことを考えるのはもうよそう。

「ほら、早く食べさせてよ。学校に行かなきゃ」

「は、はい優紀ちゃん」

こうして、なんだかんだとありながら私たちは暮らしている。  
こんなひねくれた私にとってIRIAは最高のパートナーなのだ。

「ご馳走様」

「お粗末様でした」

早々に食事を終わると私はカバンを手に取り玄関へ向かう。

「じゃあ、行ってくるね」

「はい、いつてらっしゃいます」

今日の学校もまたPモバでもして過ごすかな……。そんなことをのんびり考えながら私は学校へ出発するのだった。

S t a r t   D a y ?

家を出た私を待っていたのは和真だった。

「なんでいるのさ」

「なんとなく、一緒に行こうかなと」

「まあいいけどさ」

意味がわからないやつなのは前からだ。  
別に困ることも無いのでとくに突っ込むこともないだろう。

「女が邪悪であることを証明せよ」

は？今なんと？

「アメリカで有名な冗談だよ」

ああ、もしかしてGirls are evilのことかな？

証明：

女には金も時間もかかる (girls require ti  
me and money) から

G i r l   "   T i m e   x   M o n e y

時は金なり (time is money) だから

T i m e " M o n e y

金は諸悪の根源 ( m o n e y i s t h e r o o t o f  
a l l e v i l ) だから

M o n e y " ( E v i l )

最初の公式

G i r l " T i m e x M o n e y

に第2式を代入して

G i r l " M o n e y x M o n e y

G i r l " ( E v i l ) x ( E v i l )

G i r l " ( E v i l ) 2

G i r l " E v i l ( 証明終 )

Q E D !

…… こんな感じだったかな？

まあわりと簡単かつ、ちょっと面白い話だよなこれ。

「大正解だ、さすがは水無瀬だな」

「4ちゃんまとめスレで見たことあるしね」

「ん？なんだそれは？」

「ああいや、こっちの話」

なんだ、意外とそっち方面の知識には疎いのか。

「それで？」

「ん？」

いや、ん？じゃなくてさ。

「なんでいきなりそんな話？」

「ああ、そのこと」

彼は空をぼーっと見上げるとまるでその先になにかを見るように言った。

「俺とお前には、どれだけの差があるのだろうか」

差？特にないとは……思うけど？

「いや、今の知識な。昨日テレビで見たんだ」

さっきから話が繋がっているのか居ないのかよくわからない。  
こいつは一体何が言いたいのだろう。

「そうなんだ。なんチャンネルで？」

「4チャンネル」

なるほど4チャンネルか。

ちなみにここという4チャンネルとはテレビのチャンネルのこと

であり私がさつきいつていた

”4ちゃんまとめスレ”とはまったくの無関係だということをご理解いただきたい。

まとめスレというのは某大型掲示板に掲載されているネタをまとめてくれているサイトである。

「でも4チャンネルなら私も見てたけどなあ……」

そう、私も同じチャンネルを見ていたはずだがそんな放送は見なかった。

「夢でも見てたんじゃないの？」

そうだ、きつとそうに違いない。

彼は寝ぼけてたんだ、きつと。

「違うね」

そんな私の考えを一言で否定する彼。  
一体なにが違うというのか。

「俺は確かにその放送を見た。これに間違いはない」

ふむ、ならば私が夢を見ていたとでも？

「だが水無瀬、お前は同じチャンネルをつけていたにも関わらず放送を見てはいない。これにも間違いはない」

それはそうだけど……でもそれには矛盾が発生してしまう。  
その二つが成り立つ論理とは……？

「例えば……」俺のしている世界とお前のしている世界に違いがある」とすればどうだ？」

なるほど、パラレルワールドってやつね。

「ならその差ってどこで生まれるんだろう？」

「そう、俺はそれを聞いたかったんだよ」

相変わらず遠まわしに話をするやつだ。

「放送を見た俺と見てないお前。なぜこんな差が出てしまったんだ？」

うーん、難しい問いだな。

なぜ差が出てしまったか……か。

「やっぱあれじゃない？どっちかが寝ぼけてて夢と現実がごっちゃになってるんだよ」

そうとしか言いようがない。

「そうだな……お前は寝ぼけていたんだ」

ふっ、と笑いながらこちらを見る和真。

え？寝ぼけていたのは私のほう？

「そんな……私は確かに見てないよ」

「絶対に、だな？」

「うん、絶対」

「それは記憶に克明に残っているんだな？」

「も、もちろん」

「どうした？自信がないようだが」

「うー……あんまり突っ込まれると自信なくなってくるよ……」

向こうがあんまりにも自信満々だからこっちが間違っているように思えてくる。

「俺はさ、なんか凄いやつがつい昨日世界作って俺たちに適当な記憶与えたーなんていったら多分信じるよ」

どっかで聞いた話だな、それ。

「こんなに情報がばらばらになるなんて、適当なやつなのねそいつ」

そついうと彼はくっく、と笑い始めた。

「そうだな、ほんと適当なやつだ」

「なによその笑いは」

「いや、なんでも」



「ほんと変なやつ」

こいつと話をしていると楽しいような疲れるような、多分どっちもだな。うん。

「それで、あんた本当にそんな放送見たわけ？」

「さあね」

えらい投げやりな返答をありがとう、ばか。

「どつたの急に？」

「学校」

彼の指差す先には確かに私たちが通うべき学校が目前にあった。それにしても……。

「私と和真にどんな差がある……か」

あいつは一体どんな世界を見ているのだろうか。

……いや、馬鹿馬鹿しい。

見ている世界など同じに決まっている。

また適当なことを言って私を混乱させようとしているんだ。なにが”さあね”だよ。

そんな放送はやってなかったよ。

まあでも、登校の時間潰しにはなったからいいか。

こうしてまた私の半日学校生活が始まった。

## Princess Alliance?

「おはよう優紀」

「ああ、おはよ」

声をかけてきたのはもちろんクラスメイトの宮子さん。

「あんた結局昨日HRサボって……」

ん、HR？

ああ、そういえばそんなこともあったっけ。

「過ぎた事をいつまでも気にしちゃ駄目だぞ、みやぴー」

「誰がみやぴーだったの。ま、別にいいけどさ」

「え、これからみやぴーって呼んでいいの？」

「違う！そっちじゃない！」

相変わらず朝から元気な娘だこと。

「誰のせいだよ、まったく」

あら、聞こえてたんだね。

「そりゃもつまる聞こえだよ。で、今日も授業は受けないわけ？」

「うん、なんたって私には心強いPモバがあるしね」

「はあ、あんたに教えなきゃよかったよ。まあ教えなくてもそのうち勝手に気づいてたと思うけどね」

まったくもってその通りだよ。

さてと、ちょっとログインしてみますか。

まずはホームサイトへ。

色んなニュースやらなんやらが更新されている。

ランキングに目を通すとやはりというべきか、カズの名前があった。

レベル122……正直やりすぎじゃあないのかと思う。

ランキングでいうと4位、かなり上位者のようだ。

私も頑張ろうっと。

こうして今日の授業<sup>ゲーム</sup>が始まった。

はてさて、いつもなら暇なこの授業の時間。

でも私はいい暇つぶしを手に入れた。

それがこれ、Pモバである。

携帯オンラインゲームであるPモバはいつでもどこでも気軽に楽しめるものだ。

たとえそれがいまのような授業時間でも、ね。

ログインすると同じパーティであるナナがいた。

なんだかいつもいるイメージがあるけど……。

<こんにちはー>

とりあえず挨拶のメッセージを送っておく。

<こんにちは>

あら、早いお返事で。

とりあえずモンスターを倒して経験値を稼ぐことにする。

私が今いるのはレコンキスタ地方という始まりの地点から少し進んだ地方である。

なぜなら現在レベル30である私にはこのあたりがちょうどいいモンスターの強さだからだ。

しばらく戦っていると別の場所に居たであろうナナがこちらへやってきた。

<修練の滝というのはご存知ですか？>

やってきたと同時にメッセージが来た。

修練の滝？確かPPシリーズでは毎回お世話になる良いレベル上げの場所だよね？

<はい、それが今日このPモバにも実装されるそうなんです>

おお、それは嬉しい原作再現だね。

<それはどこにあるの？>

<はい、このレコンキスタから南のほうへしばらく歩いた先にあるそうです。今から私行こうとしてたんですよ>

<そうなんだ。じゃあ一緒に行こうか？>

<はい>

おお、ナナがいると冒険がスムーズに進んで良い感じだ。  
レベル的にも頼りになるし、色んな情報も教えてくれる。

昨日の大会の話だってナナから聞かなきゃわからなかったことだしね。

レコンキスタから少し離れるとモンスターも徐々に強くなっているがナナと同行しているのでやられてしまうことはまずない。

それに加えナナのキャラクターは堕天使エリアという魔法専門キアラであり、回復魔法にも長けている。

私は回復してもらえる上にステータスアップの魔法までかけてもらえるので少しくらい自分より上位のモンスターが現れようと倒すことが出来た。

しばらく進んでいくとなにやら大きな崖が見えてきた。

どうやらこれがさっき言っていた修練の滝らしい。

< あ、ここですよ姫 >

ナナの後に続き修練の滝へ入っていくとメッセージウィンドウには

” 場所限定魔法EXP×1.5 ”

という文字が表示された。

どうやらこの場所でモンスターを倒せば経験値が通常の1.5倍に増えるらしい。

ここならばレベル上げの効率も上がるに違いない。

とは言ってもどうやらこの場所には制限時間が設けられているらしく一日に1時間しかいられないらしい。

なんとなく精神と の部屋を思い出したのは私だけで良い。

いや、タイムセールとかにも似てるか……違うか？

まあいいや、果てしなくどうでもいいなこんなこと。

とにかく時間が惜しいのでさっさとモンスターを倒していくことにする。

戦闘のローテーションは大体こんな感じだ。

まずナナが私にステータスアップの魔法をかける。

私が前にでてモンスターとの戦闘に入り、ナナはその間に攻撃魔法の詠唱をする。

私が近接戦闘でいくらかダメージを与えた後、ナナの魔法で止めを刺すという作戦である。

しかしこの作戦ではナナの魔力消費が激しいので時には私が一人で戦ったり、微力ながらナナも近接戦闘で援護しながらの戦いもしたりした。

そうしている内に一時間目の授業終了を示すチャイムが鳴ってしまったので一度ここでログアウトすることになった。

レベルはほんの数分で6上がり36となった。

さて……休み時間か。

少し喉が渴いたのでなにか飲み物を買うに行くことにしよう。

そうして席を立ち上がるとなにか後ろに気配がすることに気がついた。

な、なんだろう……お化けか!?

「……そんなわけないでしょう」

振り向くとそこには私のツッコミをしつつあきれた顔をしたクラスメイトの皇円寺姫竜こうえんじきりゅうさんがいた。

整った顔立ちに長い綺麗な髪をポニーテールにして雰囲気からものなにか凄みを感じ取れる人物である。

と、優等生っぽいイメージが付きがちな彼女だが成績はいたってふるわず、しかも体育の授業には一切出席しないという不真面目ぶりも見せる。

しかも私は知っている。この間なにかの拍子に彼女が”血が性的な意味で大好きな変態”だということを知ってしまったている。まったくもってギャップのある人物、そして私が語ると出落ちな感じがする彼女だが別に私は嫌いなわけではない。むしろどこか一般人離れした感じに少し興味と好意をもっている、というのが正直な感想である。

そんな彼女が一体私になんの用があるというのだろうか？

「あなた、よくそんな本人の目の前で言いたい放題言ってくれるわね」

ありや、どうやらさっきのプロフィール（出落ち）は丸聞こえたようだ。

相変わらずの失策である。なにやってるんだ私。

「まあいいわ、なぜいま私がここにいるかわかるかしら？」

なぜあなたが今ここにいるか、だって？

理由1　・”ここ”は自分のクラスだから。

理由2　・いなければならぬ理由があなたをここに縛り付けているから。

理由3　・実は私のことが好きだから。

理由4　・私の近くに落ちていたお金を拾いに来たから。

理由5　・飛ばした紙飛行機がこの辺に飛んできたから。

理由6　・神様が決めた予定調和の一つにすぎないから。

理由7　・気分。

理由8　・あ。

「あなたのそういうところが気に入らないわ……」

しまった、滑った。

宮子ならここで

「意図的に正解を外すな！それに理由が意味不明なのがあるし、最後になるにつれて手抜きになってるじゃないか！！」

というナイスなツツコミをしてくれるだろうし、少し期待していたんだけど……。

「お生憎様、あなたのペースに巻き込まれるのは面倒なの」

可愛げのないやつめ！可愛いけど！

「それで、あなたに用があるのだけどいいかしら？」

やっぱりそういうことか。

一体何の用だというんだろう？



## Princess Alliance?

「あなたが野中FRTでのチャンプ、姫ね？」

彼女から発せられた言葉に私は思わず萎縮してしまう。

いくらなんでも色んな人に知られすぎではないのだろうか。

しかしお嬢様のなイメージがついていた姫竜さんにしては珍しくゲーセンの話題だなんて。

まあ私の勝手なイメージだけだね。

そんなことはさておいて、一体どう答えたものか。

ナナにもすっかり知られてしまっているし、ここでいまさら隠すこともないだろう。

そう思った私は姫竜さんに本当のことを言うことにした。

「うん、そうだけど？」

私のその言葉を聞くと彼女はやっぱりか、とでも言いたげな表情を見せた後、視線はしっかりと私を捉えたまままた質問を投げかける。

「今度のPPの大会、もちろん出るんでしょうね？」

その内容というのはどうやら今度行われる大会についての話だった。

優勝すればプロトモジュールという携帯の機能を拡張できるものがもらえるという噂のアレだ。

「うん、狙うは優勝のみ！ってね」

本当に優勝する意気込みだった私は自信満々にVサインをする。  
しかし彼女の反応はそんな私のノリとは正反対に非常にクールなものだった。

「優勝……できると本気で？」

彼女は腕を組み、そこはかとなく自信あふれるような口角をつり上げた表情でこちらを見ると挑発のような言葉を私に送る。

「それはなに？もしかしてあなたが私を止めるとでも？」

先ほどの彼女の自信。

もしかすると姫竜さんが出場して私を倒す、そんな話の展開のようないきがした私は負けじと質問で返してみる。

「ええ、あなたの伝説を終わらせてあげるわ」

どうやら本当に姫竜さんが出場するらしい。

自分で言うのははばかれるがPPの格ゲーは一日二日で上達するものではない。

日ごろの練習の積み重ね、さらには研究の結果いい戦いができるものだと思っている。

現に私はそうして地元のゲーセンのチャンプにまでなったのだから。

しかし私の噂はどうかよくわからないところに飛び火しているらしい。

彼女の言う伝説とは一体何なのだろう？

「よくわからないけど、私は負けないから」

ただそう言い返すと彼女はその長い髪をふわっとなびかせながら後ろを振り返ると少し上げた右手の指を2本ピツと立てる仕草をしながら自分の席へと帰って行った。

返事のつもりだろうか、そんな彼女の余裕の姿を見て私は俄然大会へのやる気を燃やすのであった。

キンコンカンコン……。

そんな時、休み時間の終わりを告げるチャイムが鳴り響いた。

「……あ、飲み物買えなかった」

何のために自分の席を立ったのだろうか。

大人しく座りながら少し悔やむ。

それというのも全部姫竜さんのせいだ！

と、全然関係のないところからも闘志を燃やしながら皇円寺姫竜への勝利を誓うのだった。

私もまだまだ子どもだなあ……。

頬杖をつきながらぼーっと黒板を意味もなく見つめながら私はそう呟く。

自分では冷静だとか思ってたけど、案外燃えやすいタイプだったんだな私。

こんなことに今気がつくなんて、何年生活しているんだよって話だよな。

……何年だっけ？

ま、いつか。もう授業が始まる。

早くPモバにログインしなければ。

さーで、頑張るぞー。

そうして2時間目、3時間目とゲーム三昧で過ごした私。  
今は3時間目と4時間目の間の休み時間である。

ずっと携帯を見つぱなした私はすこし凝ってしまった肩をほぐすように首を回したり拳でばんぽん叩いたりしていると目の前に宮子が立っていた。

「そうやってゲームばかりしてるから肩凝るんだよ」

お気遣いどうもありがとうございます宮子さん。

しかし私から娯楽をとったらもはやなにも残りやせんですよ。  
でも宮子は私にあきれながらも心配してくれているので素直に聞くことにはする。

「うんうん、わかってるよ。それで宮子はなんでここに？」

別に話をそらしたかったわけではないがわざわざ目の前に立っているということはなにか用があるということなのだろう。

「なんでだろうね？なんで私はここにいるんだろうね？」

宮子がここにいる理由？

そうだなあ……例えば。

理由1　・”ここ”は自分のクラスだから。

理由2　・いなければならぬ理由があなたをここに縛り付けているから。

理由3　・実は私のことが好きだから。

理由4　・私の近くに落ちていたお金を拾いに来たから。

理由5　・飛ばした紙飛行機がこの辺に飛んできたから。

理由6・神様が決めた予定調和の一つにすぎないから。

理由7・気分。

理由8・あ。

「意図的に正解を外すな！それに理由が意味不明なのがあるし、最後になるにつれて手抜きになってるじゃないか！」

おいしいアクションありがとうございます。

いや、ここまでまんまだとは思わなかったよ。

「おーけーおーけ、それで何の用？」

あんまりぴったりの宮子の返答に気分をよくした私はここでやつと素直に話を聞く姿勢をみせる。

我ながら面倒な性格である。

「いや、次体育だよ？わかってる？」

ツギタ・イイク？

すいません、日本語をお願いします。

「体育だよ！た・い・い・く！」

うい？え、あ……体育か！

まったくもって想定外の言葉を聞いたときってなんか言葉として認識できないことってあるよね？

今その症状を身をもって体感できた。

うん、実に不思議な感覚だね。こんなに簡単な言葉を認識できないなんて。

でも今はそんなことは問題じゃないね。

次が体育ということは私は体操服に着替えなければならないという事で。

そして私は体操服を持ってきていないわけで。ということは私は体育の授業を受けられず科目得点が減点されてしまうというわけで。

それは私の思い描く学生生活には少しばかりの不具合があるわけ  
で。

「つまり私はどうすればいいんだろう？」

すっかり立ち往生してしまう私。

そんな時天使の声とも思えてしまう声に私の失われかけていた意識は間一髪のところまで引き寄せられた。

「お待たせ優紀ちゃん」

そんな声に振り向けば立っていたのはおそらく体操服が入ってあるであろう紙袋を持った私の相棒、IRIAであった。  
本当にいざという時に頼りになるねこの娘は。

「ありがとうIRIAっ」

あんまりに愛おしくなったので思わず抱きしめる。  
ついでに頭をナデナデもしておく。

「ゆ、優紀ちゃん恥ずかしいですよ……」

なにを言うか、私たちは姉妹みたいなものでしょうが。

……ん？IRIAにこんなプログラムはされていたっけ？

抱きついたら恥ずかしがった……いや、そんな機能はないはずだ。  
少し確認してみる必要があるそうだ。

「IRIA、コマンドプロンプトオープン」

「了解、コマンドプロンプトオープンします」

これはここ最近IRIAが行ったプログラムを確認するためのモードである。

大量のプログラムが教室の壁へと、さながら映写機のごとく投影される。

一番最近行ったコマンドは一番下……えっと、これはなんだ？

”kanzyou.exe”

かんじょうえぐぜ？

……感情実行プログラム？

どういうことだろう。

そんなものはマニュアルにも見たことはない。

「プログラムの詳細を表示して」

「Error、このプログラムにはロックが掛かっています」

ロック？

IRIAのユーザーは私だ。

ロックなんて掛けられるのは私だけのはずだ。

「ロック内容の表示を」

「了解、ロック内容の表示」

壁の画面にはそのロック内容が表示されていく。

” 当個体の中枢記憶メモリ、および深層波長のロック。当個体にセプトされた電子頭脳・COL81は国際級機密を持つものである。なお、当プログラムへのロック権利者権限は個体ユーザーではなく当機が独自で行うものとする”

つまり……これはとても重要な部分であり、IRIA自身がロックを掛けている……と？

それに国際級の機密？

一体なんのことを言っているのかわからない。

もう少し深く調べてみなければ。

「検索、” k a n z y o u ” について」

「了解、” k a n z y o u ” サーチを開始します」

IRIAの中にあるk a n z y o uと名のつくファイルを片っ端から検索する。

さっきのプログラムの中身確かめるためだ。

「検索終了。該当する単語は見当たりませんでした」

存在しない？

そんなわけがない。先ほどコマンドで確認したじゃないか。こうなったら直接起動させてみよう。

「” k a n z y o u . e x e ” の起動」



「了解、”kanzyou.exe”を起動します」

さあ、これでどうなるのか。

いったいこのプログラムはなんなのだろうか。

これで全てがわかるはずだ。

……と、私は湧き上がる探求心を抑えられず思わず興奮してしま  
うが返ってきた答えは呆気ないものだった。

「”kanzyou.exe”の起動に失敗。File Not  
Found...」

ファイルが……ない？

> i 2 2 6 1 2 — 2 3 6 0 <

頭がこんがらがってきたぞ。

ならばさっき起動したものは一体なんなのだ？

つい数分も前の話じゃないか。

そんな時、私の頭の中によぎる言葉……”国際級機密”

「なるほど……私のような一般市民には公開できない、と」

ふう、とため息をつきどうやらこれ以上の詮索は無駄だと判断し

た私はあきらめることにした。

「IRIA、コマンドプロンプトクローズ」

「了解、コマンドプロンプトクローズ。通常モードに移行します」

画面は閉じられ、いつものIRIAに戻る。

先ほどの私の行動が理解できないのか、きょとした様子でこちらを見ているIRIA。

……ねえIRIA、あなたにどんな秘密が隠されているの？  
私の探究心は失われたわけではなかった。

## Game to Fight?

IRIAの謎の解明もそこに私は体操服に着替え授業に出ることにした。

謎もいいがまずは自分の、目の前にある生活が第一だ。外に出ると早速点呼を行っていた。

IRIAのことで少し時間を取られたがぎりぎり遅刻を免れることができた。

「皇円寺は……また休みか」

点呼をとっている先生が出席表を見ながら言った。

皇円寺……姫竜さんか。

そういえばいつも体育の授業には出ていなかったな。

別になにか特別な理由があるとかそういうのは聞いたことないし、サボりなのかな？

姫竜さんの体操服姿なんて見たこと無い。

普段の生活では凄く真面目なのにどうして体育だけは受けようとしなのだろうか？

今度聞いてみようかと思ったがあの子の性格である。

「あなたには関係ないでしょ」

とか言われてそっぽを向けられそうだ。

そんな私のもやもやした疑問もそこに授業は始まり、私は体育に没頭するのであった。

「ふう、疲れたあ……」

体育の授業を終え、教室のイスに倒れるように座り込むため息まじりにそう呟く。

身体を動かすことはわりと好きなので無駄にはしゃいでしまったのだ。

私に対して知的なイメージを持っている人はこんな一面を見て意外だというのが私自信それはぴんとこない。

私には活発なイメージをもってもらっていたほうがこっちとしても接しやすい。

ようはノリが大事だということだ。

今日授業はこれで最後なので学校はこれで終わり。

大会に備えてP Pの特訓をしないといけないのでゲーセンに寄っていくことにする。

雑音溢れ人ごみ溢れゲームに溢れる、ここ野中F R T。

私はいつも馴染みのゲームセンターにやってきた。

相変わらず平日でもにぎわっている場所だ。

もうすぐ大会も近いので特訓する人が増えてきているのだろうか。考えることは皆同じのようである。

空いている台に座りコインを投入し、ゲームを開始する。

向かい側には誰もプレイしていないのでC P Uとの戦いになる。

C P U相手といえどもやるべきことはたくさんある。

まずは新しいコンボの究明だ。

私がよく使う姫スペシャルは立ち回りとしては申し分ないコンボだ。

シュナイダーの真骨頂、光の剣を絶やすことなく召喚し使うことができるからだ。

しかしこのコンボは最近になって少しダメージ不足を感じるようになってきたのだ。

どうしてもゲージを残すことを優先にしまったため他のキャラよりも低火力になってしまう。

それを克服するため、私はゲージよりもダメージ優先としたコンボを開発しようとしているのだ。

CPU相手に試行錯誤をしながらコンボ開発を進めていく。

まずリーチが長く相手を吹き飛ばす効果のあるコマンド236Pのシャイニングソード。

これで相手を吹き飛ばしたあと、いつもなら剣を戻しゲージ回復し小技でのコンボで締めていた。

今回はそうではない。

バウンドした相手を地上を走る衝撃波、グラウンドソードで拾う。

グラウンドソードと共に自分もダッシュで接近し空中でエリアルコンボを決める。

コンボの締めはもう一度シャイニングソード。しかしここで光の剣ゲージは無くなってしまう。

これで相手をもう一度バウンドさせ光の剣無しのコンボを繋げていく。

ここでパワーゲージ（光の剣ゲージではない必殺技を放つために必要な基本的なゲージ）を半分消費し相手を高く上げる必殺技、ヘブリンパクトを使う。

相手を上に上げると同時に光の剣ゲージを回復するディスチャージをコマンド最速入力で行い半分ほど回復する。

ちょうど落下してきた相手を掴み、画面端へと投げる。

離れた相手に上から光の剣を降らす技、シャイニンググレインで追撃しとどめにパワーゲージをもう半分消費して必殺技、シャイニングソードブレイクで締める。

これで光の剣ゲージもパワーゲージもすっからかんになってしまふが相手にとてつもない大ダメージを与えることが出来る。

これを見ていたギャラリーは見たことのないコンボに思わず歓声をあげる。

「すげえ……さすが姫だ」

「これぞ真・姫スペシャルだな！」

「姫k t k r！」

などといった色んな反応が返ってくる。

なるほど、真・姫スペシャル。いい名前だとも思う。

新コンボの開発に成功したので少し休憩することにする。

さすがに集中力も切れて疲れてしまった。

休憩スペースのイスに座りぐーっと伸びをする。

その時、ふと目に入る人影。

なぜだろう、なんでもない人のはずなのになぜだか私はこの人を知っている気がする。

もやもやする気持ちを抑えきれない私はその人に声を掛けてみることにした。

「あ、あのっ！」

「は、はい？」

振り向いたのは私と同年くらいの女の子だった。  
ときどきする気持ちを抑えながら私は尋ねた。

「えっと……もしかして、ナナ？」

なんとなく、本当になんとかだがこの目の前にいる相手がいつもPモバで一緒にいるナナだと思ったのだ。  
なぜだか、理由はわからないけど。

「はい……よくわかりましたね」

私との出会いを喜んでいるような、少し困ってもいるような、いや恥ずかしがっているのか。

そんなはにかんだ表情で私を見るナナ。  
そうか、やっぱり合っていたんだ。

「改めまして……ナナと申します」

どこか上品な気品さえ漂う仕草に雰囲気を纏わせながら微笑みを浮かべ挨拶をするナナ。

ゲームでの会話もどこかそんな感じがしていたがやはりどこかのお嬢様だったりするのだろうか。

「私は……まあ知ってると思うけど、姫だよ」

もう二人は知り合っているというのに改めての自己紹介。  
なんとなくそれがおかしく感じられて二人でくすくす笑いあう。

「こんな形で会うことになるとは思ってなかったよ」

「はい、私もです」

「なんかこう、実際に会うと変な感じだね」

「はい、そうですね」

「なんでか知らないけどさ、なんとなくあなたがナナってことに気づいちゃった」

「そうですか」

「……うん」

「……」

「っ……」

なんだこれは。

果てしなく会話が続かない。

やはりリアルで会うと気まずいのか、向こうも話辛いのだろう。

「じ、じゃあ私はコンボも完成したしそろそろ帰ろうかなーと……」

乾いた笑いをしながら白々しくそんなことを言う私。

傍目から見たらなんとまあ下手なコミュニケーションだ、と疑われてしまいそうだ。

別に自分のコミュニケーション能力を高いとは思ってはいないけ



どさ。

でも、今日やるべきことは終わったのでちょうどいいかなと思ったのも確かである。

「はい、さようなら」

大人しげな表情と声色のままナナは私に手を振る。

ああ、なんというかこの子は落ち着いた人なんだな。

帰るきっかけを作り上げることに成功した私は手を振り返しゲームセンターを出るのであった。

なんというへたれ具合。

今日のナナとのチャットはなんだか気まずいものになりそうだし…。

ただ思ったことは、ナナが第一印象通りにとってもいい人そうであったなということである。

逆に向こうには少しがっかりさせてしまったかもしれない。

ゲーセンチャンプはへたれだった！なんちゃって。

……笑えないので次会った時は積極的にコミュニケーションをとりたいと思う。

「ただいまー」

そんなこんなで私はようやくゲームセンターから帰宅したのである。

ゲームだけの関係だと思っていたナナとあんな形で出会うとは思っていなかったなあ。

人生そんなことがおこるかわからないものだ。

……それはそうと、いつもならすぐに返事するはずのIRIAの  
声がしない。

「IRIAー？ただいまー」

「はい、おかえりなさい優紀ちゃん」

「うん。あ、もしかしてご飯つくってた？」

「はい、今日の晩御飯はハンバーグですよ」

「そっか、じゃあ出来上がったら呼んでよ。それまで部屋にいるから」

「はい、ごゆっくりしててください」

IRIAは部屋へ向かう私にお辞儀をするとキッチンへ戻っていた。  
ふむ、いつ見ても律儀な子である。

とりあえず部屋で一休みすることにした私はベッドに倒れこみ携

帯を取り出す。

「ナナ……か」

なんとなく今日出会い、そしてその前から知り合いであったナナのことを思い出す。

「Pモバちよつとつけてみようかな？」

晩御飯まではまだ時間もあることだし、少しだけログインすることにした。

フィールドに私の持ちキャラ、シュナイダーが召喚される。

パーティメンバーを確認してみるとやはりナナはログイン状態であった。

相変わらずの、安心と信頼のログイン率だ。

とりあえずチャットメッセージを送っておく。

<こんばんはー>

するとすぐに返事が返ってきた。

<はい、こんばんは>

早速今日の私のへたれレッテルを取り払うために会話をする事にする。

<今日のことだけど……あれは私も緊張してて……。普段ならもうちよつと喋れたんだけどね>

とりあえず私の性格に誤解が無いように弁解しておく。

これでわかってくれるだろうか？

「…………あれ？」

いつも即レスのナナにしては珍しい、返事が返ってこない。  
なにか用事かな？

……と、のんきにそんなことを考えていると返事が来た。

<今日のこと……と、言いますと？>

ん？

そんなこと言われても逆に私が「と、言いますと？」と、言います  
と？」と、聞き返したいのだけど。

一体どういふことなのだろうか？

<今日は今日だよ、ゲーセンでちょっと話してじゃない？>

これでナナがどんなに忘れっぽくても私が言わんとしていること  
は理解できるだろう。

<すいません、なんのことを言っているのかちょっと……>

って、あれ？

全然伝わってない？

<今日ゲーセンで私と会って、話をしたよねって話だよ？>

<いえ……私は姫とはまだ直接面識したことはないですけど……>

これは一体なんだ？

何が起きている？

私が夢でも見ていたのか、それともナナは嘘をついている？  
考える、私。

まずナナは私に嘘をつくことでどんなメリットがあるのか？

お金なんて絡んでいない。

その他の目的があつたとしても私を騙すことには関係はないだろう。

では……ナナが嘘をつくことで喜び、快感を得る希有な人間である。

いや、そんなわけはないよね……。

そんなわけで正直なにも思いつかない。

やはり私の夢？

いやいや、私だって立派な高校三年生だ。

夢と現実の区別くらいはついている。

それともなにか？

これが和真の言っていたパラレルワールドの出来事っていうやつなのだろうか？

あいつの言っていたように事を考えてみる。

私とナナには違いがある。

その違いとは私はナナと出会ったがナナは私と出会っていないという。

二人とも嘘をついておらず、勘違いもしていないとすればそれはパラレルワールド間の出来事だったということ。

なーんていうけれど、まずパラレルワールドがなんなのか具体的に知らない上にこの思考は少し無理やりすぎないか？

しかしそうではないとしたら一体なんなのだろうか？

否定したからには私もなにかしらの可能性を定義しないことにはパラレルワールドの存在とやらを肯定することになってしまう。

うーん……。

い、今は保留にしようそうしよう。

べ、別に認めたわけじゃないんだからねっ！

……誰に言っているんだろうか私は。

たまに自分で自分のことがわけわからなくなったりする。

キヤー、ヨルノテンションotteコワイ。

いかん、本気でなにがどうなっているのかわからない。

すこし調べてみる必要があるそうだ。

もし次にあの偽ナナ？に出会ったら詳しく話を聞いてみよう。

出会わないなら出会わないでもうこのことについて悩まないでいいし、ポジティブにいこう。

常に前向きであれ私。

私に逃走はないのだ。

退いたり媚びたり省みたりすることはあるかもしれないけどね。

退くと逃走に何の違いがあるのかは自分でもわからない、という

よりないのかもしれないがそこは些細なことだ。問題じゃない。

とりあえずもうすぐご飯のはずだ。

<変なこと言つてごめんね、私もうご飯食べなきゃだから一旦落ちるねノシ>

そうメッセージを残すと私はログアウトした。

さて、今日はハンバーグだっていったっけ。

私は今日の晩御飯のことを考えつつリビングへと足を運ぶ。

「IRIAー。もうご飯できたー？」

……。

あれ？また返事が返ってこない？

「IRIA？」

キッチンを覗くもそこには作りかけのハンバーグが置いてあるだけだ。

ミンチ状になって放置された肉が

「早く焼けよ」

と、言っているようだった。

まったく、こんな生意気な肉を置いてIRIAはどこへいったのだろうか？

私の家はそんなに広くはないので家にいるならばさっき呼んだ声で十分に聞こえるはずなのだが……。

「まさか、外？」

そんな考えが私の頭をよぎる。

いやいや、そんなはずはない。

ロボットであるIRIAが職務を放棄してどこかへ出かけるなどありえない。

いやしかし、ならばなぜ返事をしない？

キッチンにいない？

さっきのナナのことといい最近の私の日常は私を混乱させてくれる。

まったくもって迷惑なものだ。

しかたない、IRIAが戻ってくるまで私がこのハンバーグの相手をしてやろう。

「相手をする、といってもお前を調理したりするわけじゃないぞ？  
私は調理なんてできないからね」

ハンバーグに意思があつたとしたらきつとずっとこけてたに違いない。

「じゃあ相手をするってどうする気だ！？」

そんなハンバーグの悲痛の叫びが聞こえないでもない。

「ふふん、相手をするっていうのは遊び相手をするってこと」

ええ、もちろん比喻でもなんでもないですとも。

私はこいつで、遊ぶ！

ふふふ……思わず口元が緩む。

ハンバーグは命の最後を覚悟したのか、まったく動くことなく私を、えっと……見ている？

昔誰かが言っていた。食べ物で遊ぶな、と。

ならば私はこう述べよう。

食べ物で遊ぶ、と。

そもそもなぜ食べ物で遊んではいけないのか？

おおそ理由は二つある。

まず食べ物は自分たちが生きるエネルギーである。

生きるために必要なもので遊ぶのはもってのほかだ。

我々は食べ物によって生きさせられているということを忘れてはならない。



二つ目はその食べ物を食べられずに死んでいく人も中にはいるということだ。

食べ物で遊ぶというのはその食べられない人たちにとって失礼にあたる行為だ。

その遊んだ食べ物がその人にとってどれだけ大事か、ということである。

しかし考えても見てほしい。

もし、だ。

”食べ物で遊ばねば死んでしまう”人がいるとする。

馬鹿馬鹿しい話だが、真面目に考えてほしい。

そんな人がいないという可能性は0ではないのだ。

もしそんな人がいたとしたら、それでも遊ぶなと言えるのだろうか？

ある意味ではそれは”生命活動をやめろ”といわれていることと同義である。

人に死ねと言っている悪人の言葉に耳を貸していいのだろうか？

それとも、それは例外とでも言うのだろうか？

そんな差別をする悪人の言葉に耳を貸していいのだろうか？

ゆえに私は遊ばせてもらう。

悪人の言葉に従っては私まで悪人になってしまう。

そうだ、私が世界でたった一人の善人だ。

皆のものよ、食べ物で遊べ！

それが悪から足を洗う唯一の方法だ！

「……なーんてね」

いつもの妄想というか考察というかなんというか。

今まで私を恨めしそうに見ていた生意気なハンバーグはもうただのハンバーグだ。

喋ることも、もうないだろう。

そうやって時間をつぶしていると玄関のほうで音がしたような気がした。

「あ、もしかしてIRIAかな？」

一体こんな時間にどこへ行っていたというのだろうか？

最近妙に私の見当違いのことばかり起こるロボットだ。

まずはそれを問いたさなさいといけない。

You & I & Best Family? &

「あ……優紀、ちゃん？」

IRIAは帰ってきて私の顔を見るなり罰の悪そうな顔をする。  
別に私はIRIAが勝手に外出したことについては怒ってはいない。

だがそれはあくまでIRIAがただのロボットであつたらの話だ。

私はIRIAを家族としてみているのだ。

いふなればIRIAは私の妹のようなもの。

妹が夜も遅くなる時間に私に黙って外出したことについて怒っているのだ。

「IRIA、どこ行つてたの？」

だから私は優しく、そう尋ねたのだ。

「……すみません」

なのにこの娘は言えませんか、そう言うのだ。

IRIAは私の所有物などではない。

何度もそう思うと、決めていたじゃないか。

IRIAが何をしようと、それはIRIAの勝手だ。

私はいつもIRIAによくしてもらっているではないか。

少しくらいの勝手は許してあげるべきだ。

そう、頭ではわかっているはずなのに……。

「そう……じゃあ私はもう寝るから、おやすみ」

「あ、あの……晩御飯は」

「今日はいい」

「でもちゃんと食べないと」

「お腹いっぱいだから、それに眠いし……もう寝るね」

「優紀ちゃん」

「おやすみIRIA」

IRIAの言葉に耳を貸さないまま私は自室へと戻った。

ベッドに倒れこみ枕に顔を埋める。

私の頭はすぐに冷静モードに入る。

バカなことをした、と本気で後悔した。

どうしても、IRIAは絶対服従のロボットだと思ってしまう。実際世界ではそう使われているし、そうプログラムされている。

しかし私はIRIAを家族として扱うと決めたのだ。

それなのにこの始末。

私も所詮IRIAをただのロボットとしてしか見ていないのか……

…。

いや、違う。

人間同士だって、喧嘩はする。

今のはただの姉妹喧嘩だ。

妹の少し目に余る行動に対して、姉が怒っただけ。

ただそれだけの話だ。

明日は仲良くなれているだろうか？

こんな小さなことは早く忘れて、またIRIAと話したい。

なんだかんだでIRIAに対して甘い私はそんなことを考えながらいつの間にか意識が落ちていった……。

目覚めはなぜかいつもよりもよかった。

いつもはIRIAに起こしてもらっているが、一人で起きることが出来た。

もうすこしベッドでゆっくりしていたかったがこういうものはだらしていると余計にだるくなってしまうことは周知の事実である。

何度もそんな体験をしている私はえいやと掛け声をあげつつベッドから跳ね起きた。

うん、すつきりだ。

そのままりビングへ行く。

まだいつもよりは少し早い時間だがIRIAは朝ご飯を作っているはずだ。

「……IRIA？」

IRIAはテーブルの前においてあるイスに座っていた。

テーブルには昨夜の晩御飯とおもわれるハンバーグ。

ずっと私を待っていたのだろうか？

IRIAはただ、目を閉じたままじっと座っている。

昨日はあのままシャットダウンしてしまったのだろう。  
私はIRIAの隣のイスに座る。

「昨日はごめんね」

そう言いながら私はIRIAの髪をなでる。

IRIAから手を離すと私はただ座ってIRIAが再起動するのを待つ。

時計の音だけがこの場の静寂を支配する。

数分たった後、IRIAがゆっくりと顔を上げる。

「指定の時間になりました。IRIA、リブートモードに移行します」

IRIAの体からピツといういくつもの電子音とブーンというHDDが高速回転する音が聞こえてくる。

IRIAの、目が開く。

「視野の確保に成功。フォーカス、ホワイトバランス共に最も適した状態へと変更…… s u c c e s s (成功)」

IRIAの瞳孔が人間味を増していく。

キュイツと音がしているのはIRIAのアイカメラが焦点を合わせているのだ。

「視野データの収集に成功。状況確認…… 緊急事態ではないことを確認。当機は通常モードで起動します」

IRIAはこうして現在の状況を確認し、通常通りに起動するか、緊急モードで起動するかを決める。

今はこうして平和な、なにも起きていない平日。

それを確認したIRIAは安定した起動方法、すなわち通常モードで起動することにしたのだろう。

「メインOSの起動……容認。以降の制御はメインOSによる管理下で行う」

どうやら無事にメインOSの起動に成功したようだ。

メインOSというのはいふなればIRIAそのものである。ここから先は、さっきの機械的な言動ではなくIRIAの言葉で話してくれるだろう。

「メモリを確認……agree。当个体、”IRIA”のロードに成功。Welcome world back IRIA」

これで完全にIRIAは眠りから覚めた状態となる。

「……マスターの起床を確認。あれ、優紀ちゃん？」

私の顔を見るなりまだすこしロボット言葉の抜けないIRIAはボケたことを言う。

ロボットにもとんだ寝ボケさんがいたものだ。

「おはようIRIA」

「Good morning・あ、いや言語が……あー、いー、うー。Yes、おはようございます優紀ちゃん」

ぺこりとお辞儀をして挨拶するIRIA。もはやどこから突っ込んでいいのかわからない。

「IRIAが起動直後で安定しないのはわかっているからさ、無理しないでいいよ」

「Yes agree, my sister. Please wait...」

そのちゃっかり”sister”……つまりお姉ちゃんか。そんなことを言っちゃうIRIAがまた可愛い。

「IRIA、完全に起動に成功しました。おはようございます優紀ちゃん」

キリッとした顔で、綺麗なお辞儀を、完璧な言葉使いでこなしたIRIAだった。が惜しいところが一つある。

「IRIA、それさっきもいった。……まあおはよう」

そう指摘するとIRIAは真っ赤な顔をして（オーバーヒート？）取り乱しながら言った。

「Reboot・Reboot・Reboot・マイシスター、IRIAは”再”再起動を所望します」

「駄目」

これはこれでおもしろいので修理はしないでいる。

そんなわけでロボットなのにやけに人間味のあるIRIAだった……。



「今日の朝ごはんはハンバーグにあわせ、ご所望していたお米ですよ」

なんだか朝ごはんにしてはとても豪華だがこれは私が昨夜食べなかった晩御飯である。

「おお、ようやくお米が……！」

そう、私はこれまで苺ジャムパンに対してぶーぶー文句を言っていた。

とうとうお米が食べられるのだ。

別にそんなに期待していたわけじゃないけれど、ただなんとなく頼んだものが出てくるのは嬉しいものだ。

「このローテーションだと、明日はパンですか？」

突如IRIAがそんなことを言う。このローテーションってどのローテーションだ？

今日はお米、昨日はパン、おとともパンだったよね？

パン、パン、お米……と、きているんだから次はお米では？

「あ……そうでしたね。次はお米ですね」

やけに素直に引き下がるIRIA。

なんだろう、IRIAの間違い？

いやいや、IRIAは”勘違いをしない”はずだ。

リビングで和真となにか話をしていたり夜に勝手に外に出て行っ

たり……。

また少し、IRIAに対しての不信感……いや、不安感が募る。でもそれと同時に、なんだかIRIAが人間っぽいような感じもしてきて嬉しいような。

よくわからない。

もやもやする内にもIRIAは私の口に食べ物をどんどん放り込み気づけば全て食べ終えてしまっていた。

時計を見ると、もう家を出なければいけない時間に近くなっていた。

早起きはしてもやっぱり家が出るのはいつもどおりなんだな。

「じゃあ、いつてきまーす」

「はい、いつてらっしゃい優紀ちゃん」

食事の後片付けをするIRIAに声をかけ、返事が返ってきたことを確認すると私は玄関から家を出た。

また今日も、日がな一日暇な学校が始まる。

S t a r t   D a y ?

「おはよう水無瀬」

「なんであんたがまたいるのさ」

家を出ると和真が家の前に立っていた。

昨日といい今日といい、一体何が目的なのだろう。

「一緒に学校行こうかと思ってさ」

なるほど、それもそうか。

しかしこの男は私に気でもあるのだろうか？

なぜわざわざ私と登校しようなどというのだろうか。

「そりゃ、水無瀬と話すのが楽しいから。ちなみに惚れてはいない」

「だから私の心を読むな！セクハラだぞっ！」

「いや……ブツブツ言ってるの丸聞こえだからなあ……」

ふむ、また私の悪い癖が出たようだ。

「それで？」

「ん？」

いや、ん？じゃなくてさ。

またなにか面白い話題でも持ってきたのかと思っていたがどうや

ら今日は特にないらしい。

「今日は水無瀬の話を聞かせてくれよ」

「私の？」

相変わらずこの男の考えはわからない。

私の話なんぞはこんな朝の登校時間の暇つぶしに利用されるようなネタはないはずなのだが。

そんなことを考えていると、和真は私の度肝を抜く質問をしてきたのだ。

「ナナ」 って子とは……最近どうだ？」

……なぜ和真がナナを知っているんだろう？

確かに和真もPモバをしているはずだが別に私と同じパーティーではない。

私と同じパーティーではないということはナナとも接点はないはず。

「ちょっと、なんでナナのことを知っているの？」

疑問はそのまま言葉になって現れる。

私の悪い癖だ。

その私の問いに和真は面食らったような表情をしたと思ったらすぐそれを隠すようにポーカーフェイスを装った。

なんだろう……たまにIRIAに感じるときのような違和感を、今も感じた。

この妙な、気持ち悪い感覚は一体何なのだろうか？

「お前、もしかして忘れたのか？」

思考停止に陥っていた私の脳は和真の言葉によってサルベージされる。

「忘れてたって……なにを？」

「お前がナナのことを俺に教えてくれたんだろうが」

あれ……そうだったけ？

「おいおい、しっかりしてくれよ……」

待つて、今思い出す。

まず落ち着いて整理しよう。

私が、和真に、ナナのことを、教えた。

「昨日のことだぞ？」

私の思考中の頭に和真の言葉が流れてくる。

昨日、昨日私が和真にナナのことを……。

「あ、思い出したっ」

ぼんつと手を叩き、やっと繋がった記憶に満足する。

そうだ、私は昨日ナナのことを和真に教えてやったんじゃないか。つい昨日のことを忘れるなんて私もほんと馬鹿だなあ。

「はははっ、なんだよ。パラレルワールドが絡んだのかと思ったじゃないか」

和真は笑うとパラレルワールドの話を持ち出す。  
ああ、私も思わずそんな考えが一瞬よぎったよ。

「笑うなつてば。ちょっと無意識にぼろつと言っただけでしょ。忘れてたつて仕方ないじゃない」

「ああ、すまんすまん。でも、脅かすなよな。まさか素で忘れてたとは……」

「まったく……まあ忘れる私も私だけどさっ」

きつと疲れているであろう頭を刺激するようにぐらぐら左右に動かす。

ちゃんと働け、私の頭よ。

「次からはボケるんじゃないぞ水無瀬」

「言われなくたってそうするわよ」

「うん」

和真はそれまでの会話を文字通りぶった斬るようにただ、うなずいた。

「どつたの？」

「学校」

彼の指差す先には私の登校すべき場所である学校があった。  
気づかないうちにもうついてしまったらしい。

今日もさくつと学校終わらせて遊びに行こう。  
まだ校門すら抜けていないのに放課後のことに頭を働かせる私であつた。

うん、いい感じに非模範生徒だと思う。

これが私である所以。私らしさであるのだ。

「で、あんたは教室に着いて早々になにをぐだっているんだ」

教室に着くなり自分の席へ座り込み顔を伏せている私に模範生徒、宮子が言った。

「登校中に放課後なにして遊ぼうか考えてて、教室着いてみたらまだ一時間目すら終えていないことに絶望している図」

顔を伏せたまま私は言う。きっと宮子をあきれた表情で私を見下ろしているだろう。手を腰に当てたりしながら。

「ああ、すっかり放課後モードだったのが実はまだ授業が始まってもないものな。そりゃだるくもなるけど、それはあんたがアホなだけでしょ」

へいへい、なんとも言いなされ。

私はもう立ち上がらないぞ。

私はどこぞの連邦の白いアレではないのだ。

「このまま放課後まで寝ちやいそう……」

「待て、本当にあんたは学校に何しに来てるんだ」

「出席日数」

「だろうね」

もはや会話するのも面倒になってきた。  
このまま寝ちゃってもいいのだろうか。

「あんたのような不良には修正が必要だ。春香、この子なんとかしてー」

とうとう自分だけでは私を起こすことが不可能だと思ったのか、  
宮子は超模範生徒である春香に声を掛け始めた。

宮子さん、それはずるくない？

春香に説得されればあわよくば授業を真面目に受けてしまうかも  
しれないじゃないか。

ほら、今にも春香が私の目の前にやってきて説教をするぞ。  
来るならこい。今日こそは反抗してやるぞ。

……あれ？

「おつかしーな？今日春香休みらしい」

これはラッキー。

しかし、おかしいって？

別に学校を休むくらいどうってことないでしょ？

「いや、春香はあんたのようにサボったりはしないし……夏風邪と  
かな？」



あれはあれで結構ガサツなところがあるし、大方クーラー付けっぱなしで寝て風邪をひいたりでもしたのだろうか。

「まあ、そういうわけだから私は今日は寝ることにするよ」

どうやら春香は学校に来ていないみたいだし、これで私を阻む障害は無くなった。

「ちえ、明日春香に言いつけるからね」

そういつと宮子は自分の席へ帰っていった。

ふん、負け犬の遠吠えというやつだ。

まあ明日私がどんな修正を受けているかは知らないがとりあえず今は休ませて貰おう。

ふわぁ……おやすみなさい……。

## A k a s h i c R e c o r d s ?

パチッパチッ……。

ノイズというよりは火花に似た感覚が私の頭の中でスパークする。

ここは教室、だったか？

記憶と意識が混乱している。

私は水無瀬優紀。よし、大丈夫だ。

しかしなんだろうか。

胸の辺りがとても痛む。

それにこれは……涙？

私は泣いているのか、なぜ？

とても辛くて、悲しい？

そんなはずはない、私はいま充実した生活を送っているはずだ。  
そうだ、辛いことなどなにもない。

ないはずなのに……なぜ涙が止まらないのだろう。

そして……とても寒い。

今は夏ではなかったのか？

それにここは……窓の外？

確か落下防止のためのものだったか……そんな場所に私はいる。

こんなところでなにをしているのだろう。

右手に握っている手のひらには、なぜか私のものではない消しゴムがある。

はやく教室に戻ろう。

……あれ？

窓が開かない。

鍵がかかっているのだろうか？

私がここに降りたということはなにかしらの理由があるわけで、そして鍵がかかっているということは私に気づかずに鍵を閉めてしまったということなのだろうか？

……いや、今嫌な想像が私の頭の中をよぎった。

”もし、私がいることを知っておきながら鍵を閉めたとしたら？”

そんなことをする生徒が私のクラスにいただろうか。

でも、もしもそうだとしたらそれはイジムパチツパチツ！

思考中の私の頭はまたもスパークする。

ああ、視界が真っ白だ。

次に思考できるようになったときにはまた知らない場所にいた。

「ここは……もしかして遊園地？」

周りを見渡すと様々なアトラクションにたくさんの人々。

しかしそれらはさながら昔のビデオの一時停止ようにモノクロの人、機械、景色はピタツととまっている。

「冷たっ……！？」

気がつくと私はたくさん缶ジュースを抱えていた。

どうしてこんなにいっぱいジュースを持っているんだろう？

それになぜか私の心はまた悲しいと、そういつている。

この状況が悲しいということなのだろうか？

周りに見知った人物は居そうにない。

遊園地に一人でいることが、悲しい感情の正体なのだろうか？

……そういうものではないような気がする

またも嫌な考えが私の頭をよぎる。

”もし何者かによって、意図的にこの状況がつくられているとしたら？”

でも、もしもそうだとしたらそれはイジmパチッパチッ！

思考中の私の頭はまたもスパークする。

ああ、視界が真っ白だ。

次に思考できるようになったときにはまた知らない場所にいた。

ここは……学校のトイレ？

見ると私は上は制服、下はジャージという奇抜な格好をしていた。そして洗面台で本来履いているはずのスカートを水で濡らしている。

なんで私はこんなことをしているんだろう？

自らスカートを水で濡らして、なんの意味があるのだろうか。

そしてやはりというべきか、私の心は悲しい感情に満たされている。

それには怒りの感情も含まれていた。

一体この状況はなにがどうなっているのだろうか。

グチュツ。

その時、スカートを触る手に嫌な感触を感じた。

どうやらスカートにへばりついているようだ。

心なしか、粘着性があるようにも思える。

「ああ、そうか」

ここで私は確信した。

私はこのスカートにへばりつく謎の粘着体を洗っているのだ。

確かに学校でスカートが汚れてこんなところで洗っているのは少し惨めだ。

悲しい感情はそのためのものだろうか。

それだけでこんなに涙が溢れてくるものだろうか。

悲しくて泣いているというよりは、悔しくて泣いている……ような気がする。

しかし悔しいということは、これは汚したのではなく汚されたものなのだろうか？

でも、もしもそうだとしたらそれはイジムパチツパチツ！

思考中の私の頭はまたもスパークする。

ああ、視界が真っ白だ。

一体この身に覚えのない体験はなんなのだろうか。

意識が、はつきりしてくる。

授業を進める先生の声が聞こえてくる。

これは夢だったんだな。

そう私は確信すると目覚めることにした。

「ん……よく寝た」

どうやら目覚めは最悪らしく頭の中がぐわぐわんと朦朧する。

それでもなぜか、体がいつもより軽い。

眠っている最中に右腕に体重をかけすぎていたのか、痺れて動かせない。

仕方ないので左手で髪の毛に寝癖がついていないか確認する。

あ、ちよつと跳ねてるみたい。

「……えっ？」

鏡を取り出すとそこにはなんと私ではない者の顔が映りこんでい

た。

いや、違う。

これは私の顔だ。

しかし、なぜこんなに悲しそうな、覇気のない、虚ろな表情をしているのだろうか？

私は笑顔をつくろうとした。

だが頬の筋肉はまるで言うことを聞かず、つり上がらない。

「違う……こんなの私じゃない」

それになんだ？

周りの生徒は皆知らないやつばかりだ。

宮子も春香もない。

そして教室を見渡すと、私はそこに意外な姿を発見する。

「・・・あ・？」

なぜお前がそこにいるのだ？

私はその者の名前を呼ぶ。

その者はびつくりしたような表情をみせると私の名前を呼び返してきた。

「……ちゃん？」

その瞬間、私は全てを理解した。

あれも、あれも、あれも全て思い出した。

涙が溢れ出した。

いままで隠れていた感情が一気にあふれ出したのだ。

唇が、がちがち震えてうまく喋れない。

手も、震えて言うことを聞かない。

目の焦点が合わない。

呼吸がどんどん荒くなる。

嫌だ、嫌だ嫌だ嫌だ！

これは全て夢だ！夢なのだ！

心の闇にすくう魔物が、じつと私を見つめている。

来るな……来るな来るな来るな！

「うわあああああああああああああ……！！！！！！」

バチバチバチッ！！

また、私の頭がスパークする。

今までよりも大きく、弾けて、そして泡のように消えてなくなつた。

## Game to Fight?

「ん……よく寝た」

どうやら目覚めは最高らしく頭の中もすっきりしている。

だけれど、身体はいつもどおりの寝起きらしくだるい。

眠っている最中によだれでも垂らしたのか、下に敷いてあったプリントが濡れている。

慌てて証拠隠滅するためにプリントを丸めて近くにあったゴミ箱へ捨てる。

髪の毛に寝癖がついていないかを確認する。

あ、ちよつと跳ねてるみたい。

「これでよし、と」

鏡を取り出すと寝癖を直す。

いつもどおりの私だ。

今日はずっと寝ていたのか、もう時計は学校終了の時間を指していた。

さてと、今日もゲーセンに寄って行こうかな。

毎回のごとくHRをスルーした私はさっさと学校を出て行くのであった。

そしてやってきたのはやはりここ、野中FRTだ。

たくさんさんの猛者（なぜか此処ではもうじゃと読む）達がしのぎを削っている。

近日に大会が行われるためにキャラの最終調整に忙しいのか、いつもよりたくさん人がいるようにも見える。



私もその中の一人であり、ゲームの練習にしにきているのだ。  
空いている筐体にコインを投入しゲームを開始する。

昨日とうとう姫スペシャルの完成に成功したところだ。

今日もなにかしらの発見があれば大会優勝にまた一歩近づくことが出来る。

あとは立ち回りとコンボ精度を課題にすることにする。

まず立ち回り。

こればかりはCPU戦ではなく対人戦でないと学べないことも多い。

誰かが乱入してくるまでは練習することはできない。

そしてコンボ精度。

これは対人戦では練習しにくいが逆に言うとCPU戦では練習しやすい。

とりあえず誰かが乱入してくるまではコンボ精度の練習をして、誰かが乱入してきたら立ち回りの練習をすることにした。

CPUとの対戦になる。

ひたすらコンボの練習をする。

またCPUとの対戦。

ひたすらコンボ。

またまたCPU。

またコンボ。

CPU。

コンボ。

「よし、ラスボス撃破……あれ？」

そうしている内にアーケードモードをクリアしてしまい、ルールにより席を譲らなければならなくなってしまった。

そうか、そういえば私は有名だったんだ。  
そんな私にわざわざ挑んでくるなんていうのは休日暇な時間がある時だけだ。

こんな大事な時期にそんなことをするやつはいない。

むしろ私に最後までプレイさせ、ゲーセンのルール（というかマナー）で交代させるほうが確実だ。

並んでいる列を見るとさすがにいい時間になったのか、長蛇の列。再び並ぶ氣力を失った私は帰ることにした。

「いや……その前にナナを探してみよう」

そうだ、昨日ちょっと気になることがあった。

私はゲームで知り合ったナナという人物に実際に会った。

会ったのだがゲームのほうでのナナはそんなことは知らないという。

嘘をついているようにも見えなかったなのでその謎を探ろうと決めたのだった。

周りを見渡すもたくさんの人ばかり。

どうも見つきりそうも無い。

しばらく探してみるもナナらしき人物を発見することはできなかった。

疲れたし、もう帰ろうかと思っていた矢先……。

「こんばんは」

澄んだ声に振り向くとそこには私の探していた人物、ナナがいた。

「あ……こんばんは」

相手のお辞儀につられ私も頭を下げお辞儀をする。  
出会ってさっそくだけど、謎の解明に急ぎたいと思う。

「失礼だけど……あなたは本当にナナ？」

「はい、その通りですよ」

「Pモバの？」

「はい、そうですよ」

「私と一緒にパーティを組んでいる、ナナだよね？」

「はい、そうですよ」

「いつも私と話をしている、ナナだよね？」

「はい、そうですよ」

「昨日、私と会ってないっていつてたのは？」

「そのことでしたら……少し寝ぼけていたのかもしれない」

「寝ぼけ？」

「はい、寝ぼけです」

最近私の周りではどうやら寝ぼけがはやっているらしい。  
ここまで多いと、和真のパラレルワールド説も捨てがたくなって

くる。

まあでも誰しも寝ぼけている間はよくわからない受け答えをしているものだ。

そうか、寝ぼけか。そういうことか。

私の抱いていた謎はこんな形で解決してしまった。

なんだか腑に落ちないが事実とはえてしてこういうものなのだろう。

「そつか、じゃあ今日はもう遅いからまた後でね？」

「はい、さようなら」

私はナナと別れると早々に帰路についた。

ナゾ解明、20ピカラット入手ってね。

こうして私こと、優紀教授は意気揚々と家に帰るのであった。

「ただいまー」

「おかえりなさい優紀ちゃん」

出迎えるのは可愛い笑顔をこちらに向けるIRIA。

「ご飯できたら呼んでね。それまで部屋で休んでるよ」

「分かりました。ではごゆっくり」

軽く会釈するとキッチンへ戻るIRIA。

きつとIRIAのことだ、私が疲れていると知って晩御飯を少し遅らせるような気遣いでもしているに違いない。

出来のいい妹ロボットを持つと私もゆつくりとできる。

部屋に戻った私はとりあえずベッドに倒れこむ。

「ふいー……疲れた」

ころんと転がり天井を見つめる私。

そうだ、今日はまだPモバにアクセスしてなかったっけ。

私は携帯を取り出すとPモバへログインすることにした。

## A k a s h i c R e c o r d s ?

<こんばんは、姫>

ログインするなりナナからメッセージが届く。  
本当にナナはいつもいるイメージがある。

<うん、こんばんは>

とりあえず挨拶を交わす。  
ついでに聞きたかったことも聞くことにする。

<ナナはこの時間によく寝ちゃうの？>

なにせ寝ぼけてここにログインするくらいだ。  
この時間にうたた寝することもあるだろう。

しかし返ってきた返事は私の想像していたものとは違うものだった。

<いえ……そんなことはないですけど。どうしてですか？>

あれ、違うのか。

なら昨日はたまたま寝ぼけてたってだけかな？

<だって今日言ってたでしょ？昨日は寝ぼけてただけだって>

<え……？なんのことですか？>

ん？どういことだろう？

また寝ぼけているのだろうか？

<今日もゲーセンで私と会ったでしょう？>

<いえ、私は今日はずっと家にいましたよ。それに今日も、とは？>

<嘘、昨日と今日私と会って話をしたでしょう？>

<あの……昨日も言ったように私はまだ姫と直接の面識はないですよ？>

どういうことだ、これは。

寝ぼけているようにはとても見えない丁寧な文章。

私が会ったあれは……誰だ？

やはりこれは和真の言うパラレルワールド？

いや、そんなものは存在するはずがない。

あまりにも不可解すぎる出来事。

そこにナナは私に唐突に言葉を投げかける。

<アカシックレコードというのは……ご存知ですか？>

アカシックレコード……？

まったく知らない言葉だがなぜか聞いたことがあるのは多分気のせいだろう。

<なにそれ？>

<この世に起きる全ての出来事を記憶しているもの、だそうです>

<全ての出来事？>

<はい、過去に起きたことも……そしてこれから起きることも、全て>

予言……とはまた違うものなのだろうか？

<この世で起きることは全てアカシックレコードにより定められているといえます。今ここでこうして私達が話をしていることも、私達が生まれそして死んでいくことも>

なるほど、なかなか興味深い話題だ。でも……。

<なんで今それを私に伝えたの？>

<今の話が全て事実だとして……姫と、その……私がゲームセンターで出会ったというのは果たしてアカシックレコードに記されていたことなのでしょうか？>

つまりナナはこういいたいのだ。

本当は出会ってなどいないのでは、と……。

つまり私の勘違い……？

いや、確かに私は話した。

そのことを鮮明に覚えている。

<そのアカシックレコードに記されていないことは、絶対に起きないの？>

<アカシックレコードとはすなわち世界そのものです。記されていないこと＝起きないこと、ですが例外はあります>



<例外……？>

<ええ、それはアカシックレコードは一つではない可能性があるという事です>

<待つて。複数あつたらおかしくならない？例えば私がここでリングを食べることが記されたレコードがあるとするでしょ？そして食べることはありえないと記されたレコードがあるとしたら……？>

<つまりはそういうことですよ。皆、自分の中に世界アカシックレコードを持つています。ただしそれは虚像にすぎない。本物ではありません。皆、一樣に自分の見る世界が正しいと思い込んでいるだけです>

ナナが言いたいことがなんとなくわかった気がする。

私の中でナナと出会ったことは事実。

ナナの中で私と出会っていないことも事実。

だからそれは二人とも自分の見ている世界の結果に過ぎない。

あくまで一人称視点なのだ。

ならば三人称視点のアカシックレコードにはどう記されているのだろうか？

先ほどのナナはそう言いたかったのだ。

どちらが正しいかなんて私達にはわからない。

私達を三人称の視点で見ている人……つまりは神。

神にしか世界で起こった真実の事象を知ることにはできないのだ。

<ねえ、この世界でなにが起こっているの？>

明らかに不可解な、不思議な出来事。  
私はかすかに不安を感じる。

<分かりません。ただ分かることは私達は真実のアカシックレコードに背かなければならないということです>

<どういうこと？>

<今日のニュースは見ましたか？>

<いや……まだだけど>

<……これです>

するとナナから今日のニュースデータが送信される。  
中にはこんなことが書かれていた。

各地で起こる多数の不可思議な自殺事件！  
ついにその数は10000件を越えた。  
自殺者の携帯の待ちうけは全て”アストラルの導き”なる文字が  
描かれた画像に変更されていた！？

10000件を越える自殺事件……？  
それに携帯の待ちうけ画像が同じものに変更されている？  
アストラルの導きって……？

<このアストラルというのはおそらくアストラル光のことです。これはアカシックレコードにおける記憶媒体だとされています>

<つまり、この人達はアカシックレコードに記されたとおりに死ん

でいった……？>

<そうなりますね>

<世界に決められたとおりに？>

<その通りです>

<でもそれっておかしいよ。なんでこんな急に人が死に始めるの？  
しかもわざとアカシックレコードのことを匂わせるようにさ。絶対に、なにかの事件に違いないよ>

<そうですね……ただ、私達とて例外ではありません。いつ消されてしまふかわからないのです>

<一体……どうしたら……？>

<姫、私はアカシックレコードは都市伝説ではないとおもっています>

<これから起こることが全て記されている……？>

<ええ、しかし私はここで独自の解釈をします>

独自の解釈？

<アカシックレコードとは何者かによって管理されているデータベースであり、これまで起こった全ての事象、そしてこれから起こる全ての事象を記録しているものではないか……>と>

<つまり……私達人間はその何者かによって歩む人生を決められていると？>

<それだけではありません、今回の事件はその何者かの連中の中で謀反が発生し、アカシツクレコードを書き換えた者がいます>

<書き換えた……？>

<やつはアガスティアの葉に描かれたプログラムを書き換えアカシツクレコードに進入、私達人類を滅亡させようというつもりです>

ちよ、ちよつと待つて。

よくわからない単語の羅列だ。

かなり突拍子もない理論だが今の私に反論する理論がなかった。真実味こそなかったが私は提示された一つの可能性にすがりつくことしかできなかったのだ。

<私は……どうしたらいい？>

<姫はアカシツクレコードを探してください>

私が？アカシツクレコードを？

<姫は最近不可解かつ不思議なことが周りで起きませんでしたか？>

不可解かつ不思議……といえば。

そういえば今までにたくさんあったはずだ。

IRIAのバグ、なぜか家にいた和真、話が食い違うナナ、妙な夢を見た……私。

変なことだらけだった私の日常。  
なぜいまになって気づいたのか……。

<それはあなたが真実に触れる者、ナディ・リーダーだからです。  
ただの一般人には最近起こった不可解な事象は理解できていません。  
もちろん私も理解できていません。>

全ての違和感に気づくことができてるのは姫だけなのです>  
そうか……そういうことだったのか。  
私に起こる不可思議な出来事はそういうことだったのだ。  
私は世界を救うために動かなければならない。

<姫、あなたはきつとどこかでアカシックレコードを見たことがあるはず。どうか探し出してください>

<わかったよ。ナナも死んでしまわないように気をつけてね？>

<はい、姫も直感で行動しないようにしてください。その直感に従わないことこそがアカシックレコードに立ち向かう唯一の術です>

<了解、それじゃあそろそろ晩御飯の時間だから切るよ？>

<はい、ではまた>

私はログアウトするといままでの話を頭の中で整理した。

私は……ナディ・リーダー、真実に触れる者。

世界の真実を暴き出すのだ。

そしてこの事件を解決する。

私は携帯を閉じると部屋を出て、リビングに向かうのであった。

「IRIAー、ご飯マダー？」

リビングへ向かったのはいいもののテーブルにはお箸しか置いていなかった。

肝心のおかずやはまだキッチンの中で素材として眠っているらしい。

手持ち無沙汰の手でお箸を握りテーブルを叩く。

IRIAがいたら絶対に注意をしてくるまるで駄々っ子のような行動をするもリビングは平穏を保ったままであった。

「おい、IRIAー……」

何度もその名を呼ぶも返事がくる気配はない。

まさかこのお箸が晩御飯？

ははっ、まさかね。

IRIAが居ない理由はやはり昨日と同じ理由だろうか？

二日も連続で勝手にいなくなるなんて……怪しい。

「はっ、これがまさかアカシックレコード……決められた運命が書き換えられた事象？」

両手から持っていたお箸をぱつと離すと少々オーバーリアクションながらそんな考えが頭に浮かぶ。

おかしいことは全て悪いやつが書き換えたことによる結果。

IRIAがいないのも……そいつのせい？

もしくはIRIAがその主犯？

いやいや、そんなことはありえない。

考えれば考えるほどにわからなくなる。

ただわかっていることはIRIAがなにかしらこの事件に巻き込まれている可能性があるということだ。

無事に帰ってくればいいのだけれど……。

私は世界を救うのだ。

IRIAも、守ってあげないと。

いつの間にか消えうせてしまったお箸を探していると唐突に玄関から音がした。

「……IRIA？」

お箸のことなんかよりもIRIAの安否が大切だった私は玄関へ駆け出した。

「あ……優紀ちゃん」

「IRIA！？大丈夫？怪我はない？」

「あ、え……はい」

よかった、どうやら無事のようにだ。

「どこへ行ってたの？」

「優紀ちゃんの、飲み物を買いに……」

「私はそんな支持してないよね？」

「……」

心持強く当たってしまう。

IRIA、そんな悲しい顔をしないで。

私は怒っているわけじゃないの。

ただ……あなたが心配なだけで。

「なんで勝手なことをするの!？」

怒ってないよ、私はいたって冷静なのだ。

「だいたい最近のIRIAはなんなの!？私を困らせたいの？」

自分でなにを言っているのかよくわからないがおそらく優しい言葉をかけているだろう。

そうだ、そうに違いない。

私は、選ばれし者。

IRIAを、妹を救わなければならない。

冷静になれ……冷静になるのだ。

「……喉、渴いた。なにか飲み物ある？」

「はい、これを……」

IRIAは手に持っていたリングジュースを私に差し出す。  
いつの間にこんなものを？

「IRIA、ずっとキッチンにいたのにどうしてこれを？」

「え？ですからさっき買ってきたと……」



「勝手に外に出たの!？」

いま世界はアカシックレコードにより管理されている。  
いつ死んでしまうかわからない恐怖。

そんな中IRIAは外に出て行ったというのか？

「なんで勝手なことをするの!？」

怒ってないよ、私はいたって冷静なのだ。

「だいたい最近のIRIAはなんなの!？私を困らせたいの？」

自分でなにを言っているのかよくわからないがおそらく優しい言葉をかけているだろう。

そうだ、そうに違いない。

私は、選ばれし者。

IRIAを、妹を救わなければならない。

冷静になれ……冷静になるのだ。

「……喉、渴いた。なにか飲み物ある？」

「あの……それを」

IRIAは私の手を指差す。

そこにはしっかりと私の手によって握られたオレンジジュースがあった。

なんだこれは？

急に私の手に飲み物が現れた？

それにIRIAはなぜまだ晩御飯を作っていないのだ？

酷く喉が渴いてしまった。

私は手にしていたオレンジジュース……いや、ブドウジュースか。ペットボトルのキャップを空け、その液体を喉へと流し込む。味はわからない。というか、ない。

そりゃそうだ、これは確か天然水だったはずだ。

それにしてもなぜ私はこれを飲んでいるのだろうか？

そしてIRIAはなぜまだ晩御飯を作らないのだろうか？

「……で、IRIAはどうして玄関で突っ立ってるの？」

「いえ、ですから……飲み物を買いに……」

「嘘をつくなっ!!」

IRIAは身体をびくつと強張らせると俯き地面に視線をやった。

この娘は危険だというのに無断で外に出て行ったのだ。

あれほど駄目だといったのに。

外には……外には……。

……外にはなにがあるのだ？

なにが危険なのだろう？

どうしてIRIAは俯いているのだろうか？

なぜか床にはトマトジュースがこぼれている。

私がやったのか、IRIAがやったのか？

「優紀ちゃん、病院に行きましょう」

病院？病院だって!？

冗談じゃない。

あんな二つの人の命くらい救えないやつのところになぜ行かなければならないのだ。

私はなにも患ってはいない。

気狂いになつたわけでもない。

ただ寝起きなだけだ。

死んだっていくものか。

いや、死んだらいくことになるのか？

それに私は医者を目指していたのでは？

そう、そのために一生懸命勉強して……そして……今。  
なぜ私はこんなことをしているのだろう。

勉強、勉強しなきゃ。

こんな時いつも私を支えてくれた……支えてくれた？

誰かがいた気がする。

誰だっけ？

IRIA……じゃない気がする。

というかIRIAって誰だ？

ああ、なんだか眠くなってきた。

はやく部屋に戻って寝よう。

お腹すいたな……。

私は自炊をしていなかった気がする。

ならば誰がご飯をつくるのだ？

さあ？誰かがつくってくれるんじゃない？

「優紀ちゃん」

まあでもほら、私はアレ、アレだから今夜のオカズはハンバーグ

電車にひかれて綺麗なミンチになれきれず片

「優紀ちゃん!!」

「……え？」

IRIA?

ああ、飲み物を買ってくれてたんだっけ。

「ありがとうIRIA」

私はリンゴジュースを受け取るとさっそくその乾いていない喉を潤すために液体を流し込む。

「うん、美味しい。IRIA、ありがとうね」

「はい、優紀ちゃんのためですから」

「じゃあ私そろそろ寝るから……おやすみIRIA」

「はい、おやすみなさい優紀ちゃん」

こうして私の一日は終わった。

……問題、なにか問題はあっただろうか。

いや、いつもどおりだ。

なにも問題はない。

明日もまた暇な一日か……憂鬱だ……。

Y o u & a m p ; I & q u o t ; B e s t F a m i l y ? & q u o t ;

歯車の狂いだした優紀の日常。

優紀は果たして正常なのか・・・それともおかしいのは世界のほうか。

S t a r t   D a y ?

朝……。

昨日は水曜日だったから今日は木曜日か。  
最近学校でのがあまり記憶にない。  
それというのもPモバを始めたせいかな？

学校に行く   ゲームする   帰る。

このサイクルの繰り返しのような気がする。  
そもそも私はなぜ学校に行っていたのだろうか？  
学校なんて意味のないものではなかったかな？

夏休みも、もう近い。

それにゲーム大会だって近い。

そうだな、私はずっと遊んでいればいいのだ。  
誰かも言っていたはずだ、もっと普通の女の子らしく遊んでいいのだと。

……はて、そんなことを誰に言われたのだったかな？  
私は普通の女の子ではなかったのかな？

ああそうか、私は世界を救わなければならないのだ。  
現実を見ていないわけではない。  
むしろアカシックレコードから逃げるからこそが現実から目を背けているのだ。

私が悪いのではない。

私が間違っているわけではない。

私が変なわけではない。

私は……私は……。

「おは……。ご・いま……。優・ちゃ・」

「っ!？」

突如私は夢の中から現実に引き剥がされる感覚に襲われた。  
誰かが私を呼んでいる？

「おはよう、”お姉”ちゃん」

部屋の扉のほうを見てみればそこにはIRIAが立っていた。  
私を起こしにきたのだろう。

私が既に目を覚ましていることに驚いているのか、少しばかり目を丸くしている。

「おはようIRIA」

そういつて私がベッドから出ようとするとIRIAが駆け寄り、  
その手伝いをする。

相変わらずの過保護っぷりだ。

私はそんなに弱くないというのに。

IRIAは持っていたアクセサリ 赤と青の配色がされた紐付  
の鈴を私の首に付ける。

いつもIRIAはこのアクセサリを私に付けたがるのだ。

「ねえIRIA、どうしていつもこれを付けるの？」

「だって、可愛いではないですか」

至極普通の返答だった。

どこから持ってきたのかは知らないが私はこのアクセサリがあまり好きではない。

なにが嫌いかというのは自分でもよくわからないけど本能的に、なんとなく嫌いなのだ。

多分、前世の私はこれに似たものになにか嫌な記憶でもあるのかもしれない。

私はベッドから出るとクローゼットから学校の制服を取り出した。

「優紀ちゃん、なぜそれを？」

なぜ？と言われても……。

「学校に行くから」

としか答えようがないのだけれど。

「今日は土曜日……学校はお休みですよ？」

そうそう、今日は木曜日だから……え？

「ですから、今日は土曜日なので学校はお休みですよ？」

「なぜ？」

「ですから、今日は」

「なぜ木曜日じゃないの!？」

思わず声を荒げてしまう。



そうか、これもアカシックレコードが狂ってしまったことによる事象か。

今度は日にちを操ろうというのか。

「ああ……ごめん、確かにそうだったね」

あまりIRIAを脅かすのも可哀想だと思い、思い出した風に装っておいた。

「はい、ではもうすぐお昼ご飯ができあがるのでリビングに来てくださいね」

「あ、うん……」

そうしてIRIAは部屋を出て行った。

お昼ごはん？

今は朝ではなかったのか。

携帯を開き時刻を確認すると確かに土曜日で、時刻はお昼時を指していた。

なんだ、私が早起きをしたわけではなかったのか。

ん？そういえば……。

ならばなぜ、IRIAはあんなに驚いたような表情をしていたのだろうか？

それにその時いつもと違う呼ばれ方をしたような……。

そう、例えば……例えば、なんだ？

私はなんと呼ばれていた？

「優紀、ちゃん……」

自分の呼ばれ方を再確認しなければならいほど世界は狂い始めていたのか？

いや、それは世界は関係ないのではないだろうか？

狂っているのは……ワタシ？

そんなわけない、私は正常……いたって冷静だ。

半ば自分に言い聞かせるようにして私はリビングへ向かうことにした。

「今日の昼ごはんはなんでしょう優紀ちゃん？」

リビングに着いてIRIAの開口一番がこれだった。  
なんでしょうものにも……。

「お米……と、味噌汁と沢庵」

「はい、正解です」

いやいや、意味が分からない。

見ればわかるじゃないか。

馬鹿にしているのだろうか？

IRIAに限ってそんなことはないだろうけど……。

「なんでそんなこと聞くの？」

「特に意味はないですよ」

意味のないことをこの娘がするだろうか？

やはりこれもアカシックレコード？

全ての日常は決められたとおりに……。さすがになんでもかんでもそっち方面に繋げすぎか……。

「では、あーんしてください」

「ええー……また？」

「いつものことではないですか。はい、あーん」

まったくIRIAの甘えっぷりには困ったものだ。なんとしてでも私に奉仕したいらしい。

「まあいいけど……あーん」

仕方ないので口を開けてやる。

いや仕方なく、といえばやや語弊はあるか。そんなIRIAが可愛くて仕方が無いのだ。

そうしてしばらく食事しているとテレビのニュースに気になるものを発見した。

例の、大量自殺事件の話題だ。

そうだ……私はなにをしているのだ。

こんなところで悠長にご飯を食べている場合ではない。事件を解決しなければ。

「ごちそうさまっ！」

最後の一口をさつさと飲み込み席を立つ。

「あ、あの……食後のデザートが……」

「ごめんねIRIA、今はいいや。後で食べるね」

「はい……」

せつかくのデザートだが、今は事件のことが優先だ。

「IRIA、私この事件を解決してみせるからね」

「え？」

ぐつ、とIRIAにガッツポーズを見せると私は駆け足で自分の部屋へ戻っていった。

## A k a s h i c   R e c o r d s ?

「さて……」

部屋へ戻った私は早速携帯でネットワークに繋ぐ。

大量の自殺事件……もとい殺人事件のヒントを得るために。

ニュースによると自殺者の中には遺書などの類はまったくない上での自殺だと書いてある。

つまり自殺者達は皆正気ではなかったことがうかがえる。

だからまず調べることはなぜ皆は正気でなくなったかということだ。

某大型掲示板にてその情報について調べることにする。

あそこならば並のニュースどころではないほどの情報があるはずだ。

事件に関係ありそうなワードで検索をかけるとそれらしいスレッドを発見することができた。

【アストラル光の】謎の大量自殺事件考察スレ    p a r t 3 2 【導  
き】

事件が起こったのはつい最近だということにもうスレッドは p a r  
t 3 2 をむかえていた。

やはり前代未聞な事件かつ、恐怖の事件に皆も情報が欲しいので  
あろう。

スレッドを覗いて見るとかなり事件の考察が進んでいるらしくい  
くつかの事項も書いてあった。

1 ・この事件は何者かがアカシックレコードにちなんで行ったものであること

2 ・全員が正気を保っていない状態で死んだとされていること

3 ・と、言っても自殺者たちは普通に生活している一般人ばかりということ

4 ・自殺現場を目撃した者もおることから他殺事件ではないこと  
5 ・事件のキーとなりうるであろう自殺者の待ちうけにされていた画像データ . jpg

6 ・画像を携帯の待ち受けにしても死んだりはしなかった

7 ・今のところ自殺者たちの共通性は見られないことから死亡する者はランダム？

8 ・芸術家の 先生が死ぬ直前に残した作品画像 . jpg

9 ・平常時からいきなり正気を失う瞬間を撮影した動画データ . flv

以上、テンプレ。

なるほど、掲示板の皆も謎を解明するために必死らしい。

とりあえずこのスレッドが最新なのでこの話題を追っていくことにする。

名無し：これって釣りじゃない……よな？

名無し：びびり乙

名無し：俺も携帯の待ち受け変えたけど特に変化なし。これは関係ないのか？

名無し：アカシックレコードについてググってみた。確かにこれ

に「お前自殺する」って記録されてたら今の事件のようになると思  
うが……

名無し：ペロツ……これは、アカシツクレコード！

名無し：迷探偵帰れww

名無し：これはもう死ぬやつって決まってんの？それともこれか  
ら決まるの？

名無し：アカレコにちなんだ殺人なんだからもう決まってんじ  
やね？

名無し：でもテンプレ9番の動画のやつって撮影者に自殺食い止  
められてるよな？二人一組でいれば死なないんじゃないかね

名無し：「はい、二人組みつくってー」

名無し：ってことは俺等ぼつちは皆死ぬのかwwwうはwww

名無し：リア充氏ね

名無し：どうせ死ぬんだからと思って今日貯金全部使ってきた俺  
勝ち組k t k r

名無し：死ななかったらどうすんだよwww

名無し：死んでも死ななくても死ぬwww

名無し：負け組みじゃねーかww

名無し：今北産業

名無し：ぼっち

勝ち組勢（笑）

死ぬ

名無し：把握。これって真剣笑い事じゃなくやばい状況なんだよな？

名無し：死亡するやつらの共通点が見当たらないからな、ランダム死に選ばれて死ぬ可能性も無くはない

名無し：これってあれだよな、何とかノートみたいな

「……なにこれ」

まるで危機感のないカキコミだらけじゃないか。きつとこんなやつらから死んでいくに違いない。もっと有力な情報はないものだろうか？

名無し：そっぴや最初に死んだやつって誰なんだ？

名無し：確か有名なやつだった希ガス

名無し：あれだ、Pモバのレベルランキングで1位だったやつだよ？



名無し：俺そいつとパーティ組んでたけど、そーいやら死ぬちょっと前のメッセが妙だったな

名無し： k w s k

名無し：ゲーム中目がチカチカするって何回も言ってた。それこそ何十回も

名無し：それ目悪くしてるだけじゃね？

名無し：いや、なんか本当に切実な感じでさ。なんか嫌な予感するって言ってた

名無し：m j d？なんかヒントになるんじゃないかそれ

名無し：動画になってるやつ見てるとなんとなくだがちょっと異常な回数を擦ってないか？

名無し： おお、確かに普通じゃない回数だな……目が関係してんのかな？

名無し：つーかあの動画でやってるゲームPモバじゃね

名無し： つー！

名無し：え……まさかPモバが原因とか……？

スレ主@q a w s e d r f：ちよつと自殺者の共通点Pモバやってるかどうかが調べてくるわ

名無し：スレ主k t k r!!

名無し：毎度思うがスレ主は警察かなんかなのか？持つてる情報多杉だる常考……

名無し：ヒント：犯人はスレ主

名無し：ねーよw w w

名無し：主、今調査中か

名無し：これはw k t k せざるを得ない

名無し：魔王昇降剣を使わざるを得ない!!

名無し：ミスターサムライ帰れw w

スレ主@q a w s e d r f：ただいま、ドンピシャだったわ。事件の調査のご協力に感謝します。

名無し：マジかよ…… Pモバやったら死ぬってこと？

名無し：つーか主ってリアル警察なんじゃね？

名無し：事件も気になるが主の正体も気になる

名無し：ヒント：犯人はスレ主

名無し：二番煎じ乙

スレ主@qawsedrfrf：Pモバになにかしら事件に関していることが判明。今問い合わせてるがみんなログインしないほうがいい、マジで。

名無し：Pモバっておま……世界中の皆プレイしてるんじゃないかねーか？

名無し：でもこれって自殺者の共通項目見つけたことにはならねーよな？ほぼ皆やってるんだし

名無し：やってる期間長いほうがなんとなく死ぬ確立高そうだが……いかんせんデータがないから集計とろつにもとれないな

スレ主@qawsedrfrf：集計とつてみた。ほんの少しだがその傾向はあるみたいだ

名無し：はやすぎフィタww

名無し：主は必殺仕事人かwww

「Pモバをプレイすると……死ぬ？」

Pモバと発狂の関連性があまり分らないがデータとしてそう残っているらしい。

半信半疑ながらも、Pモバが原因の可能性があるということも視野にいれておいたほうがいいらしい。

名無し：俺ちよつと実験してくる

名無し：勇者 あらわる

名無し：実験ってどういうこと？

勇者（仮）@yhujiokool：コテハンつけとくな。えっと、簡単に言うといまからPモバにログインしてしばらくゲームやってくるってこと

名無し：おいおい、それやべえんじゃないか？

勇者（仮）@yhujiokool：ゲーム終わったらこのスレに「今から死にます」って文章書いて俺がそのまま席を立つたらそれをカキコミするように細工しておく。それでカキコミされたら俺死亡のお知らせ。生きてたら一日の終わりの前には文章書き換えて無事だったとでも書き込むさ。

名無し：すげえ勇氣だ……

名無し：でもこれでPモバに原因あるかわかるよな

スレ主@qawsedrfr：危険です。やめておいてください。  
こちらで調べますので

勇者（仮）@yhujiokool：ログインしました。文章と細工セット完了、いってきます。

名無し：勇者すぎるだろ……

名無し：どうなるんだ……

名無し：ざわざわ……

勇者（仮）@y h u j i k o l：今から死にます

名無し：！？

名無し：ちょ、おま……瞬殺か！？

名無し：勇者エ……

勇者（仮）@y h u j i k o l：すいません、ケツ痛いので座り  
なおしたらカキコミしてしまいました；

名無し：w w w w w w w w w w

名無し：アホスw w w w

名無し：天然かw w w w w w w

勇者（仮）@y h u j i k o l：では気を取り直してもう一度……  
……いってきます

名無し：ぐつどらつく

名無し：なんつーか……勇者さんには死んで欲しくないわw w

名無し：なぜか勇者が死なない気がするのは俺だけじゃないはず

名無し：同意

名無し…さて、どうなるのか……

カキコミは現在ここまでで止まっていた。

どうやら人柱とばかりに一人、勇敢な者がPモバにログインしたらしい。

私はその結果を見るためにとりあえずここで待機することにした……。

You & I &quot; Best Family? &quot;

私はステレオに手を伸ばし適当に曲を再生する。

部屋に流れる旋律は - la Campa nella -

日本語では”ラ・カムパネツラ”と呼ばれるもの。

フランツ・リストが作曲した超絶技巧練習曲と並べて上げられる有名な作品だ。

踊るように、流れるように紡ぎだされるピアノの音は私を心地よい世界へと誘ってくれる。

「うん、悪くないね」

いや、悪くないどころかとても落ち着く。

今この世界が危機に瀕しているなんて、そんな非常識なことが本当にあるのかと疑いたくなるようなくらいの世界の静寂と旋律。

しばしの間私はそんな気分浸っていたが現実はそう甘くない。

今世界では間違いなく危険が迫っている。

いつ、自分の喉下に向けられている刃物が私を貫くかわからないのだ。

それは今すぐかもしれないし、こないのかもしれない。

だがそんな人を増やすわけにはいかない。

そのために私はこうして事件の解決するために、そしてその情報を集めるためにこの掲示板に張り込んでいるのだ。

しかしいくら待てど掲示板の勇者とやらからの新たな情報はない。

そうこうしている間にもう晩御飯の時間も近づいてきた。

お腹も減ったし、そろそろリビングに行ってみようかな？

ステレオもつけっぱなしに、私は部屋を出る。

「ナナ!？」

今、視界になにが映った？

ここは私の家だ。

そして、今のは？

今廊下の角を曲がって行っただのは……ナナ？

なんでいるのか知らないけどいるならいるで、今度こそ真相を暴いてやる！

走って追いかけて私も角を曲がる、がナナの姿はない。

どこへ行った？

リビングへ行ってみるとちょうど晩御飯の準備をしているIRIRI Aがいた。

「あ、優紀ちゃん。今ちょうど晩御飯の仕度を……」

「ねえIRIRI A!」

「え、あ、はい？」

「ナナを見なかった？」

「い、いえ……？」

「ここにいるはずなの。見てない？」

「今日はお客様は来てないですけど……」



「あ、そう……」

私の見間違い、か？

でもちよつと待てよ。

このまま私の勘違いですませていいのだろうか？

ナナはなんと言っていた？

そうだ、”直感に従うな”と言っていた。

今、やろうとしていること、考えていること……直感アカシックレコードに決められていることだ。

つまり直感にあえて従わないことでアカシックレコードに対抗できると、それがナナの考えだ。

するといまのは私の見間違いではなく確実に居たと、そういうことになるのか？

色々な考えが私の頭の中を過っていく。

ナナは二人居る？

ナナは魔法使い？

ナナは……。

いや、いまはそんなことが問題ではないはずだ。

さきほどナナが見えたこと自体に意味があるはずなのだ。

ナナは私になにかを伝えようとしている？

実際に会っても、そんなことを知らないといい張るナナ。もしかするとそれにはなにか事情があるのでは？

アカシックレコードに逆らう作戦、その行為で私になにかを伝えようとしているのか？

ならば私が今すべきことはなんだろう？

ヒントが余りにも少なすぎる。

とりあえずナナに連絡をとることが先決かもしれない。

「IRIA、今日は晩御飯はいらないから」

「でもちゃんと食べないと身体を」

「大丈夫、自分の体のことくらい自分が一番わかってるよ」

「……」

IRIAがあきれたような、悲しんでいるような表情をこちらに向けた後キッチンのほうへと消えていった。

ごめんねIRIA、これも世界の……そしてあなたのためなんだ。

「あなたはきつと私に近づくほど傷ついていくだろう。でも、それでも側にいて欲しい」

……？

今私はなんと口走ったのだろうか？

遠い昔に……いや、もしかすると意外と近い昔、私は……。

「……っ！」

頭が痛む。

キリキリと、締め付けられるような痛みだ。

嫌な汗が滴り落ち、歯を食いしばる。

なぜだ……私はなにかとてつもないことを忘れ、そして見落としている気がする。

この頭の痛みはその警告なのだろうか……？

そして私はなにかから逃げている……？

ずっと、それもいつからかずっとだ。

ずっと夢の中から抜け出せないでいるような気分だ。

私は……私は？

「ソウダ、ジケンヲカイケツシナキヤ」

あ……れ？

私はどうしていたのだったか。

そう、思い出した。ナナに連絡をするんだった。

私は自分の部屋へ行くとベッドに倒れこむ。

「あれ、なんでカンパネラが流れてるんだろ？」

なぜかステレオからはクラシック音楽が流れている。

おかしいな、私は今部屋へ帰ってきたばかりだというのに。

……まあいい、とにかく私はナナに連絡を取らなければならない。

Pモバにログインするとやはりナナもログイン中だった。

いつもの様子で無事だとわかるとやはり安心する。

<こんばんは、姫>

<うん、こんばんは>

<調子はどうですか？>

<まあまあ……かな。それより、またナナを見たよ>

<そうですか……ですが私はやはり今日はどこにも行っていません  
よ>

いつもどおりの返答だ。

ナナはここになにか重要な言葉を、意味を隠しているはずだ。それもアカシックレコードに触れないくらいの行動で。

考えるんだ私。

どうにかアカシックレコードに知られないようにナナの思惑を知るにはどうしたら……？

<ナナは、嘘をつく？>

<いいえ、今までついたことはありませんよ>

<それ自体が嘘ってことはありえる？>

<ありえませんが、私は嘘をつきません>

<そうなんだ……ナナって人間じゃないよね>

<ええ、もちろんです>

違和感だらけの返答だ。

嘘をついたことがないだって？

それに人間じゃない？

……もしかナナはとてつもない嘘をついているのでは？

今までのナナの返答を逆に見てみるとどうだ？

嘘をついたことはあり、嘘をつくことは十分にありえる。

そして人間である。

こうしてみればまったく普通になる。

ナナは今まで逆のことを言っていた？

と、するとさらに前の会話も全て逆にすると……？

ナナは、今日どこかに行っていたとなる。

もしかするとナナは私と何度も接触しているがアカシックレコードに悟られないためにわざとこんなことを言っているのか。

ナナは本当に、魔法使いなのか？

そうだ、これも聞いてみたらいいのだ。

< ナナってもしかして魔法使い？ >

< いいえ、違いますよ >

やはりそうか！

ナナは魔法使いだったのだ。

私が世界に選ばれし者なのだ、魔法使いが友達だって別に不思議じゃない。

そうか……そうだったのか。

ナナはこうして私が気づくことを待っていたのかもしれない。

私にまかせつきりじゃなくて、ナナもちゃんと考えているんだ。

「……あれ？」

……一瞬だけだけど、その考えは無理があるように思えた。

でも、自分が納得できたのだ。

きっとこれであっている、筈。

選ばれし者、魔法使い、そして世界の危機……。

どうやら私の日常は意味がないどころか超非日常へと変貌してしまったようだ。

## A k a s h i c R e c o r d s ?

最近思っていることがある。

ふと、一瞬だけ。

ただ一瞬だけだけど、私はどこかおかしくなってしまったのではないのかと。

誰かが、私じゃない誰かが、偽りの私を演じているのではないかと。

なんの根拠もないがただ思うだけ。

私の思考を上書きするように、綺麗に彩られた絵に無理やり黒で塗りつぶされるように、私が私じゃない時があるような気がするのだ。

ほら、こうしてこんなことを考えているでしょ？

するとき、頭の中真っ白になってき、なに考えてるかわからなくなってきたさ。

……あれ、私は今なにを考えていたんだっけ？

最近こんなことが多い。

急になにかをド忘れするのだ。

なにか、大事なことを考えていた気がする。

いや、しかし今はナナとの会話が大事……。

「……！？」

Pモバでナナと会話していた私だったが、急に知らないサイトにアクセスしていた。

本当に脈絡もなにもない……これもアカシックレコードのせいなのか？

” 考察少女 ”

サイトの名前はただ、そう綴られていた。

「数え切れぬ天使の翼」

「ようこそ、あなたは神に選ばれし祈り子の一人です」

「死と生の粒子」

「明日もし世界が無くなるとしたら私たちは」

「信じるのです。それが私たちにできること」

「カ・ヌルソー・エド・ヨ・ダーラ」

……よくわからない単語の羅列だ。

なにかの宗教……カルトサイトなのだろうか？

サイトの概要はよくわからないがとにかくなにかを信ずることが目的らしい。

内容は哲学、というには宗教じみすぎているがアクセス数はなかなかのものだった。

コンテンツは掲示板しかない。

その中にたくさんのスレッドが立っている。

どうやらこの宗教者たちの語らいの場らしい。

なんとなしに覗いて見るとやはり私には意味の分からない言葉ばかりが並べられていた。

……一つ気になるスレッドがあった。

「Akashic Records」

アカシック……レコード？

やはりこのようなサイトだと扱われやすいものなのか、どうやら今回の事件についての会話が行われているようだった。

「え……なに、これ……？」

そのスレッドには私とナナの名前があった。

なんとここに私とナナがPモバで知り合った時からのログ 会話が晒されているのだ。

「私たちが事件に関与するから、会話がクラックされているってこと……？」

いや、だが私たちは知り合ったときにそんな事件のことは知らなかった。

だからそんなはずはない。

でも、このサイトが事件に関与する可能性がある者たちの会話をクラックする方針だったとすれば……それもありえる。

これはまずいことになった。

いくら私とナナが会話内容知られてもいいように会話を暗号化（反対の言葉）でしていたとはいえ、もしかすると感づかれるかもしれない。

……誰に感づかれるのだろうか？

そりゃこのサイトの管理人か、事件の犯人なのでは？

いや、もしかするとこのサイトの管理人＝事件の犯人かもしれない。

とにかくこのことをナナに知らせなければならない。

このサイトをお気に入り登録して、私はPモバにアクセスする。



ログインついでにクラック対策としてパスワードを変えておく。

< 姫？どうしたんですか？>

< 聞いて、ナナ。私たちの会話はどうやらクラックされているみたい>

< クラック……つまり覗かれていると？>

< うん、今私ログインパスワード変えてきたの。ナナも変えたほうがいい>

< わかりました。それで……どうしてそのことを？>

< なんか変なカルトサイトで、見つけたの。あそこの管理人が犯人に違いないよ>

< そのURLを送ってもらえますか？>

< はい、ここだよ>

私はお気に入り登録しておいた考察少女のURLをナナに送信した。

< えっと……姫？>

< ね？私たちのログがあつたでしょ？>

< ああ、どうしてPモバのURLが送られてきているのですか？>

ん？どういうことだろう？  
送り間違えたのかな？

<ちょっと待ってね>

ちゃんと考察少女にカーソルを合わせURLをコピーしナナに再送信する。

<これでどうかな？>

<姫……やはりPモバのURLがこちらに……>

なぜだ、一体どうなっている？

アカシックレコードの抑止力がかかっているのか？  
もう一度、今度は自分でアクセスしてみる。

「確かに……ある」

考察少女は確かにあつた。

なぜだ？ズレすぎている。

世界はどうなっている？

私だけが世界から拒絶され、別の世界にいるような。

私だけ、ズレている？

「うつ……あ……・ああ……！？」

脳の奥底で、なにかが這いずり回るような感触。

私の意識を強制的に上書きする感覚。

私が……私でなくなる……。

そっだ、いつもの”これ”が私を変な風に変えて……。

もう駄目だ……また……意識……黒く……な……。

Requiem?

「うん、いい朝ね」

朝、目覚め私から開口一番飛び出した言葉は不自然に爽やかなものだった。

なんだか昨日は色々中途半端なまま寝てしまった気がする。なんかこう……携帯が関係しているような感じだったような。そう思ったので携帯を開きブックマークを見ると……。

「……あれ？」

なぜだかPモバが二つ登録されていた。

寝ぼけていたのか、はたまた操作ミスなのか、まったくもって身に覚えがない。

そこでふと目に映ったのは携帯の画面下部にある日付表示。

”sunday”

そうか、もう日曜日なのか。

なら今日はPPの大会の日じゃないか。

こんな大事な日のことを当日の日の朝に気づくなんてどれだけ間抜けなんだ私は。

幸いまだ朝の早い時間だ、十分に準備する時間はある。

私はベッドから起き上がるとそのまま立ち上がるうとするが……。

「お……つつと？」

ドンツ、と若干鈍い音を部屋に響かせながら私は倒れてしまう。

立ち上がろうとするが上手く立ち上がることが出来ない。

「あ、れ？なんかバランスが……」

自分が当たり前だと思っていた平衡感覚がズレている。

自分の世界がズレている。

自分は……ズレてばかりだ。

「優紀ちゃん！？今すごい音が……あっ」

そのまましばらくもがいていると部屋にIRIAがやってきた。  
どうやら先ほど私が倒れたときの音を聞きつけてやってきたらしい。

IRIAの差し伸べてくれた手を取り、私はようやく立ち上がることが出来た。

「いつも朝起きたときは私を呼んでくださいと、言っていたでしょう？」

困った顔をしながら私を諭すIRIA。どうやら怒っているわけではないようだ。

「いや、起きるくらいIRIAを呼ばなくなっただけで一人で行けるよ」

「できていないからこうして私がお手伝いしているんですよ」

まったくもってそのとおり、IRIAの言うとおりだ。

「ねえ、IRIA。どうして私はこんなに朝に弱いのかな？」

「それは優紀ちゃんが低血圧だからですよ」

なるほど、私は低血圧だったのか。初めて知った。  
変に偏った平衡感覚もしばらくすれば元に戻ってきた。  
というかこれは低血圧関係あるのだろうか、私は知らないので謎である。

「今日は大会がある日でしょう？早く仕度しましょう」

私は寝ぼけ半分混乱半分の状態で、IRIAに言われるまま誘われるままにリビングへ向かうのだった。

「ねえ、IRIA」

「なんですか優紀ちゃん？」

朝の食事を終え、今度は自室にてIRIAに着替えを手伝ってもらっている。

いつから私は一人で着替えや食事を行わなくなったのだろうか？

「私はどうして大会に出ることにしたのかな？」

「それは……やっぱり優紀ちゃんは強いですから、優勝できるとおもったからではないのですか？」

「んー……」

そう、私は確かにPPの大会に出る。

あのクラスメイトのお嬢様、皇円寺姫竜も出場し私を倒すと宣言していたことも覚えている。

だがそのきつかけ、どうして大会に出ようと思ったのかその理由が思い出せないのだ。

「大丈夫です、優紀ちゃん。ド忘れくらい誰だっけますよ」

「そうかなあ……」

ねえ、IRIAはどうしてそんなに悲しそうな顔をするの？

ただのド忘れなんかじゃないんだよね？

大会に勝って、優勝して……それで……それからどうなるのかな？  
優勝することができたらさ、私は普通になれるかな？

……あれ、普通になるってなんだ？

今普通じゃないとでもいうのか？

「……嫌だ、怖いよ……」

「大丈夫、大丈夫ですよ優紀ちゃん。きつと優勝して、それからもいつもどおりの日常です。優紀ちゃんがいて、私がいて、和真さんも宮子さんも春香さんもいます」

そうだ、私にはIRIAに和真がいる……。

宮子……春香……？

私の知らない人だ。

きつと仲良しだった誰かのことをいつているのだろう。

みんな消えて、死んで、空に還っていったんだ。

狂わされたアカシックレコードによって……。

「帰りたい……私も”そっち”に帰りたいよIRIA……」

「優紀、ちゃん……？」

「IRIAのところに帰りたい……もう”こんなところ”は嫌だ……  
…帰りたいよ……」

多分私は泣いていたのかもしれない。

でも、私は嘘をつきすぎていた。

もうそろそろ限界かもしれない。

もはや自分が泣きじゃくっているのか、泣くのを必死に我慢しているのか、それとも泣いてなどいないのかすらわからなかった。

「勝ちましょう優紀ちゃん。勝って……帰る方法を一緒に探しましょう?」

「……うん」

IRIAはその小さな体で私を一生懸命に抱きしめると励ましの言葉をかけてくれた。

今日の大会は、私のためにもIRIAのためにも勝たなくてはならない。

絶対に……負けられない。

一息ついて、出かける準備は全て整った。

そろそろ家を出てもいい時間にもなっていた。

「では……そろそろ行きましょうか?」



「うん、そうだね」

IRIAと外出なんていつぶりくらいだろうか？

……毎日していたような気がする。

それに景色がなんとなく違うような気がする。

本当に私は曖昧でズレたやつだ。

「ねえIRIA、あのアパートっていつからあったわけ？」

私が指さしたのは私たちの家のすぐ近くにあった安そうなアパートだ。

こんなアパート、あったわけ？

「ずっとありましたよ、優紀ちゃん」

「……そっか」

もう私にとって嘘なんてどうでもよかった。

きつとすっかり割り切ったから、今まで見えてこなかったものが見えてきたのだ。

でも、正直言つと自分で割り切れていないことがまだある。

それを意識してしまうのが怖いから、今はまだ考えないようにしている。

IRIAとこうして歩くことが、なんだか奇跡のような気がするんだ。

「IRIA」

「はい」

「……なんというか、ありがとうね」

なんだか、すこし感謝したい気分だった。

別に死亡フラグをたてたとかそんなことではないけれど、今が言う機会かなと思ったのだ。

照れくさかったのでIRIAの顔は見ないことにした。

今IRIAはどんな顔をしているのだろうか？

きつと驚いているんだろうな、もしくは恥ずかしがっているのかな？

そうしてすこしばかり歩くと目的地　ゲームセンター野中FR  
Tが見えてきた。

今日、ここで優勝してそして全部の嘘を暴いてみせる。

それが私の目的。

それが私の……物語。

## Requiem?

「さあ、ここで1P側のプレイヤーはご存知……姫選手だあ！」

場に相応しく、そして私にとってはそれは私を私たるものとする言葉。

今私は大会会場　ゲームのアーケード筐体の前にいる。

既にはじまり何試合かは終えているこのPPの大会でとうとう私の出番になったということだ。

皆お祭りムードで私を呼んでいる。

テンションは確かにあがってくるが私には絶対に優勝しなければならぬ目的があるのだ。

だからというべきか、私は騒ぐことなどせず集中したただ勝利のみを目指している。

まずは第一試合、ここはただの通り道にすぎない。

野中最強といわれた私にとってはまだまだ敵ではないのだ。

私のシュナイダーは敵の追従を許さず、ただ一方的に攻撃を続けていく。

そこには油断や遠慮などという言葉は無い。

ただ確実に、堅実に勝利していく……それが今の私のプレイスタイルだ。

相手はパワータイプのギューカクだが先日戦ったホタテ貝選手に比べたらまだまだ甘いプレイヤーだった。

第一ラウンド、第二ラウンド共に私の圧勝で勝負は決した。

次の試合までしばしのインターバルだ。

「さすが姫選手ですね！絶好調のようですが、狙うはやはり優勝で

すか？」

席を立つと実況の人が私に近づきマイクをつきつけてきた。  
そうだなあ……ここで私の意志を皆に聞かせてやるのもいいかもしれない。

そう思った私はマイクに向かって静かに一言。

「はい、絶対に負けませんから」

今の私はすこぶる気分がいい。  
すこし自信過剰であっただろうか？

いや、この言葉は決して嘘にしてはならない。  
私が優勝して、そして……それで終わり。

「自信満々のチャンプ、姫選手でした！では次の試合は……」

……さて、すこし休もうかな。

「優紀ちゃん、こっちです」

その声に振り向くとそこにはこの大勢の観客の中、私の分を含めたイスを確保してくれていたIRIAがいた。

「ありがとうIRIA」

「いいえ、それにしても……これでまずは一勝ですね」

「当然よ、私はこれからも勝ち続けるんだから」

「そうですね、私も応援してますから」

やはり応援してくれる者がいるというのは心強いことだ。  
ただそれだけで私の強さがあがっていく、そんな気さえしてくる。  
しばらくのインターバルを満喫すると私の名を呼ぶアナウンスが  
聞こえてきた。

どうやら私の第二試合を行っらしい。

「じゃあ、いつてきます」

「はい、いつてらっしゃいます」

ただそんなやりとりをすると私は筐体へと向かう。

私を応援する歓声に混じりどうやら相手の選手を応援するらしい  
歓声も聞こえてくる。

どうやら少し名づての選手らしい。

「では、バトルスタートっ！！」

実況のコールと共にバトルが始まる。

私の使用キャラはもちろんシュナイダー。

相手のキャラはアリアというプリーストタイプのキャラだ。

魔法を得意とするアリアはその戦闘タイプから接近戦を好まない。  
むしろ遠距離戦での射撃能力や魔法の詠唱がやっかいだ。

こちらとしてはあまり距離を離すと面倒な戦況になりかねないので  
開幕と同時にダッシュし接近する。

しかしただダッシュしたのではカウンターの喰らいかねないので  
ただのガードより少し強力な、専用ゲージを消費するフィジカルガ

ードを仕込みながらのダッシュをする。

こうすることで相手がカウンターを行った場合はフィジカルガードが発生し、行わなかった場合はダッシュしたまま接近できるということだ。

案の定アリアはカウンター行動を仕掛けてきたのでそれをガード、すかさずジャンプで相手の背後に飛ぶ。

距離は近く中距離といったところか、ここはけん制に発生が早くそれなりにリーチの長い下段攻撃でアリアの足元をすくいにかかる。しかしアリアはそれをきっちりガード、バックジャンプにより距離を離そうとするが私はそれを見逃さない。

シャイニンググレインを発動させアリアの頭上に光の剣の雨が降り注ぐ。

空中にいるアリアはガードせざるをえないのでこれをガード、そしてそのまま地上へ降りてくる。

その隙をダッシュアタックで攻撃し、アリアをのけぞらせる。

そこに基本コンボ、小技からシャイニングソードまでを繋げさらに姫スペシャルに移行する。

アリアの体力を奪いつつ、光の剣ゲージの回復も行った。

ダウンを奪った後も抜かりなく、魔法を唱えさせる前に接近攻撃　ダウン　接近の粘着を繰り返し１ラウンド目は勝利することに成功する。

続く２ラウンド目もダッシュフィジガ仕込みにて接近をはかる。

今度もカウンターを行ってきたのでそれをガード私はさっきと同じ方法で相手の背後をとる。

しかしアリアは前方　つまり私から離れるようにダッシュし距離を離されてしまう。

まずいと、思った時には既に遅かった。

炎と雷の遠距離魔法がシュナイダーに襲い掛かる。

それらを落ち着いて回避するもアリアは自らに強化魔法をかけてさらに強力な遠距離魔法を唱えてくる。

無数の弾幕にすこしダメージをうけてしまったがこのままやられる私ではない。

幸い前回のラウンドで残しておいたゲージが今MAXまで溜まったところだ。

このゲージをクイックジャンプという通常ジャンプ回数の限界を超えたジャンプをゲージ消費にて行うシステムに使用し、アリアへの接近をはかる。

アリアの強化魔法を計3回のクイックジャンプで避けきり、ついに接近することに成功した。

まずは足払いをかける……と見せかけそれをわざと射程範囲外で放ちスラス。

そして相手がガードを固めているところを画面端に向けて投げ、バウンドしてきたところを応用コンボエリアルでダメージを稼いでいく。

相手がダウンをしている隙に光の剣を生成、さらにシャイニングレインを降らせて相手を固めていく。

アリアの立ち上がりにもう一度、かぶせるように足払いを放つ。

相手はそれをガードしようとするが私はその足払いをクイックジャンプでキャンセル、後ろをとることに成功する。

相手の虚をつき、ガードを崩したところで基本コンボから姫スペシャルに移行しさらに余ったゲージを消費しヘブンインパクトで相手を空高く吹き飛ばす。

地面に落下するタイミングに合わせシャイニングソードで拾い、そのままエリアルでアリアをフィニッシュする。

私の勝ちだ。

もともと体力が低く接近戦の弱いアリアだ、私のシュナイダーが接近に成功した時点で勝ちはきまっているようなものだった。

いままで戦った相手よりは多少強かったが、まだまだ私のほうが強かったようだ。

これにて第二試合も私のストレート勝ちにて幕を閉じていった。

続く第三、第四試合も危険な場面無く勝ち進んでいきどんどんと優勝へと近づいていった。

そして決勝戦……これに勝てば私の優勝だ。

「決勝戦！１Ｐ側のプレイヤーは皆さんご存知格ゲープリンセス、姫選手だあああ！！」

その紹介はなんとかしてほしい、恥ずかしいから。

「そして２Ｐ側のプレイヤーはまったくの無名ながらもここまで勝ち進んだ隠れた実力者！ヴラド選手だあああ！！」

ヴラド？

ヴラドってたしかあれだよ、確かいつも映画とか本とかで出てくるあの……

「……こんにちは、水無瀬優紀」

私の目の前に立っていたのは皇円寺姫竜その人だった。

そういえば姫竜さんは学校で私を倒すといっていた。ヴラドという名前でこの大会に出場していたのだ。



「こんにちは、姫竜さん」

言葉こそただの挨拶だったが、私たちの間には異様な空気が漂っていた。

「正直あなたがここまでくるとはおもっていなかった」

「そりゃチャンプだから、負けられないしね」

「でもあなた、事件の謎は解けてないみたいね」

「っ!？」

今……なんて言った？

「あなたはいつまでも自分に嘘をつき続けている……ゆえにあなたは私には絶対に勝てない」

私が抱えている問題を的確に……この女は一体？

「このままじゃおもしろくないからヒントをあげるわ」

「ヒント……?」

「ええ、大サービスよ。今回の事件のキーワードはズバリ……サブリミナルよ」

「さぶりみなる?」

「わからない?……相変わらずなのね、そんなことでは元に戻るな

んてことは絶対に不可能。ましてや今回の事件を解くことなんて」

私の本能が告げていた……今こいつに負けてしまつと全てが台無しになるような……そんな気がする、と。

「なにを言つてるのかいまいち理解できないけど、とにかく今はそんなことは関係ない。勝つか負けるか……それだけ」

そうだ、今自分がやるべきことをやればいい。  
それ以外のことは一旦、排除すべきだ。

「そうね……では、そろそろ戦いましょうか？」

「……うん」

戦いの準備は整った。

最後の戦いが今、始まろうとしていた。

「では決勝戦、バトルスタート……!!」

火蓋は今、きつて落とされた。

## Requiem?

相手のキャラはオールラウンダー型の”パンドラ”だ。

こいつはPPシリーズ通してのラスボスでプロトを世界で初めて使ったので”ザ・ファースト”とも呼ばれている。

基本的にプロトは一つの体に一つしか所持できないのだがパンドラはそのルールを無視し複数のプロトを所持している。

その設定を生かし、格闘ゲームでもその実力はいかなく発揮され近々長距離全てで戦えるという器用なタイプだ。

対する私のシュナイダーは接近戦が主であるためやはり近づくことが第一の目的だ。

ラウンド開始の合図とともに私は2回戦目のようにダッシュフィジガで接近をこころみる。

「それはさつきも見てたわ、よ！」

姫竜さんはそう言うたッシュフィジガに対しての唯一の反撃行動、投げの体制に入る。

完全にこちらの開幕の行動は読まれていたようだ。

しかし私はその裏を読んでいた。

完全に投げ読みでバックステップで距離をとり、相手の投げを避ける。

相手が投げの硬直で隙だらけのところを弱中強シャイニングソードエリアルコンボのつなぎで確実なダメージを与える。

「裏の裏ってやつね。残念でした」

私は完全に読み勝ったこと、そして先制攻撃を与えたことにより精神的有利な立場にある。

姫竜さんは私の行動を読んでいたようだが私にその裏を読まれていたことで精神的には追い詰められたはず。

「なるほど、ただ一筋縄ではいかないと……そういうことなのね？」

しかしどうやら皇円寺姫竜にはこんな一度の差し合いの結果では精神的ダメージを与えることができなかったらしい。

余裕の声色でそう語るとパンドラを起き上がらせ、バックステップですこし距離がおかれる。

距離は中距離程度といったところか、差し合いたちはもう一度仕切りなおした。

パンドラはかなりのリーチを持つ技、ダークフォースを放ってきた。

伸びる闇の手がシュナイダーに襲い掛かるが私はそれをガードする。

私がガードをしている間にパンドラはそれをキャンセルダッシュしこちらに急接近し、足払いをかけてくるがこれもきっちりガードする。

私は足払いの隙を狙おうと弱攻撃を繰り返すがパンドラは足払いの隙をクイックジャンプでキャンセルし飛翔、私は上空をとられてしまう。

私は弱攻撃の一瞬の隙をつかれ、パンドラの空中攻撃がヒットする。

そのままのけぞっている間にパンドラは着地し弱キックからコン

ボをつなげ私は壁際まで吹き飛ばされてしまう。

さらにそこからダークフォースの追撃が来て、私は闇の手に切り裂かれてしまう。

なかなか高い威力のコンボだ。多分シュナイダーとそう変わらない火力だと思う。

私は起き上がると少し策を練ることにする。

やはり中距離ではあの伸びる闇の手、ダークフォースがかなりやっかいだ。

かなりのリーチを持つ技だが外したときの隙は大きい。

しかし姫竜さんほどのプレイヤーはぶっ放すことはせず確実にこちらの動きを読んで使ってくるからなおさらやっかいだ。

ここはダークフォースを誘う形で立ち回ってみることにする。

中距離でとどまっておき、ダークフォースが飛んできたところをジャンプで避け一気にラッシュをかけよう。

「……えっ!？」

しかしパンドラはいきなりこちらへダッシュしたかと思うとそのままダッシュ攻撃からの基本コンボ、ダークフォースでの締めでかなりのダメージを負ってしまう。

どうやら私の行動は読まれていたらしい。

「諦めなさい……今のあなたでは私には勝てないわ。あなたの行動は全て筒抜けよ」

「そんな一度の読み合いに勝ったくらいでなにをっ!」

私は起き上がり果敢に攻めるも私の動きは完全に見切られており

手痛いカウンターを食らってしまっ。

吹っ飛ばされ壁にバウンドし隙だらけのところにパンドラがダッシュでこちらに接近してくる。

そのまま投げを食らい上へ吹っ飛んだところにパンドラのゲージ消費のビーム系必殺技、プロトリオンフォースが放たれる。

さすがに耐え切れることはできずラウンド1はパンドラにとられてしまった。

「どう？まだなにか見せてくれるのかしら？」

「……まだもう1ラウンドがあるよ！」

そうして始まるラウンド2。

まずは様子見ということ開幕になにか行動をすることはしない。先ほどから私の行動は全て読まれているのはなぜなのだろうか……。

試合前の意味深な言葉もあるし、まさか姫竜さんもなにか選ばれしものだったりするのだろうか。

もしもそうだとしたら確かに勝ち目はない。

こうなったらいつそのこと、読み合いに勝てないならそれを放棄するのはどうだろうか。

心を無にし、リスクリターンを考えない予想外の攻撃ならば……通じるのでは？

そう考えた私は相手のダークフォースの射程距離内にも関わらずシャイニングレインをぶっ放す。

ガードしているところへダッシュし目の前で急ブレーキ、ジャンプをするがそのまま飛び越えたりなどせずそのまま落ちてきてそし

て投げる。

壁にバウンドさせると基本コンボからエリアルに繋げシャイニングソードで締めダウンさせる。

「な、なによその変態みたいな動きはっ!？」

「私の行動は筒抜けなんじゃなかったの？」

若干の皮肉をこめ言々と私はパンドラに接近しもう一度投げる。

この投げ二連続は初心者がよくやる行動で見切れば簡単に避けられるし隙だらけだ。

でもあえてこの状況でやることで完全に相手の読みを放棄することができると私は考えた。

そしてまた近づき近距離にも関わらずシャイニンググレインを相手に向けて放つ。

「くう、またそんなわけのわからない行動をっ!」

バックステップで冷静に距離をとっていくパンドラに私はダッシュして近づきジャンプで飛び越し背後をとり攻撃すると見せかけてもう一度シャイニンググレインを放つ。

「そんなに何度も同じ手にはっ……水無瀬優紀!」

シャイニンググレインを今まさに放とうかという時にパンドラが必殺技、プロトリオンフォースで割り込もうとしてくる。

「残念でしたっ!」

しかし私はそれをあらかじめ読んでおいたのでシャイニンググレイ

ンの隙をクイックジャンプでキャンセルし飛んできたビームを避ける。

私の今までの行動に冷静さを欠いた姫竜さんだったがそれがあだとなったのだ。

そのまま隙だらけのところをダッシュで近づくとまずは基本コンボをつなげ投げで締めて相手を壁バウンドさせる。

そして今まで溜めたゲージをふんだんに活用すべく跳ね返った相手に向けてゲージ技、ヘブンインパクトで上空高く相手を吹っ飛ばす。

落ちてきた相手にシャイニングソードを当てシャイニングレインを降らせる。

光の剣に串刺しにしたパンドラに私はとどめの一撃、光の剣ゲージを消費し相手を切り裂くシャイニングスラッシュのコマンドを入力する。

「これで……とどめっ!!」

画面には必殺技で止めを刺したときに現れるプロトフィニッシュの文字が現れる。

これで勝ち数は1対1、次のラウンドが勝敗をわける鍵となる。

「ふふふ……本当にあなたは私を楽しませてくれるのね、水無瀬優紀!」

「私は……負けるわけにはいかないからね」

「そう、それでもあなたは私に勝つことは絶対にできないわ」

「……どうして?」



「それはね、あなたには一番の弱点……大きなハンデがあるからよ」

「私に……弱点？」

それは一体どういう意味だろう？

それにハンデの意味がわからない。

「そうやっていつまでもしらばっくれて……幸せな世界の住人として一生を過ごさない！」

この人は一体なにを言っているのだろうか？

私はなにもしらばっくれてなどいない。

それに私が幸せな世界の住人だって？

それが意味するものがなにかもわからないし私はそもそもそんなわけのわからないところの住人ではない。

「おやすみなさい水無瀬優紀……アカシックレコードの意思のままに」

「なっ……アカシックレコード!？」

この女、どこまで知って……。

「一つ教えてあげましょう……あなたは右腕が動かせるかしら？」

「はあ？そんなの動くに決まって……」

「……否、あなたに右腕は存在しない」

馬鹿馬鹿しい、妄言もいい加減に……っ？

「っ!？」

な、なんだ……右腕が……動かない!？  
感覚がない……!!

これは、これが皇円寺姫竜の……選ばれし者の魔法……なのか!？

「あんた!! 私になにをつ……」

「別になにも。それで、右腕は動かせるのかしら？」

「……っ……!!」

なぜだ？右腕の感覚がまったくない。

くそ、動け!

あいつの魔法だかなんだかわからないけど、完全に動かすことが出来ない。

こんなじゃファイナルラウンドを戦うことなんてできない。

一体……どうすればっ……？

Requiem?

「私がいいます」

「……えっ？」

すぐ隣にはなんとIRIAが立っていた。

「IRIAっ……駄目だよ。今は試合中……」

「優紀ちゃん」

「な、なに？」

IRIAが真剣なまなざしでこちらを見ている。

「私は普段からあなたのお役に立てていますでしょうか？」

「え……そりゃまあ、いつも助かっているけど……」

いきなりこの子はなにを言うのだろうか？

「聞きなさい、皇円寺姫竜」

「なにかしら？ただのロボット風情が私に何のよう？」

「優紀ちゃん……いえ、私のマスターはハンデなど背負っていません」

「あははっ！なにを言い出すのかとおもえば……水無瀬優紀の”その姿”を見てもそんなことがいえるのかしら？」

「……そのための私です」

二人で勝手に話が進んでいつている。

内容もよくわからないがどうやら私は罵倒されているようにも聞こえる。

「つまりあなたがハンデの象徴のようなものよ？ハンデを背負っているからあなたがいるんでしょう？」

「私はマスターのヘルパーです。私はマスターの目となり耳となり感覚となり手となりそして……世界となるのです」

「なるほど……あなたが水無瀬優紀にとっての世界のフィルターの役割をしている、と。でもそれがハンデではないとなぜ言えるのかしら？」

「ようやく気づけたからです」

「何に？」

「愛情に、です」

「愛情？あなたが？水無瀬優紀に？」

「……っ」

え？え？IRIAはなにを頷いているの？それに愛情って……あ

あなたはロボット、だよな？

「これは傑作ね！IRIAっていったわね？あなた、それは病氣と  
いうのよ？……いえ、”バグ”というのが正しいかしら？」

「……私とマスターはいわば一心異体。心の共鳴体」

「そうね、そもそもそれがあなたの役割のはず」

「マスターは私に愛情をくれた」

「偽りの、ね？」

「それでも構いません。幸せならば、いつそそれで」

「そう……可哀想に……」

「そんな目で私とマスターを見ルナ！！」

「でもおめでとう。あなたが始めてよ……  
になったのは」

「……そうみたいですな」

「ある意味人間に近づけたのではないかしら？」

「あなたに言われても嬉しくないです」

「本当に人間くさいのね、あなた」

これは一体……なにが起こっているのだろうか。

IRIAが会話している。

誰と？

皇円寺姫竜と。

その内容は？

よくわからない。

なぜ？

私が。

なぜ？

私が世界からズレているから。

”あっち”に帰るにはどうすればいい？

この試合に勝てばいい。

勝つためにはどうする？

「……私を使えばいいと思いますよ」

「IRIA？」

「今から私がマスターの手になります」

「でもそれだとコマンドとか動きとかがばらばらに……」

「大丈夫です。今までも……そしてこれからも」

「……え？」

妙な言い回しだった。

今の私にはなんのことだかよくわからないがどうやら信用してよさそうだ。

こんなに自信満々なIRIAは見たことがない。  
きつと……大丈夫。

「それじゃあやろうか……姫竜さん！」

「あら、もう負けるための相談は終わったのかしら？」

「あなたには絶対に負けません、皇円寺姫竜」

「それじゃあいくわよ……」

「「ファイナルラウンド……スタート!!」」

こうして最後の戦いが始まった。

まずは開幕の行動が肝心だ。

それに私はIRIAとの共同作業である。

上手く連携をとれなければ……その時点で負けた。

「ねえIRIA、どうする!？」

「口に出さなくても大丈夫……私はマスターの動きたいように動きます」

「……うん、わかった!」

IRIAが一体どういう理屈でこんなことを言っているのかはわからない。

でもIRIAがいけると、大丈夫といっている。  
だから……絶対大丈夫。

戦況を冷静に見てみよう。

まず姫竜さんのパンドラに対して距離を離すのはよくない。

ここはやはり先手必勝、全速前進!

ダッシュフィジガ仕込みで一気に距離をつめる。

「……っ!」

「……わかりましたか?マスター?」

「うん、なんとなく。IRIAの言ってたことがわかった!」

そう、本来ダッシュフィジガ仕込みは複数のボタンを同時押しする上にレバー操作も忙しいテクニクだ。

それを今本能のまま、ただ思ったとおりにできたのだ。IRIAと、私で。

「小ざかしいわね……」 自覚”しても思い通りに動かせるなんて。まあそうでないと戦いがいもないものね!」



またわけのわからないことを言っている。  
もう流されない、もう迷わないぞ。

この戦いにだけ集中し、そして勝つ！

接近に成功した私たちは下段、中段とパンドラのガードを崩しにかかる。

しかし相手も冷静にガードをしきるとバックステップで距離をとり、ダークフォースを放ってくる。

それを読んでいた私たちはタイミングをはかりジャンプで避けつつ接近をはかる。

ダークフォースの硬直で隙だらけのパンドラに空中攻撃をしかける。

のけぞらせている間にさらに弱攻撃→強攻撃→シャイニングソードの基本コンボからさらにエリアルコンボを繋げていく。

これで相手の体力は7割程度といったところか。

「くっ……やるじゃない。でも、それで勝ったとおもわないことね！」

パンドラが起き上がると同時に多属性の魔法の弾を飛ばすエレメントフォースを放ってくる。

「IRIA！」

「イエス、マスター！」

視線も呼吸も合わせずに私たちは同調し、飛んできた魔法をガードし可能ならば避けた。

しかしその間にパンドラは肉体強化の魔法を自分に向け攻撃や防

御が上がっていた。

「茶番は終わりよ人形達……。今度こそ終わりにしてあげる！」

パンドラから強化魔法の黒いオーラが漂う。

これで接近戦はほぼ五分と五分。

本格的に決着をつけにきたようだ。

ダッシュで接近してくるパンドラにむけてシャイニングレインを放つ。

急ブレーキしたパンドラはこちらに向けダークフォースを放ってくる。

私たちは闇の手の攻撃を真正面からくらってしまい大きくのけぞってしまう。

対するパンドラにも命中はしたのだが強化魔法のかかっていたパンドラはすぐに体制を立て直し、こちらへものすごいスピードでダッシュをしてくる。

ダッシュ攻撃から足払い、それをキャンセルして上へ打ち上げる攻撃を行いダークフォースで私たちを拘束しエリアルコンボで地面に叩きつけられる。

体力はかなり削られてしまい残りは6割弱といったところか。

「さすがに強化されたパンドラの火力は凄いつ……！」

「まだですマスター！続けてきます！」

「っ！」

パンドラは私たちの起き上がりに攻撃を重ねてくるがIRIAの

忠告によりいち早くそれに気づきなんとかガードすることができた。  
一度バックステップを連続で行い距離をとる。

「マスター、敵のゲージが溜まっています！次にあのコンボを食らってしまつと危険です！」

「わかつてる！その前にあいつを！」

そうだ、次にあのコンボを食らつてしまえば瀕死状態はおろかそのまま倒されてしまう可能性がある。

その前になんとかしてアイツに一発攻撃を当てて、こちらのペースにしなければ。

またも凄まじいスピードでこちらに接近してくるパンドラ。

「しつ……っこいなー！」

私は苦し紛れにシャイニングソードを放ちその長いリーチで先制攻撃をしかけようとした。

しかしパンドラは急ブレーキをかけカウンターの体制に入っていた。

まずい、と身体が先に反応しクイックジャンプで自分の行動をキャンセルし一度空中へ。

パンドラもクイックジャンプでカウンター行動の隙をキャンセルし空中へ飛ぶ。

「もらつたっ！」

先に空中に飛んでいた私が先に攻撃行動を開始できるので飛んできたパンドラを空対空で攻撃しようとしたその時だった。

「Foolish（愚かな）……」

その私の行動が完璧に読まれていたのか、パンドラは空中でも力ウンターの行動をとっていた。

私の攻撃は跳ね返され画面端へ吹っ飛ばされる。

さらにバウンドしているところにパンドラがダッシュで接近、基本コンボにダークフォースをからめエリアルコンボをつなげてくる。残りHPは既に2割を切ろうかとしているところだった。

「ふう……なんとか生き延びたっ……」

「まだ終わりではないわよ？」

「っ！？」

地面に叩きつけられた私はもう起き上がろうとしているところだ。これ以上コンボをつなげられっこないはずだ。

そこにパンドラは私の足元に闇の空間を設置するダークホールを放ってきた。

ジャンプでしか避けられないこの攻撃に起き上がり始めの私は食らってしまう。

「チェックメイト……ね！」

残り体力はほとんど0に近い。

そこへパンドラはビーム状の必殺技、プロトリオンフォースを放ってくる。

いけない、はやくこのダークホールから抜け出さないと……っ！！

「マスター!!」

「えっ!?!」

レバガチャでダークホールから抜け出そうとする私の手をIRI  
Aが静止させる。

このままではプロトリオンフォースが命中してしまう。

「IRIAっ……なに考えてっ……!?!」

そして私のシュナイダーは光の粒子の中へ消えていった。

Requiem?

「負け……た……?」

舞い散る光子の中、倒れるシュナイダー。

あの体力でプロトリオンフォースを食らってしまっただけ……。

「マスター」

「IRIA……」

「まだ負けたわけではありません」

「勝手なことを!」

「よく見てください」

「えっ?」

シュナイダーが……立ち上がった?  
よく見ると体力がミリ残りしていた。

「IRIA……どういうこと?」

「マスター、パンドラの技ダークホールは始動補正88.2%、コンボ継続時の補正34%とコンボに組むと総合ダメージ係数かなり落ちてしまう技です。あの体力ならば無理に脱出して削りダメージを食らってしまうよりそのまま食らったほうが生存確率が高いと当機は計算しました」

「なるほど……それでさっきの私のレバガチャを止めたんだ」

さすがIRIA、絶体絶命の状況でも落ち着いて戦況を見ている。というかパンドラの技のダメージ補正なんてよく知ってたねIRIA。

「生意気ね、でもその体力でなにができるというのかしら？」

「なんでもやってみせるわ」

……いける。

相手の残り体力は5割強。

さっきのプロトリオンフォースで私のゲージはMAXだ。

防御力の高いギューカクにだって半分以上のダメージを与えるあれなら。

私の新しいコンボ 真・姫スペシャルなら倒しきれる！

「IRIA！新しいコンボだけど、できる！？」

「……イエス、マスター！」

「いい返事だっ！」

パンドラは確実にこちらに止めをさそうと魔法弾を放ってくる。

IRIAの絶妙なムーブコントロールにより最小限の動きで魔法弾を避けていく。

真・姫スペシャルの始動技、シャイニングソード……あれさえ当てることができれば！

「生意気な……この人形共が！」

来た！

中距離、この場面でダークフォースを放ってきた。

「避けるIRIAーっ！！」

ただ、叫ぶ。そうしてくれると信じて。

刹那、スローモーションになる私の視界。

そして静寂、まるで心臓の音まで聞こえるような静寂が空間を支配する。

IRIAの表情はただ冷静だった。

私のシュナイダーは弧を描くように跳躍、隙だらけのパンドラの目の前に着地する。

そしてその小さな口から放たれた言葉はそうとくに頼もしいものだった。

「Mission complete．後は任せます、マスター  
！」

「しかと受け取った！そなたの忠義と……魂をつっ！」

……なんだ？この、不思議な感覚……。

私はなにを口走っているのだろうか。

姫、そして付き人……私がはるか昔、もっともつと昔に信頼していた……そうか。

思い出したぞ！もう一つ！



「私は……私は姫だああああ！！」

シャイニングソードを放つ。

吹っ飛ばされた相手は壁にぶつかりバウンドする。

そしてパンドラを地上を走る衝撃波、グラウンドソードによって拾

たとえ右腕が動かなくとも、コマンドなんて気合でなんとかできるものだ。

「ダッシュだ！ I R I A！」

「イエスマスター！」

グランドソード共にダッシュで接近し、浮いた相手にそのままエリアルコンボを加える。

着地、そして同時にシャイニングソードでコンボを締める。

一度光の剣を直し今度は拳と蹴りのみでコンボをつなげていく。そしてここでゲージを使用し相手を上空へ打ち上げる技、ヘブンインパクトを入力する。

「そして……ここで最速入力チャージ！」

先ほどシャイニングソードなどで消費した光の剣ゲージをディスプレイによって回復する。

チャージを終え、ちよつと落下してきた相手を掴み、画面端へと投げる。

壁にたたきつけた相手に向けシャイングレーンで追撃。

「これで終わりだ！ シャイニング・ソード・ブレイカアアアア――」

「！！！」

632146P、素早く必殺技、シャイニングソードブレイカーのを入力をする。

画面が暗転し巨大な光の剣が生成される。

そして……パンドラは光の剣によって切り裂かれ消滅していった。

「か……勝った……？」

私は勝ったのか？

「や、やったよIRIA……私とうとうっ……」

「マ、マスター……」

IRIAが、青ざめたような表情をしている。  
その震えた視線の先にあったのは……。

「パンドラ！？」

シュナイダーの後ろに黒い空間と共に転移してきたのは倒したはずのパンドラ。

あれは確かパンドラのワープ技、プロトディストーションだ。  
でも倒したはずなのに……なぜ！？

「くっくっく……それがあなたの新しい技かしら？水無瀬優紀？」

「な、なんで……」

「真・姫スペシャルですって？笑わせないで、私はこの間ゲームセンターで見たわ……あなたのそのコンボレシピは繋がってなどいないのよ」

「そんな……私は確かに……」

「思い込みの激しい娘ね……そんなことでは真実にたどり着くことなんてできない。5割強を減らしきるコンボなんて夢物語だったのよ」

私はレバーを動かすもシュナイダーはシャイニングソードブレイカーを放った硬直により動くことが出来ない。

「さようなら、人形さん……」

K・O！

ああ……また私は……闇の中。  
やっと掴んだと思った真実の扉が……また遠ざかっていく。

「水無瀬優紀」

その声に顔を上げると、皇円寺姫竜がこちらを見下ろしていた。

「勝負は……まだ終わっていないわ」

「なに……が？」

「私が試合前にいったこと、よく思い出してたどり着いてみせなさい……真実に」

それ以上はなすことはない、とでも言う風になつて皇円寺姫竜は背中を向けた。

「マスター……」

「帰るよ……IRIA」

「……はい」

そうだ、姫竜さんはなにか気になることをいつていた。

「サブリミナル……」

それはなんだったか、聞いたことはあるのだが意味は忘れた。家に帰ったときに調べてみることにしよう。

姫竜さんが何者なのか、何を知っているのか、今回の事件についてどれだけ関わっているのかこれでわかるかもしれない。

「マスター……すみませんでした……私がふがないせいで」

「うっん……違うんだよIRIA、あなたは悪くない」

歯をくいしばり、あふれ出しそうな感情を我慢する。

「でも……でもね……」

IRIAに顔を見せないようにそっぽを向く。こんな顔を見られるのは……嫌だ。

「くやしい……くやしいなあっ……凄くくやしいよIRIA……」

「……帰りましょうマスター。今日はマスターの好きなものなんだって作ってあげますよ」

IRIAが私を抱きしめてくれたおかげで泣き顔を見られずにすんだ。

もしかしたらIRIAはもう気づいていたのかもしれないけど、でもIRIAはやっぱり優しくかった。

「ありがとう……IRIA」

## Requiem?

精神状態も良くなく、ずっと外にいるのも気分が悪くなってきたので早々に家に帰ってきた。

気になったワードを調べる為に私は部屋のベッドにダイブして寝そべる形になり、携帯で検索をかける。

「サブリミナル……」

この言葉が何を意味するのか、私は知りたい。

そしてどうやらこの言葉が事件の鍵となるらしいことを姫竜さんが言っていた。

”サブリミナル”について検索をかけると検索結果の一番上に詳しい記事が載っていた。

まったくもって文明の利器とやらは便利なものだ。一昔前までは考えられなかったくらいなのだから。

内容を大雑把にまとめると”意識と潜在意識の境界領域より下に刺激を与える事で表れるとされている効果で閾値以下の刺激によって生体に何らかの影響を及ぼすことができる”ものらしい。

たとえるならそう、例えばの話だけど。

テレビに放送されているCMの中とかにある文字を不定期に一瞬だけ、認知できないくらいのコマ割で表示したとする。

するとそれを視聴していた人たちは無意識下にその文字を覚えていくという。

「なるほど……サブリミナル……ね」

もしかするとこの原理で人々を操って・・・？可能性としてはまあ、なくはない話ではあった。しかしこれではあまりに説明不十分に証拠不十分。まったくもって論理的ではない。

「うーん……八方塞……」

と、嘆きつつも携帯の操作を続けていると気になるものを発見した。

「精神崩壊画像」

なにやらこれを見ると精神が崩壊すると噂されていた一昔前の都市伝説らしい。（この手のネタの発祥はおそらく某大型掲示板だろう）

しかしこれがサブリミナルとなんの関係があるというのか。

検索ワード”サブリミナル”で検索してあらわれたのだからなにかしらの関連があるはず。

そう考えた私は色々の記事をたどっていくことにする。しばらくたどっていく内にたどり着いたのは一つのスレッドだった。

「精神崩壊画像を使って色々するスレ」

なんとも直球的なスレタイである。

ちなみにこの精神崩壊画像、さっき見たけど少し不気味なだけのゾンビっぽい顔が映っているだけのホラー系画像だった。

どうやら少々不気味で初見だと驚いてしまっただろうこの画像を精神崩壊画像と銘打って恐怖感を煽ろうとしたのだろう。

そして広まったこの画像をつかっていたずらをしてしまおうというのがこのスレの目的らしい。

今はこのネタは完全に使い古されているらしいが当時は結構有名かつにぎやかにされていたものだったみたいだ。

しかし、一見するとなんでもないようなこのスレの中にとんでもない魔物は潜んでいた。

「この画像をネット上でサブリミナル的に配布して刷り込みを行ってみるのはどうか？」

刷り込み……つまり無意識下の頭の中にその画像を記憶させるということか。

でもそんなことしてなにになるというのだろうか。

まあこの手の住人たちは完全に愉快犯だし、楽しければそれでいいのだろう。

そしてこの住人たちは配布された”一瞬だけ精神崩壊画像が表示される”フラッシュをいろんなところに貼り付けはじめたらしい。それだけならただの悪戯でよかったのだがここで大事件が発生する。

某テレビ基地局にて働く一人の人間が色んなCMにこのフラッシ



ユをばら撒いたのだ。

もちろんその人物は逮捕されCMは全て修正されることとなった。

この騒ぎの後、あるテレビ番組にて今回の事件についてタレントが科学省の人間達を交えて考察をするというものを放送していた。ここで科学省側の人間の一人が「流されたサブリミナルにはこう書いてあった」と、その文字の書かれたボードを掲げた。

「Akashic Records」

っ!?

どういうことだ？

昔の冗談のような騒動で使われた文字……それはアカシックレコードと書かれていたらしい。

誰が……誰かが、今回の事件をずっと前から仕組んでいた？

CMにフラッシュをばら撒いた男か？いや、違う。

その男はもう逮捕されている。

そして私は推理する。

昔のフラッシュ騒動はただの冗談ではなかった。

そのフラッシュにより人々は深層心理、脳の奥底で催眠状態になる。

そして……現在。

ある”トリガー（引き金）”を引くことにより人々は……操られることとなる。

その引き金はおそらくPモバに設置されているであろうサブリミナル効果のある画像もしくはフラッシュデータ。

皆ただそれにしたがって空へと還っていく　死に集まるのだ。  
……まるで夜会<sup>サバト</sup>のように。

「サバトの出席者は山羊の背中に乗って飛来する。彼らは聖なる十字架を踏みつけにし、悪魔の名のもとに洗礼を受け、服を脱ぎ捨てて悪魔の背中に接吻する。そして背中を合わせるようにして円舞を踊る。」

これはイタリア、ミラノの司祭、フランチェスコ・グアッツォ著の書物に記されているものだ。

皆狂い、集まり、そして死ぬ。そこに自我はなくただ狂信者たちは操られ死んでいく。

……少し話がそれたか。  
今までのことをまとめてみよう。

昔 サプリミナル効果で人々に”アカシックレコード”という文字を記憶させる。

現在 Pモバ内になにかしらのサプリミナル効果のあるものを用意する。その内容は……。

「アカシックレコード”この言葉に覚えのある者達よ。自殺せよ  
いけるか……この推理？」

そもそもサブプリミナルとはそんな簡単に、明確な命令を与えられるものなのか？

とにかくこのことを警察に連絡しないといけない。

思い立ったが吉日、善は急げだ。

私はベッドから跳ね起きると部屋から飛び出し玄関へ。

「マスター？こんな時間にどこへ？」

「わかったの！この事件の真相が！」

ただそれだけ伝えると私は家を出て、一番近くにある交番へと走っていった。

「話はそれだけかい？」

全ての事情を警官の人に話した私だったがその反応はひどく冷たいものであった。

「とても重要なことだと思いますが」

「あのね、今は君の探偵ごっここの相手をしている場合じゃないんだよねえ……」

人の話を聞かない警官だ。口調こそやんわりとしているがその目は”とつとと帰れ”の意思表示をしているのが感じ取れる。

「……そうですか、ならもういいです」

ここは駄目だ。もっと私の話を聞いてくれるところへ行こう。

そう思った私は少し遠いが最寄の駅から2駅ほど離れた町の交番を目指し、歩きそして走っていった。

……疲れる。

「……そういうわけなので、この推理を捜査につかってください」

「今それどころじゃないんだよねえ……遊ぶならそのへんで遊んでてくれないかな」

まただ。

こここの警官の人もさっきの人と同じような扱いを私にする。

まるで小さな子どもの我がままを鬱陶しそうに、振り払うような。

「そんな……もう少し話を」

「いいから帰りなさい。……まったく、そのあんたは保護者だろ？ちゃんと”鈴付き”の面倒見てくれないとこっちも困るんだよ」

ため息をつきながら相手はそんなことを言う。一体誰にたいしての言葉なのかと振り向けばそこにはIRIAが立っていた。

「IRIA……？」

「すみません。今後はこのようなことがないよう、しつけておきますので」

「ああ、それならいいんだよ……気をつけて帰ってください」

「はい、ありがとうございました」

「え……あつ……ちょっと！」

IRIAは勝手に話を進めると交番から遠ざけるように私の手をひいていった。

また……私の知らない場所で、知らないなにかがおきているのであろうか？

あの警官の人、さらつと意味不明なこと言うし……それに”鈴付き”ってなんのことだかわからない。

まただ……またこの感覚。

私だけが世界でただ一人、隠し事をされているような。みんながそんな私を見て嘲笑しているような。

世界が信じられなくなるような、そんな気持ち。

自然と唇はふるえ齒は上下しカチカチと情けない音を出すのはきつと恐怖心によるものだ、私はそう思う。

「マスター」

「な、なに……？」

「家へ帰りましょうか」

そんなIRIAの暖かな声を聞くだけで、いつものIRIAの声

を聞くだけで、IRIAが私のことを”わたし”だと思ってくれているだけで私は安心する。

この世の中は全て私の敵……敵なのだ。

きつとみんな洗脳されているに違いない。私もその影響を受け、皆の会話が意味不明に聞こえるのだ。

ただ一人残ったロボットのIRIA……あなただけは私の味方だよね……？

私は私よりずっと小さな、それでいて誰よりも包容力のあるIRIAの身体の中で……その笑顔の中に眠ってしまうのだった。

それが……多分最後のIRIAの微笑みだったかもしれないというのに。

Requiem?

声が聞こえる。

「……ですから、マスターが……」

IRIAの声だ。ここはどこ？

「しかし……それでは……」

もう一人、知らない人の声。誰だろう。

薄っすらと開けることの出来た視界で確認できたのは見慣れた天井。

つまりここは私の自室のベッドということだ。  
むくりと、少し重い身体を起き上がらせる。

「あ……マスター！」

それに気づいたIRIAがこちらへ歩み寄る。

「気がつかれましたか……よかったです」

そうか、私は外出中に眠ってしまって……IRIAに運ばれたの  
だろうか。

「う、うん……ところであの人は？」

私はすぐそばにいる白衣の男の人を指差しIRIAに尋ねる。

「あの人はお医者様ですよマスター。ドランカーについて調べているそうです」

……医者？

なぜIRIAは医者を？私のどこが悪いというのか？

「私はどこも悪くない」

「違いますマスター。もうこれで……マスターはe s x r d c f t v y g b u h n」

「え？なんて？」

「を することができなんです」

馬鹿にしているのか。

IRIAの言葉はノイズとなって、重要な部分を聞き取ることが出来ない。

「……私になにをする気？」

仕方ないのでその医者とやらに尋ねてみることにした。

「まずはこの薬を注射してみよう。どの程度症状が進んでいるのか知りたい」

そういつて取り出したのはあからさまに怪しい注射器。

まさか……世界の秘密に気づいたただ一人の人間　つまり私を毒殺しようともいうのか？



「嫌だっ！私はまだっ……！」

まだ……死にたくない。

「マスター、もうやめてください！マスターのそんな姿……見ていられないです……」

「またわけのわからないことをっ！」

「早く治療を受けて……」こちら側”へ戻ってきてください！」

こちら側？

いまIRIAは”こちら側”といったか？  
なんだIRIA。

まさか裏切ったのか。

お前はアカシックレコードを狂わせる悪の組織の一員になってしまったのか。

「嫌だ！私は行かない！絶対に行かない！」

「一緒に行くと、約束したではありませんか！」

はあ？こいつはなにを言っているのだ？

そんな約束……そんな約束……。

「そんな約束……した覚えなんてない！」

「……っ！……そんな……」

IRIA、きつとお前は洗脳されているんだ。

アクノソシキニノットラレタンダ。

「……どうやら少し興奮状態が強いようですね。IRIA、押えて」

「……はい、わかりました」

どうやら今度は力任せに私を止めるつもりらしい。

IRIAが私の左腕を掴む。

仮にもロボットが相手の上に、右腕の動かない私にはもうどうするすることもできなかった。

「……あなたのためなのです、マスター。どうかわかってください」

「最低……やっぱりあんたも敵だったのね」

ただ私は虚勢をはってIRIAを睨みつける。皮肉の言葉も込みで。

「マスター……」

「なぜそんな悲しそうな目をする！？この外道……そんなことで私が大人しくするとでも……」

「少し、大人しくしてしてくれ」

医者を名乗る男は注射器の準備を整えるとゆっくりと私の左腕に近づける。

IRIAにがっかりと押さえつけられ、男にはゴムバンドで腕を縛り付けられ、私は迫り来る注射器を前にして気を失った。

最後に叫べたのかどうかはわからなかった。

目覚め。

少し頭のぼーっとする目覚めだ。

違和感を感じる左腕には包帯が巻かれている。

どうやらさっきの出来事は夢ではなかったようだ。注射の跡みた  
いなのも薄っすら確認できる。

なんだかいつもより頭がぼーっとする。

思考が上手くいかない。

あいつらになにか変なものでも注射されたのだろうか、これが洗  
脳される一歩前くらいの症状なのかもしれない。

とにかく現実感とでもいえばいいのか　そんなものがかけてい  
る気がする。

「そうだ…… Pモバにアクセスしないと」

ぼんやりした頭の中で思い浮かんだことはまずそれだった。

これが習慣病というやつなのか、ただうわごとのようにそうつぶ  
やくと私はベッドのすぐそばに置いてあった携帯を開くとPモバに  
アクセスした。

<こんばんは、姫>

ログインと同時に表示されるチャットメッセージにはそう記されている。

本当にいつでもいるんだな、ナナは。

<うん、こんばんは>

<面倒なことになりましたね>

<なにが？>

<IRIAのことですよ>

<IRIAを知ってるんだ？>

<ええ、私とあなたの”敵”ですから>

<やっぱり敵なんだ>

<現在彼女は思考コントロールを敵に奪われています>

<どうすれば元に戻るかな？>

<そうですねえ……一つだけ方法があります>

<一つだけ……？なに、その方法って？>

<”破壊”することですよ>

<そんなことしたら可哀想だよ>

<すぐ作り直せばいいんです。こんどは絶対に裏切らないように>

<ああ、なるほど……確かにそうだね>

<でしょう？アカシックレコードだってまさか相棒のIRIAを壊すなんてこと予想していないはずです>

<わかった。じゃあできるかどうかかわからないけど、やってみるよ>

私は一体いまどんなメッセージをうけとりどんな返事をしているのかわからない。

私は……今なにをしているんだろうか。

そして即レスのナナにしては珍しい遅レス。どうしたんだろうか。

<やめろ！こいつの言うことを聞くな！>

……はい？

ナナから妙なメッセージが届いた。

こいつってだれ？

よくわからないが、なんのこと？>と返事しておいた。

ただ、それから後は彼女から返事が来ることはなかった。

「やめろ、こいつの言うことを聞くな……か」

よくわからないがナナの言っていることはきっと正しいので覚えておくことにする。

この言葉がいつ役にたつのかはわからないけれど。

「さて……」

それではナナの言うとおり、今はIRIAの破壊が優先事項だ。きっとIRIAはこの家で油断しているはずだ。

不意をつけばいくらIRIAだってひとたまりもないはずだ。

しかし素手では厳しいと感じた私はなにか凶器になりそうなものを探すため音も立てずに部屋を出るのだった。

## Requiem?

そしてたどり着いたのは私の部屋の隣の部屋　通称”開かずの間”だ。

ずっと昔からこの部屋には入ってはならないとIRIAに言われていた。

私自体もなぜだか入りたくなかったので今まで入っていなかった。

……私は確信していた。

ロボットであるIRIAを破壊する方法はこの中にあるのだと。

いままでひた隠しにされてきたのはそういう理由だからと私は推測した。

一度息を整え心を落ち着かせると私は開かずの間のドアノブに手をかける。

ガチャリ。

労せずともそのドアは開きだした。

この部屋に入るのは初めてだ。一体中はどうなっているのだろうか……？

まず目に入ったのはシンプルな学習机。

教科書やノートの類はなく綺麗に整理された（というよりはなにもない空っぽな）状態だ。

中に入ってみると空気は別段汚いわけではなかった。

埃もなくどうやら日常的に掃除が行き届いているようだった。

「……誰が掃除しているんだろう？」

いや、きまっている。IRIAだ。

自分の独り言に対して自分でツツコミを入れつつ大きなクローゼットを開けてみる。

そこにはごく普通の人間が使用するような色々な荷物がしまっていた。

たくさん機械のコードやゲーム機にスキー板、それにキャンプ用品なんてものもあった。

「なんて生活感ただよクローゼット……誰か住んでいたのかな？」

しかしここは私の家だ。

いままで私の記憶にここに誰かが住んでいたなどというものはない。

そう、生まれてからずっと。

「……ずっと？」

私は生まれてからのことを思い出そうとした。

しかしなぜだ？ 真っ白で……なんにもイメージがない。

さつきから考えが上手くまとまらない。

夢現ゆめつつな頭の中と私の身体。どうやらもうもたないらしい。

洗脳される前にIRIAを破壊してしまわないと……！

焦ってクローゼットの中を探索しているとガコンツと大きな音がした。

足元を見ると野球に使われる金属のバットがあった。どうやらこ



れが倒れたらしい。

しかし……なぜバット？

家の人に野球をする人なんていたろうか？

というか……家の人って誰が居たっけ？

私と……IRIAと……？

「……馬鹿馬鹿しい」

考えるだけ無駄だ。この世界ではもはや常識や……私の意志は通用しない。

私はバットを手にとるとぶんと一振り。

……いける。

こいつは”現世の剣、リア・ドリームキャリバー”と名付けよう。これがあればIRIAを破壊することができる。

「マスター？一体何の音ですか？」

IRIAの音がする。

どうやら先ほどのバットを倒した音を聞きつけてやってくるらしい。

パタパタと小走りでこちらへやってくる音が聞こえる。

あいつを殺るなら……今しかない！

私はドアの脇に立ち息を潜める。

「こっちは……の部屋……。マスターはここに……？」

ドアの向こうからくぐもった音が聞こえる。

もう……すぐそばにいる。

「マスター……?」

ドアが開く……いまだっ!

「IRIAあああああ!!!!!!」

ガンッ。

……やった!

私の振るった現世の剣はIRIAの頭を直撃。その頭からは血が……血?

なぜ……ロボットであるIRIAから血が出るのだ……?

「マスター……」

「IRIA……なんで……血が……」

「……だから……」

「……え?」

「私はお姉ちゃんの妹だから」

妹……？

お姉ちゃんって……私が？

「待つてIRIA！私がんだつて！？」

倒れているIRIAを揺さぶる。

「……マスター……」

「なに？」

「たどり着けなかつたんですね……」こちら」に

「IRIA、教えてよ。一体なにがどうなっているの？」

「マスター……右腕をご覧ください……」

「右腕？」

私の右腕は確か……皇円寺姫竜の不思議な力で動けなくされて……。

ふと自らの右腕を見える……いや、”見れなかった”。  
無いのだ。

私の身体に”右腕が付いていない”のだ。

「はははっ……ねえ、IRIA」

「……はい」

「私のこれ、どうしちゃったのかなあ？」

「ずっと……前から」

「前？」

「そうですよ」

「嘘だ、私は」

「嘘はあなたです、マスター」

「……なにが」

「あなたはあなたの世界に対して嘘をつき続けている」

「……」

「……思い当たる節があるでしょう？」

「……どういこと？」

「あなたはずっと前から、そんな姿で……それを受け入れられない  
あなたはそれを認めない形で心のバランスをとろうとしていた」

「していた？」

「そう、していた。でも今あなたはそれに気づいた。それは辛い現実  
と向き合うことができたということです」

「その……血は？」

「ロボットなんて」

「……？」

「ロボットなんてこの現代社会にいないですよ」

……え？

いや……でも、IRIAはロボットじゃ……。

「なぜそんなことを？あなたはロボットでしょ？違うの……？」

「2012年7月24日……そんな現在にロボットなんていないですよ」

「つまり……あなたはロボットじゃない……と？」

「だから……言ったではなppppppですか」

言葉をさえぎるノイズ。

私を真実から遠ざけるように、それを隠すように。

「ねえ……IRIA」

「……はい」

「あなたは……なに？」

「ずっと……ずっとあなたを守るために存在するものですよ」

「私を裏切ったんじゃない？」

「そんなはずはありませんか」

「闇の組織は……」

「そんなものありません」

「洗脳は……」

「ありません」

「事件は……」

「ありません」

「私の……腕は……」

「ありません」

「じゃあ……私は何をしたの？」

「なにも起こらなかった日常で、ある日突然たった一人の妹を金属バットで殺してしまったんですよ」

「IRIA……」

「なんでしょう?」

「私はどうしたらいい……?」

私のそんな問いに、そうですね……と一呼吸終えてからIRIAは話し始めた。

「問題です。バスに5人のお客様が乗っています。あるバス亭で2人降りて3人乗り、次のバス亭で3人降りて1人乗りました。さて、現在バスには何人の人が乗っているでしょう?」

唐突な問題だった。

なにか意味があるんだろうと思ったので真剣に考えることにする。  
最初に5人……次にプラス1で……次にマイナス2……。

「えっと……4人?」

「違います。5人ですよ」

「へっ? そんなわけ……あ」

「そうです。バスの運転手さんを数え忘れていますね」

「意地悪問題ね」

「そうかもしれません。では次の問題です」

一体これに何の意味があるというのか。  
よくわからないけど負けたままじゃ悔しいので次の問題も答える

ことにする。

「もうすぐ世界は”夏休み”を向かえ、そして崩壊していきます。世界には何十億人という人口がありますが”あなた”を除いて全て消えてしまいます」

……勘の悪い私でもわかる。

これは”これから起こるであろう”ことを言っているのだ。

「さて、”あなた”は一人ぼっちでしょうか？」

……決まっている。

「一人ぼっちだよ。これまでも……そしてこれからも」

「違います。正解は二人ですよ」

「なぜ？私のほかに誰がいるというの？」

「私だよ、お姉ちゃん」

視界が歪む。

IRIAが私をお姉ちゃんと呼ぶ。

それに違和感を感じる。

意識の端でそれは違つと……そう訴えかけてくる。

「ずっと御側にいると……約束したではありませんか」



「IRIA……」

そうだ、私は世界にどれだけ裏切られようとIRIAだけは信じるといったではないか。

そんなIRIAに……私はなんてことを……。

Requiem?

「聞いて……ください、マスター」

ジリジリと、ノイズ交じりの声で話すIRIA。

「……なに？」

震えた声で、私は問う。

これからIRIAが話そうとしていることは……私の日常を破壊してしまうものではないかと。

ただ……そんな気がする。

「あなたの世界はもうすぐ崩壊してしまう。そして次に目が覚めた時、真の世界はあなたを裏切るでしょう。あなたは一人になる。でももう逃げることは許されない」

IRIAが告げた言葉……それは確かに私が思い描いていたことと同じだった。

「一人につて……IRIAは？」

「どうでしょう……私は”あなたが想像で生み出した存在に過ぎない”ので真の世界にこういう形で存在しているかわかりません。この言葉だってあなたが喋らせているようなものですよ」

「私が尋ねて私が答える……自問自答？」

「そういうことになりますね。ただこうしてかなり特異な設定でこ

ここに存在しているということは真の世界で今の私のモチーフになっている人物くらいはいるかもしれないよ」

「IRIA自体はいないの？」

「わかりません……今のこの世界と真の世界でどれほどの違いがあるのかが把握できませんので」

「……そう」

IRIAは言った。

次に目覚めるときは私は一人かもしれないと。

世界は私を裏切ると。

逃げることは許されないと。

IRIAは……いないかもしれないと。

そんな世界で私はどうやって生きていけばいいのだろうか？

「生きるということは楽しいことばかりではないのです。これから辛いことを経験しなければなりません。……夢は、いつか覚めるのです。」

IRIAは真剣なまなざしで言った。

今まで……私は楽をしてきたということらしい。

「それも私の想像した言葉？」

「いえ、”私”の言葉です。意思くらいはありますよ、私でも」

つまり……この世界は私の思い描いたようにしか動かない、というわけではないらしい。

「IRIAは言ったね、夢はいつか覚めるって。これは夢……なの？」

「ええ、似たようなものです。……ただ、私は夢の中で……この数日で感じたことがあります」

感じたこと？

私の想像によって作られたというIRIAの……自我。  
一体何を感じたというのだろうか？

「……楽しかった。そして……幸せでした。ずっとこの日常が続けばいいと思っていました」

「ずっと……ここへ居ちゃいけないの？」

IRIAだってこの日常が続けば良いと思っていたのなら、ずっとここに居ればいいじゃないか。

真の世界だかなんだか知らないけど、辛い思いなどしなくてはいいののでは？

「……戻ってきてほしいと願う人がいたから。その呼びかけがあったから……今こうして虚偽と真実の境界線上に存在しているのです」

「真の世界には私に戻ってきてほしいという人がいるってこと？」

「はい、私はずっとその人の思いを聞いてきました。そしてその思いを叶えてあげたくなったのです。それが私の消滅を意味するとし

ても」

「私が元に戻ればこの世界やあなたは消える……そんなのでいいの？」

「はい……私はずっと……境界線上からあなたを見守りますから」

「嫌だ……離れたくない……」

「大丈夫……間接的にですが私はあなたにメッセージを伝える手段があります。それで連絡しますから……二度と会話できないわけではないのです」

「間接的につて……？」

「日常で使うものから私の意思を伝えるのです。そうですね……ならこの言葉をよく覚えてください」

「ナナ」

「この言葉をよく覚えて、向こう側でこの言葉を聞いたならそれは私です。私からのメッセージなのでちゃんと聞いてくださいね？」

ナナ……ナナ……。

ナナの言葉をきちんと聞く……ナナの言葉をちゃんと聞く……。何度も何度も心の中で念じて、心に刻み付ける。

「その言葉を決して忘れないで下さい。そして……私のことも」

「忘れない……絶対忘れたりなんかしない！百年だって千年経ったって、別の世界にいったって忘れないよ」

忘れない……忘れたりなんかするものか。  
どんなことがあつたって……忘れたりなんか。

「では、これからあなたにかかっているフィルターを外します」

「フィルター？」

「ええ、厳密にはあなたがかけた”フィルター”ですが。これが嘘の世界に見えてしまう原因なのです」

「でも、IRIAを見ることのできる唯一の方法……」

「そうとも言いますね。でもこれは本来必要のないものです。あなたはこれから”本来の日常”に戻ります」

本来の日常……今ここにあるものではなく、真実の私の日常。  
それは果たして取り戻すべきものなのだろうか？

「決して……絶望しないでください。私は見守り、少しのメッセージを送ることしかできませんが……ずっと御側にいますから」

「IRIA……私……怖い」

「あなたなら大丈夫……きっと乗り越えられる……」

IRIAは私の首に腕を回すと私を引き寄せ抱きしめた。

「あなたと過ごした数日間はとても有意義なものでした……”無”から生まれた私でさえ涙を流すことができたのですから」

IRIAの言葉に私ははっとして、その顔を見てみるとロボットであるIRIAの目から涙がこぼれだしていた。

「私のこと……忘れないでください……」

「IRIAっ！ 待ってIRIA……」

「さようなら」

プッ  
ッ

「あれ……ここは？」

私は眠っていたのだろうか、頭がぼんやりしていてここがどこなのかわからない。

自分の身体を試してみる。

いつもどおり、あの時事故で失くした右腕が無いのも、車椅子に  
乗せられているのも同じ。

そして……身体的障害を持つものの証である赤い鈴が首について  
いるのもいつもどおり。

なぜ精神障害を表す青い鈴も一緒についているのかは謎だが、な  
ぜだろう？

これら全ては私そのもののはずなのになぜか違和感がある。

「お姉ちゃん、起きた？」

車椅子を押している人物が私に話しかけている。  
振り向き見上げその顔を見ると……。



「IRIA?.....じゃない、よね?」

車椅子はゆつくりと進んでいく。  
きつと、いつも通う学校へと進んでいく。

私のそばを吹き抜けるのは風と記憶。

何かを失くした気がする。

それは特別だったはずの何かで、ずっと傍にあったはずの何かで。  
この心にある空虚感、私の胸の奥底をきゅつと締め付ける。  
忘れてしまったのは日常、取り戻したものは日常。

こんな私は大馬鹿者なのだろうか。  
ぼっかり空いた心の中でなにか小さなものを拾い上げた。

言葉。

それはたった一つの言葉だった。

「ナナ」

歩きなれたこの道はいつもの道じゃなかった。

私は拾い上げた小さな言葉を忘れないように呟くともう一度眠る  
ことにした。

「さようなら、私の愛した日々よ」

In Paradisum deducant te Ange  
li ;

天使があなたを楽園へと導きますように。

in tuo adventu suscipiant te  
martyres

楽園についたあなたを、殉教者たちが出迎え、

et perducant te in civitatem  
sanctam Jerusalem .

聖なる都エルサレムへと導きますように。

Chorus Angelorum te suscipiat ,  
天使たちの合唱があなたを出迎え、

et cum Lazaro quondam paupere ,  
かつては貧しかったラザロとともに、

aternali habeas requiem .  
永遠の安息を得られますように。

「これは境界線上に立つ君に送る鎮魂歌だ。いつか、真実に辿り着  
けますように……と」

僕はG線上の少女にそう告げると”電源”を切った。  
こうして皆、糸が切れたように動かなくなったのだ。  
。

## Requiem? (後書き)

これで第一章”片翼の少女編”は終了です。

次回からは数々の謎の解明編、この世界の一連の出来事を別の人物の視点から見た物語が始まります。

では次は第二章”G線上の人形編”で逢いましょう。

## IRIA on G code Reason

「……だから、わかったかい愛？ もう優は……」

セピア色に色あせた私の記憶。

それは私の心の始まり。

それから前の記憶は、あまりない。

「おまたせ、”IRIA”」

そんな声に振り向けば立っているのは長い入院生活から帰ってきた私のお姉ちゃん。

しかし私はその”IRIA”ではない。

私は水無瀬<sup>みなせあいり</sup>愛璃。 真正銘この水無瀬優紀の妹だ。

なぜお姉ちゃんが私をこう呼ぶようになったのか……まずはその話をしようと思う。

「第二章”G線上の人形（IRIA）」

これは今から2年前……お姉ちゃんが高校1年生の時のこと。学校行事の遠足の途中に電車の事故に見舞われてしまった。

その結果、お姉ちゃんは右腕を失い心も強く病んでしまった。

この国では障害者は、ぱっと見てわかるようにそれを表す鈴を身

体に身に着けることが義務となっている。

身体障害を持つ者は赤の紐の鈴を、精神障害を持つ者は青の紐の鈴を着けなければならない。

お姉ちゃんはこの二つの鈴を付けることを余儀なくさせられてしまった。つまり生活にハンデを背負ってしまったのだ。

鈴二つ持ちの人は一人ではまともに生活をすることができないので”ヘルパー”と呼ばれる生活をサポートする人物が付いてやらなといけない。

そこで私は通っている学校を辞め、お姉ちゃんのヘルパーとなることにしたのだ。

幸い、ヘルパーになれば国から多少の支援も出るので稼ぎ元がお兄ちゃんしかいない我が家にとっては一石二鳥のメリットがあった。お兄ちゃん 水無瀬和真は両親がいない私たちにとってはパパのようなものでもあった。

お金を稼ぐために高校を卒業したらすぐに仕事先を探して、今は怖い仕事でお金を稼いでいることはお兄ちゃんは隠しているようだけれど私は知っている。

そうしてしばらくお姉ちゃんの介護生活が続いた……ある日のこと。

お姉ちゃんが高校三年生になった。そんな時、お姉ちゃんは私たちの目を盗んでドラッグ。つまり危険な薬に手を出していたことがわかった。

思考能力が欠落しているゆえにそれがなんなのかわからずに服用してしまったらしい。

それから以後、私はほぼ24時間体制でお姉ちゃんを監視しドラッグの乱用に至らないようにした。

しかしドラッグというものは服用するだけで禁断症状というものがでてしまう。

毎日毎日お姉ちゃんは叫び、暴れる……そんな日々が続いた。

これは そんなお姉ちゃんに何もしてあげられない、ただ見守

ることしかできない私が見てきた過去の物語。

「触るな！！ 私から離れろ！！」

朝、開口一番介護の対象である姉から飛び出した言葉はそんなものだった。

「お姉ちゃん、私は」

「いいから消えろ！！ 幸せの薬を返せ！！」

「お姉ちゃん、あの薬は」

「黙れ！！ 死ね！！ …… ああ鬱陶しい！！」

ガラスが割れる音がした。

それは姉が据え置き型のライトを窓に向かって投げたからということとは部屋の惨状を見ることで理解できた。

そして頭が割れるように痛いのは、私の視界に床しか見えないのは、きつと部屋に置いてあった地球儀で思い切り殴られたからだ。私は思った。

「……ごめんなさい」

床を這いずるようにして姉の部屋を出た私は部屋の扉を閉じ、それに背中を預けるように座り込む。

耳を澄ませば部屋の中に居る姉が「鬱陶しい……鬱陶しい……」と何度も呟く声が聞こえる。

姉は薬の禁断症状で以前の優しい姉ではなくなってしまった。

落ち着かない、と爪を噛むのだが何時間も、それも何度も噛みすぎて爪はボロボロどころか無いに等しく、大量の血とグジュグジュ

になった肉が飛び出す形となっている。

その痛みが姉のムカムカする気持ちをもた高ぶらせるらしく、その痛みを紛らわせようと手の甲の皮を引きちぎる。

赤黒い中身をのぞかせるそれは非常にグロテスクであつたが、姉はどうやらそれがお気に入りのようなのだ。

先ほどのようにわめき散らして暴れたかと思えば、そのグロテスクな自信の手を見つめてクスクス笑ったりしていた。

……そう、ちょうど今のように聞き耳を立てている時にその傾向が見られる。

「また暴れたのか、あいつ」

そんな声に顔をあげると兄の水無瀬和真がこちらを見下ろしていた。

「……うん、今は多分笑つてるところ。だから今入っても大丈夫だと思つ」

「わかつた」

兄は地球儀で殴られて頭からたくさんの血を流す私のことは二の次に、一番の心配は姉の優紀に向いていた。

私も、それでいい。

私なんかの心配よりも、今はお姉ちゃんのことと頭がいっぱいなのは仕方の無いことだと私は認識している。

兄はコンコン、と扉をノックすると続けて「入るぞ」と一言言つて部屋の中へ入っていった。

私も痛む頭を抑えながら立ち上がり、部屋の中へ入る。

「優？ 調子はどうだ？」

兄は暴れて落ち着いた様子の姉に優しく声をかける。

対する姉はベッドに座り天井をボーッと見つめては「……ん」とわずかに唇を動かすだけ。

「なにか欲しいものはあるか？ 薬以外なら、なんでも用意してやる」

兄は姉に優しい。



本当に姉のことを親身になって心配をしている。

そんな兄に姉は「……音楽」と一言呟く。

音楽というのは姉が好きなクラシック音楽が聞きたいということだろう。

ただ姉の部屋に置いてあるオーディオはつい先日姉が暴れた拍子に壊れてしまったのだ。

「そうか、この前オーディオ壊れたる？　だからほら、見ろよ優。兄ちゃんi pod買ったんだぜ」

この家の家計は正直苦しい。

両親がいないので兄ただ一人で稼いで、なんとか生計を立てているこの状況で姉のために高価なものを買ったらしい。

兄は姉の隣に座るとそのi podでクラシック音楽を流してやり、イヤホンを片一方を耳にはめてやっている。

姉は曲を聴いて少し満足したのか、次は窓のほうを見やりまた「……ん」とただ一言を漏らす。

これは一応「ありがとう」と言っているらしい。

ただこの風景だけなら仲の良い兄妹だ。

しかし姉は一定の周期で暴れたり、落ち着いたりを繰り返している。

次またいつものように暴れたすかわからない。

私はそんな姉になにかしてやりたいと思った。

思った、だけだった。

私がしてやれることなんてせいぜい身の回りの世話だけだ。

またいつかのように私を優しく抱きしめてくれる日々を願って、ただ見守ることしかできないのだ。

ロボット、笑った。泣くのをやめた。

そしてとある日、錯乱状態になった姉は兄を野球に使う金属バットで殴打してしまった。

これは兄が小さい頃にクラブで使っていたものだった。

姉は我に返るとショックで倒れ、私が電話して二人共病院へいくことになった。

待合室にて待っているとそこに現れたのは手術を終えたらしい兄の和真だった。

「心配かけたな、愛」

頭にはなにやら大掛かりな包帯が巻かれており、その余裕のある表情とは裏腹に傷の深さがうかがえる。

「おねえ……ちゃんは？」

兄はどうやら無事のようなが、倒れた姉はどうなったのだろうか？  
私はそれが心配でたまらない。

「優はな……病氣、らしい」

お姉ちゃんが病氣？一体どういうことだろう？

首をかしげる私に兄は言葉を続ける。

「ドランカー」……それが優の病氣の名前。今から言うことは病院の先生の受け入りだけど、よく聞いてくれ」

私はただこくん、と頷いた。

「世界とは、人の数。見ることでできるだけ数がある。」僕や私やあなたや君の見る世界はそれぞれ微妙なズレがある。個人差とはそういうことだと思うんだ。例えば空だ。空は青いけれど、その青は俺が見ているものとお前が見ているものと同じ青なのだろうか？  
実は全然違うものを青だとお互い認識しているだけなんじゃないだろうか」

そこまで言う兄は一度言葉を切り、私を見やる。

私は黙ってこくん、と頷いた。

「生きている中で、人は”嫌”という感情を感じる。それは当たり前のことだ。その”嫌”を乗り越える方法は人それぞれだがその方法の一つに楽しいことを考えるというものがある。いわゆる空想や妄想に値するものだ。人間誰しもが「もしもこうであつたら」とか「こうなつたらいいな」ということは考えたことがあるはずだ。ただしそれはただの一時の考えでありリアルではない。でも、優はあまりに過度なストレスを受けてしまったせいでその妄想が優にとつてのリアルになってしまったらしい」

妄想が現実。それがドランカーという病気の正体だろうか？

「ドランカーはすなわち妄想そのもの。誰しもが持っているものが優は……それが大きすぎた。この間まで使用していた薬の禁断症状も相まって……優はこの世界に嘘をつき始めたんだ」

いまいちよくわからない。

私は兄につまりどういふことなのか簡潔に話してほしいといった。すると兄はわかった、と頷くとまた話し始める。

「優はもう俺の存在が見えないらしい。そして愛、お前は妹として認識されない。お前は優の世界でいうお手伝いロボットだと認識される」

それはあまりにも唐突な。

「あいつは自分の中に自分の世界を作った。そこに本来の俺たちはいない」

存在の全否定。

姉に認められない世界は姉の中で動き出す。

そこに……私たちはいない。

私はあまりのショックに床に膝をついてしまう。

”私”を”私”として認識してくれない？　だったら私は一体なんだというのだ？

「これから俺たちは優のために一つ芝居をうつ。……この意味がわかるな？」

「……わからない。どうして、どうしてこんなことになってしまったのか。」

「俺は優の世界（視界）から消える。これからは愛、お前が一人で優を手助けしなければならぬ」

……無理だ。

私はピエロではない。

お手伝いロボットになれ？　それこそ私は……私は。

「操り人形じゃない……！」

「愛……」

でも、それでも私は……演じなければならない。

愛する姉、優紀お姉ちゃんの為に。

私は自分の胸に手を当てる。

……鼓動。それはまぎれもなく生きている証。

そして……それは今ここで潰える。

「今ここで私、水無瀬愛璃は死んだ。今ここにいるのは……」

……人形。

「……さようなら、愛璃。そして」

きつとこれが最後に流す涙になるだろう。

ロボットなのだからこれから未来永劫、涙も流さないし、笑いもしないし、電気羊の夢も見ない。

「優を頼んだぞ……」IRIA」」

なるほど……AIRIの逆読み、IRIA。

裏返し（Reverse）の私を表すにちょうどいい。

こうして私はロボットになった。

そうして兄は世界から消えた。

私が求めていたのは幸せじゃなかったのに。

私は”普通”が欲しかっただけなのに。

「……………ふふ」

涙は枯れたのか、それともロボットだから流れないのか。ただ、笑った。

ロボットなのに、まだ笑えた。

そんなみじめな私が、笑える。滑稽だ。

## 運命を受け入れた時の話

水無瀬優紀。私のお姉ちゃん。

その姉は自分の見ている視界……すなわち世界を変えてしまうフィルターをかけてしまったという。

姉の見ている世界と真実の世界は違う。

私とお兄ちゃんは姉の社会復帰を手助けするために芝居をつたなければならなくなった。

なぜそうしなければならないのか。

例えば、姉の世界では私はロボットとして認識されている。

しかし私は本当は人間であり、ロボットではない。

そこで私がお姉ちゃんの前で食事をしたとしよう。食事などできないロボットが、だ。

するとどうなるのか。

”姉の世界の中でもっとも自然な形でその事柄が認識される”のだ。

まあつまり私が食事をして、「ほら、人間だよ」と言っても”ロボットがノイズを出していて何を言っているのかわからない”等の理由でのらりくらりと避けられる、ということだ。

しかしそれは認識の誤りを強制的に捻じ曲げてしまうことである。それはすなわち脳に多大な負担をかけてしまうことになり、症状が悪化してしまう可能性がある。

だから私はお姉ちゃんが頭の中で描いた通りの世界の住人として演じることになったのだ。

お姉ちゃんの世界をまともに見るとこんな感じ。

・基本的に世界設定は現代と同じ。しかしお手伝いロボット制度なるものが存在しており技術レベルはどうやら向こうの方が上らしい。上記の理由から、身内の私はロボットと扱われるようになったら

しい。

・姉は五体満足である。無くなった右腕は存在していると認識されているらしい。認識の齟齬が発生しないように姉が右腕を使おうとしたら手伝ってやらねばならない。

精神的にも活発な少女である。

・宮子と春香、という同性の友達がクラスメイトとして存在しているらしい。返事の受け答えなどはすべて姉の脳内で完結しているらしいので対処としては特になにもせずとも問題はない。

・PPファイト、という格闘ゲームのチャンピオンだという設定らしい。このため週に何度か通ったこともないゲームセンターに足を運ぶという。

・私は妹ではなく、いない親代わりに雇ったお手伝いロボットとして認識される。そのため人間のような行動は控えなければならない。

・兄は認識されなくなったという。すなわち、兄は姉の前に姿を現してはいけない。

・地元の地形が今から8年ほど前に見えているという。近日、自宅のすぐそばに建築されたアパートは認識されていないので兄はここに住むことになる。

・時々、“ナナ”という言葉をつぶやく。理由は不明だが前述した架空の友達とはまた少し違うらしい。

・たまに空を飛ぶらしい。一見、意味不明だが一応本人はそういつている。

・運動神経もなかなかのものらしい。しかし実際とは異なる体の動きをしてしまうため車いすにて抑制する。

押してあげると自分で歩いていると錯覚しているようだ。

・車いすに乗っている間は私の姿を認識しない。理由は今のところ不明だがどうやら車いす搭乗中は自分で歩いていると認識しているための脳内処理と思われる。

この性質を利用して日常生活の世話をすることにする。

……以上がだいたいの姉の脳内の設定である。

まだ他にどのような設定があるかは不明なのであまり無茶な行動はしないように、と医者に言われた。

病院のフロントにある長椅子に座りぼーっとしている姉を見て私は唇をかみしめ、歩み寄る。

姉がこつちを見ている。

その目に映るものは妹としての私ではなくて……ロボットである私。

なんと声をかけたらいいのだろう？

考えろ、私。

私はロボット……ロボットなのだから。

「……帰りますか？」

敬語を使ってみる。

なぜ敬語なのかは、昔読んだSF小説のロボットは敬語だったからという単純な理由からだ。

「……うん」

姉はそう頷くとさっさと歩きだそうとする。

私はあわてて制止させると姉を車いすに座らせ、私は後ろから車いすを押す。

そして病院を出ると家を目指して私は歩き始めた。



「ねえ……IRIA」

「……っ！……はい、なんでしょう？」

IRIA。

それが私の名前。

「なんで私はあんなところにいたんだろう？」

それはつい先ほどまでいた病院のことを指しているのだろうか？

私はなんと答えればいいのか戸惑って口を濁してしまう。

「私ね、思うんだ」

カラカラ、と車いすが動く音だけが鳴る。周りの雑音はない。ここは私たちだけの世界なのだから。

「今ここにいる私は3分くらい前に神様によって記憶とかそういうのをうまくこと作られて存在してるって言われたら多分信じるよ」  
「……えっ？」

その言葉はまさに今の状況の的を射ていて。

私は思わずルールを忘れてしまう。

「そうですっ……いや、そうだよお姉ちゃん！」

「IRIA……？」

「お姉ちゃんは、お姉ちゃんの記憶はちょっと前に作られて、本当の世界はっ」

「あははっ、ごめんね。IRIAには難しすぎた話かな？ 私のこと”優紀ちゃん”なんて呼ぶなんて可笑しいの。それにノイズだらけで何を言ってるのかわかんないよ」

くすくす笑いながら姉は言う。

……そうか。

認識の曲解。

姉の世界が崩れぬように脳が強制的に行う、いわば防衛反応。

これが発動してということはつまり、症状はさらに悪化してしまったということ。

私は少しでも症状を和らげようと、どんな言葉をかければいいのかと模索した。

「わ……私はずっとお姉ちゃんって呼んでますよ？」

その結果が、これ。

現実を認めたくない私とロボットに徹しようとする私の入り混じった中途半端な言葉。

姉を姉と呼び、そして敬語を使ってみる。

……私は、きっとお姉ちゃんって呼び方だけは変えなくなかったのだと思う。

私がどれだけ役を演じようと、お姉ちゃんはお姉ちゃんだから……。

「あ、そうだった？ ごめんごめん、なんか最近度忘れがひどくてね」

姉は簡単私のことを信じて自分の度忘れの件について苦笑する。

「いつかきつと、思い出せますよ」

その言葉はもつともつと別の意味を含めて言ってみた。

いつかきつと、こっちの世界のことを思い出せるよ、と。

「そうだね……思い出せたらいいなあ」

思い出せる、思い出させてみせる。

呑気に鼻歌まで歌う姉に微笑みかけながら私は心の中で決心する。今、すぐそばを駆け抜けていった車の雑音は姉には聞こえたのだろうか？

姉が見ている空の色は、私の見ている空と同じ色をしているだろうか？

私の思いは……姉に届くだろうか？

……これが私が運命を受け入れた時の話。

そしてここから最後の結末があんな風になっちゃってしまっなんて、私は思わなかった。思いたくもなかった。思ってしまった。

始日 - 壱 -

2010年7月13日水曜日……。

もうすぐ夏休みの時期だ。お姉ちゃんの学校も半日で終わるので気が楽だといえば楽だ。

あれから何も解決できてない。その糸口すら見つかっていない。今日もいつも通り、お姉ちゃんを起こしに行く。

「起きて、お姉ちゃん」

私は姉の身体を優しくゆする。今日も学校があるのだ。起きてもられないといけない。

「学校、行かなきゃいけない時間だよ」

「ん……んっ……おはようIRIA」

「おはようお姉ちゃん」

この寝ぼけた顔であくびまでしているのが私の姉、水無瀬優紀。どこにでもある女子高生を演じている、嘘つきの女の子。

そして無機質な声でしゃべっているであろうこの私は人型生活サポート用コミュニケーションロボット、IRIA。らしい。

お姉ちゃんは今がずっと前から面倒を見ている大切な人。私の守るべき、人。

「お姉ちゃん、ご飯できてる」

「ありがとう、すぐに行くよ」

短いやり取りでそれだけの会話をすると私はいったん姉の部屋を出る。

そしてすぐさまドアを開け姉の部屋に入る。

姉は一人では着替えができないのだ。

だからこうして面倒な手順を踏めば、姉の世界を騙すことができる。

私は一言も言葉を発することはせず、ただ黙々と着替えを手伝い、姉は制服へと着替え終える。

「着替え終える私。これで学校に行く準備は完了だ。もうすぐ夏休みだ、学校にいても特にこれといってすることは少ない。だからといってサボることもない。ただなんとなく流されて過ごす日々。それには意味なんてないのかもしれない。」

姉の、独り言。

まるで誰かに見られているような、その見られている誰かに対してモノローグを語っているような、そんな語り口だ。

「うーん……案外そんなもんかもしれないなあ……」

意味のない日々。

お姉ちゃんにとってはそうかもしれない。

でも、私にとっては、私たちにとっては意味のある一日一日だ。

そんな独り言を呟きつつ、姉はリビングへ向かう。

私もそれに続き、リビングへ向かい先回りをしてキッチンまで向かう。

「今日は和食ですよ、お姉ちゃん」

「……莓ジャムのパンはないの？」

「ありますよ？」

「なんでそれを出さないの？」

「いえ……特に意味はないですけど……」

「というか、朝食に白いお米はお姉ちゃんの日課だったはずだ。話しの内容が今更すぎてよく理解できない。」

「あのね、IRIA」

「やれやれ、といった風にお姉ちゃんは説明を始める。」

「IRIAは充電好きだよね？」

「はいです、大好きですよ」

「充電というのは多分ロボットという設定柄、私がなにかしらのエネルギー補給を日常的に行うはずであろうことを指しているのだろう。」

「それも家のコンセントでするのが好きなんだよね？」

「はいです、人間のように言葉でうまく表現できかねますが」

「それをアルカリ電池で充電されるとどう思う？」

「いいですけど……嫌ですね。なんといたら良いのかわかりま

せんが」

「そうそれ、”別にいいけど嫌”なの。今私そんな気持ち」

「申し訳ないです」

「いいのいいの、どうしても嫌！ とかじゃないしね」

お姉ちゃんは片手をひらひら振りながらパンをかじる。

「ロボットだって人間の子どもと同じ。わからないことは説明してやらなければならない。ただ物分りが良すぎて融通が利かないことも多々あるがそれは仕方のないことだ。ただこうしてともに生活をしているとそれだけ私の行動パターンっていうのかな？ そういうものをインプットしていくものだから教育・指導はしなくてもよい。なのになぜ私がこうしているのかというと……。人間と見ているから……。かなあ」

いつもの語り口。きつと心の中で思っていることが自然と口に出てしまっているのだろう。

私はその言葉に割り込むようにして話しかける。

「私をですか？」

私のことを人間として見ている？ 私のことはロボットとして見ているのではなかったのか？

「んー、そうそう」

「私を、人間として……。ですか」

思わず言葉に詰まってしまふ。

なぜならそれは大正解だからだ。なんだかやるせなくなってしまう、自嘲気味に笑ってみたりしてみる。

「じゃあ聞くけどさ、私とIRIAってどんな違いがあると思う？」

「えっと……それは……」

違い……。

違いなど、ない。

私は人間で、お姉ちゃんも人間だ。

違いがあるとすれば、それはお姉ちゃんのほうだ。

世界からほんの少しだけ、ずれたところにいる。

でも、そのずれはオーケストラの演奏で音を外してしまうくらいの致命的なずれ……だけだ。

「演算しても駄目だと思う。これはそういう種類の問いじゃないよ」

「……はい」

当然のごとく私はロボットではないので演算なんてことはしていないが、とりあえず頷いておく。

「じゃあ、私学校行ってくるから、帰ってくるまでの宿題ね」

お姉ちゃんはそう言い残すとイスから立ち上がり、玄関へ向かう。

「これ、お弁当です」

「あ、ありがとう」

お姉ちゃんにお弁当を渡すと、私は車椅子の準備をする。

「じゃあ、よく考えてみてね。いつてきまーす」

「はいです。いつてらっしやい」

そう言って私はお姉ちゃんを車椅子に乗せて玄関を出る。  
私よりも背が高いのに、軽い身体だ。

そして私は学校へ向かう。

今日もまた、お姉ちゃんの”無駄な日々”が始まるのだ。

「家でじつとしていようー。ここは”ソラ”の狭間なのだからー」

お姉ちゃんは陽気に歌なんて歌っていた。

私はそんな歌は聞いたことがなかったけど、その歌詞にはどこか  
デジャビュに似た感覚があった。

「コントラバスに乗っかってー」



## 始日・巻・（後書き）

勘のいい方ならもう気づいていると思いますが、ここからの話は第一章と照らし合わせて読むことでより一層、物語の深みを知ることができます。

それではこれより、IRIAもとい愛璃の視点から見た話が始まります。

## テセウスの船

「そう、たとえば”テセウスの船”だ」

機嫌よく歌っているかと思えば、姉は突然口を開いた。

テセウスの船……確かそれはパラドックスの一つだったはず。

ある物体（この場合は船のことだ）を構成している要素（たぶん船の部品とか）を全て置き換えた時、はたしてその船は基本的に同じでありえるかという話だ。

まあ、それを今なんでお姉ちゃんが話しているのかまったく理解できないけれど。

「IRIAの頭パーツを変えてみる。これはIRIAですか？はい、IRIAです」

「IRIAの身体パーツを変えてみる。これはIRIAですか？はい、IRIAです」

「IRIAの手足パーツを変えてみる。これはIRIAですか？はい、IRIAです」

「IRIAの顔パーツを変えてみる。これはIRIAですか？はい、IRIAです」

「ならば……」

お姉ちゃんは少し考えて、数秒止まったかと思えばまた口を開く。

「IRIAの記憶をつかさどるハードディスクを変えてみる。……」

これはIRIAなんだろうか」

「思えばどこからがIRIAでどこからがIRIAじゃないのか、なんて誰が決めるのだろうか？ それは主観によって変わってしまうものだ。もしかしたらIRIAの頭パーツを変えてしまうだけでそれはIRIAじゃないって人もいるかもしれない。そしたらだよ？ もし私が髪型を変えた時点でそれは私じゃないってことになるたら”私”ってなんなんだ？ 私は髪の毛なのか？ もし記憶喪失になってもはたしてそれは私か？ 記憶喪失になった私が私じゃないなら今の私って記憶なのか？ それとも顔？ 顔が変わったら私じゃなくなるのか？ だったら……」

「”私”って誰だ？」

姉の言葉はどんどん早口になっていく。

不安げな表情を余計に曇らせていきながら、言葉は饒舌になっていく。

「これは砂山のパラドックスにも共通するものがある。たとえば私の腕が一本なくなるとする。……これはまだ水無瀬優紀だ」

仮定の話でお姉ちゃんは自己質問していく。

まあ腕がないのは”たとえば”でもなんでもなく本当の話で微妙に的を射ているのが悩ましいところだ。

「もう片方の腕がなくなっても私。足がなくなってもまだ私。死んで物言わぬ屍になっても……それは水無瀬優紀」

「火葬して灰になった燃えカスも私？ だったら元素のCカーボンも私？  
なら物理の授業で私が出てきているのか？ そうじゃない、Cはみ  
んなだ。だから灰は固有名詞じゃない。だってみんな灰なのだから」

「だったら私ってなんだ？ 私って誰だ？」

「灰だけなのは私じゃない。腕だけなのも私じゃない。脳みそだけ  
なのも私じゃない。全てが合わさって私なんだ」

「……だから」

お姉ちゃんは空を見上げる。  
今日も代わり映えのしない空。  
ずっと変わらないであろう空だ。

「顔が違っても、声が違っても、記憶だって違っても……」

私ははっとして足を止める。

どこかで聞いた……言葉？ いや、そうじゃない。  
頭の端っこのほうでチリチリ、パチパチとなにかがはじけ、私の  
思考をくすぐる。

「私は私でいられたら、それでいいなって。誰かが私を私だって、  
わかっててくれたらいいなって思うんだ」

それは誰に対しての言葉なのだろうか。  
お姉ちゃんにはなにが見えているのだろうか？  
誰と……話しているのだろうか？

「IRIA……私は、誰？」

……えっ？

私は見えていないはずではなかったのか？  
でも、今確かにお姉ちゃんが私を。

「……なーんちゃって、ね。ちょっと悲壮感漂わせて見たりするの  
でした」

……独り言、冗談だったのだろうか？  
いや、それにしてもなにか真に迫るような……。

「和真か……急に人の妄想に入ってこないでよ」

和真……兄の……名前？

兄は……お姉ちゃんの世界から消されてしまったのではなかった  
のか？

私は周りの様子確かめてみる。

もちろん兄はいない。

そりゃそうだ、お姉ちゃんは兄のことを”和真”なんて呼んだり  
しない。

すると……その”和真”っていうのは……誰……？

ねえ、お姉ちゃん……あなたの世界には……何が映っているの？

「無限……」

なおも、お姉ちゃん謎の眩きは続く。

この眩きが、元の世界への帰還の拒絶を表しているようで……。  
お姉ちゃんが、帰ってきたくないよっていつてるみたいで……。

「お姉ちゃん……」

だから私はお姉ちゃんを抱きしめた。

ねえ、お姉ちゃんは私の体温をどう感じるの？

私はロボットだから冷たい？

それとも今は車椅子だから……なにも感じないの？

「嫌だよっ……！」

嫌だよ……そんなの……。

「……ひつく……嫌だよっ……！」

思わず漏れる嗚咽。

出口なんて見えない、回復の余地もなし。

どこへ進んでも、どこへ進んでも、行き止まりの迷宮。

私は……どうしたら救えるっていうの……？

「どつたの急に？」

「えっ……？」

お姉ちゃんの言葉にはっ、とする

私の思いが……通じた？

私が……見えるの？

「お姉ちゃん！ 私……私っ！」

抱きしめて、ただいまって言ってほしい！

もう大丈夫だよって、もうなんともないよって……私のことを抱きしめて……。

「……ならば……神はなにでできてるんだろう?。」

「お姉……ちゃん……?。」

……お姉ちゃんは私を見てなどいない。

その視線はただ虚空を見ている。

虚ろな瞳で、表情で……ただ虚空を見やっていた。

哲学者になりきった姉の……ただの独り言。

「もう嫌っ……」

もう、嫌なんだ……。

こんなお姉ちゃんを見るのは……嫌なんだ……！

「誰か助けてよお……誰かつ……あつ……ぐうう!!!!???。」

渦巻く思考。

あふれる感情。

逃げ場もなく膨れ上がったそれはダイナマイトの爆発のように弾けた。

バツッ。

瞬間、私の脳から大事なものが今まで聴いたことのない変な音とともに”切れた”。

ほら、見てごらん。

脳みそって大事でしょう?

ちよっと千切れちゃったくらいですぐおかしくなっちゃう。狂っちゃうんだよ。

「あ……………つつつつ!!!!!!??!!??!!??!!?」

ぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐる。

視界がぐるぐる回る。

上にいって、下にいって、私の口に入っていて、お尻から出てきたそれは私の大事なところへと進入して子宮へと到達する。

ほら、ここが赤ちゃんのできる場所だよ。暖かいでしょう?

「あつたかい……………あつたたらつたたら……………つたたかいよママ……………」

もうあんしん、とてもあたたかい。

とてもあんしん。もうだいじょうぶ。

ほら……………たくさんのあいじょうだよ。

おねえちゃんからじゃなくてもたくさんもらえるんだよ。

こころがこわれてよかったね。

じゅうどのすれすしょうがいなんだって。

もうかんじょうもなくなっちゃったね。

ろぼつとだね。

k a n z y o u . e x e

F i l e N o t F o u n d . . .



機械になった妹は世界を超える夢を見るか？

学校に着く。

教室に入ると、お姉ちゃんのクラスメイトの人たちからいぶかしんだ視線が送られる。

この視線にも正直慣れてしまった。

お姉ちゃんはというと、宮子、春香と呼ばれる架空の友達と楽しそうに会話している。

クラスメイトの人たちからは「相変わらず気持ち悪い」等の言葉が飛び交う。

私はそんな言葉が聞きたくなかった。

聞きたくなかったので、聞こうとしなないと思えばそれらの言葉は私にはまったく聞こえなくなった。

外の言葉　穢れたナイフの雨を完全にシャットアウトできるのだ。

不思議なものだった。

コツさえ掴んでしまえば後は簡単だった。

人間というのはよくできているなあ、というのが私の感想だった。

授業が始まると、私は授業参観の親さながらに教室の後ろに立ち、お姉ちゃんを見守った。

授業中、お姉ちゃんはずっと携帯を弄っていた。

もちろん、先生はそのことには気づいているが、あえて何も言わない。

医者からも、そう言われたからだ。

お姉ちゃんの社会復帰の為だ、と。

まあ学費はちゃんと払ってるし、他の生徒に迷惑もかけていないので当面の間はこれでいいそうだ。

授業が終わり、周りが騒がしくなる。

そんな騒がしさの中、私は声をかけられた。

「おはよう……愛璃ちゃん」

声の主は、同じクラスメイトの神田直人<sup>かんだなおと</sup>だった。

気弱そうな見た目をしているが、なにかと私たちの心配をしてくれている男子だ。

「おはようございます、直人さん」

私も挨拶し、会釈する。

「なにか、新しい遊びを見つけたみたいだね」

直人さんはお姉ちゃんを見やりながら言った。

”遊び”とはおそらく今、一生懸命に携帯を弄っていることの話だろう。

「はい、なんにでも夢中になることを見つけるのはいいことです」

私は純粹にそう思っていた。

せめて自分の中の世界の中だけでもなにかに没頭して、楽しくしてくれたらいいなと思う。

「でもあんなに夢中になるなんて……一体なにをしているんだろうね？」

「確かに少し気になりますね……」

……しかし。

「私は家で留守番していることになっているから、学校で姿を見せ  
てはいけないし……直人さん、ちょっと見てきてくれませんか？」

「僕が？ まあ……構わないよ。じゃあ見てくるよ」

直人さんはそう言ってしばらくお姉ちゃんの側で携帯を覗き、振  
り向いたかと思うと眉に皺を寄せ妙にいぶかしんだ表情でこちらに  
帰って来た。

「どうでした？」

「……なんか、凄い哲学っぽい感じの……難しいサイトの掲示板を  
見てみたいだったよ」

よくわからないが、もしかしたらお姉ちゃんの世界では別のもの  
に見えているのかもしれない。

しかし哲学……か。

頭のいいお姉ちゃんのことだから、やっぱりなにをするにも一般  
人には理解しがたいものになってしまうのは仕方ないことだ。

いつもとは多少違うところが見られたものの、大きな変化はなく  
一日は過ぎていく。

私はただそれを見ているだけ。

全ての私生活を投げたして、徹底して傍観者となるのだ。

しかしただ見ているだけではおもしろくない。

お姉ちゃんがどうすれば帰ってくるのか、いつもそれを模索して  
いるのだ。

例えば、そう。この世界の成り立ちから模索する。

これは仮定であり思考実験だが、まず反射率100%の鏡を二つ  
用意して、合わせ鏡とする。

ひとつの鏡の中央に穴を空け、そこから奥を覗き込む（この場合その穴には光の漏れが一切ないと仮定する）。

そこには”鏡に写った自分の目を写した鏡を写した鏡”を写した鏡、とループする鏡”がある。

反射率は100%なので事実上、無限個の目が存在することとなる。

有体に言えば、それは一種のフラクタル構造であり、その全ては大きさは違えど全て同一であるといえる。

しかし、そこで一瞬瞬きを試してみる。

鏡に映った目も閉じるのだが、像が写る速度は光の速さを超えられないため、こちらが目を開いた時、無限個先の目は閉じているはずである。

このように、全てが同一と仮定された中でも真は偽である場合が想定されることがある。

なぜこうなったのか？ それは先ほども出てきたとおり、全ての事象は光速を超えることができないからである。

それぞれの鏡に映った目が閉じるのはほんの一瞬のズレがあり、微々たるものでもそれはいずれ人間の目でも観測できるようなズレになる。

これは今朝お姉ちゃんが言っていた”テセウスの船”と同じ。

一枚目の鏡は”同時に目を閉じた”。そして二枚目も同時であるといえる。

そして三枚、四枚目となってもそれは変わらない。

だが無限先の鏡は、もはや同時に目を閉じてなどいない。

いわば高速で倒れていくドミノ倒しだと思えばいい。

”一枚前の鏡の目が閉じる前に、現在の鏡の目が閉じることは決していない”ということだ。

しかし、同時である、同時ではないという二つの答えがあったとして、その違いの境界線は果たして何枚目の鏡にあるのだろうか？  
もしもその鏡を見つけることができたなら、それが意識・認識の

境界線。

白と黒の間、正と負の間、1と0の間、そして……お姉ちゃんの世界と、私の世界の間。

こいつを証明することができれば、どうなる？

二つの事象は溶け合い、一つになるのだろうか。

お姉ちゃんを、救い出すことができるのだろうか？

……いや、これは妄言か。

そもそもいつからの鏡が同時でなくなっただか、などというのは観測した人物の主観で決められる。

いわば”一人一人に見えている世界は違う”のだ。

私は哲学者などではない。

立証されないものではお姉ちゃんは救えない。

他にも方法は無くもない。

例えば、群速度と呼ばれる速度が光速を超えることが観測されている。

この群速度は情報の伝達の速度を意味するものであり、光速の3倍の速度を観測した事例もあるらしい。

イメージとしては、AとB、二人の人間がそれぞれ宇宙空間におり、二人は数光年を超える位置に居たとする。

この時Aはとてつもない長さの棒を持っており、それはBの位置まで届いている。

そしてAが棒を引っ張れば、Bは動いた棒を見て、”Aが生きており、棒を引っ張った”という事象を光より速く観測することができる。

このような異例な情報伝達方法があるのなら同じ考えで、この世界と隣り合った別の世界の境界線を超えることができるのでは？

それにはまず先ほどの例のような長い棒に代わる”私からお姉ちゃんに届いているなにか”が必要だ。

まず思い浮かんだのは、言葉。

いや……言葉はそのまま伝わらない。

たとえどんな言葉を投げかけようと、お姉ちゃんにたどり着く時には別の言葉となってしまうている。

もつと直接的に伝わるもの……。

……痛み、とか？

いや、お姉ちゃんに暴力をふるうつもりか？

というか、仮に痛みは現実世界と同じだとしてもそれがなんだというのだ？

ただお姉ちゃんは痛いだけじゃないのか？

駄目だ……棒は見つかったけど、それが動くことが何を意味するかがお姉ちゃんにはわからない。いや、まあ”殴られた 痛い”そうかここは別の世界だったんだな”ということを理解しろというほうが無茶な相談だけど。

……と、そんなことを考えていると今日の授業はもう終わっていったようだ。

次々と生徒たちが教室から鞆を持って出て行く。

「では、今日もあそこに行きますか？」

私はお姉ちゃんの車椅子を押して教室から出ながら聞こえていないだろうが、一応話しかけてみる。

「さあて……放課後はなにをしようかなあ……？」

お姉ちゃんはそう呟くが、目的の場所は既にわかっている。

私はそれから何も言わずに、野中FRT……ゲームセンターへと向かった。

## 伝わらない言葉、繋がる想い

ゲームセンターに着いた私はさっそく店長に呼び止められた。

「またあんたらか……」

「ええ、それ相応の代金は支払っているからいいんですよ？」

店長の男は呆れ、あきらかにお姉ちゃんを変な目で見ながらそう言った。

私は表情を変えることなく、あっけらかんとした風を装ってみせた。

「ち……の言いつけがなけりや、こんな二人……いや、一人か。してやるのによぉ……」

なにやらブツブツと言いながら店長はゲームセンターの奥へと消えていく。

正直言つと店長は見た目も素行もとても怖いのであまり会いたくない。

今でも両手足が震えているくらいだ。

それでも、あんなに怖そうな人が私たちを追い払えないのはわけがあった。

実は私には毎日24時間365日、鈴付きをサポートする”ヘルパー”として勤務した分が国から給料として支払われているのだ。それは私用に使っていいとのことなので、お姉ちゃんがここを利用するのを断られないように店長に少々のお金を払って黙っていてもらっているのだ。

ただ、お金を払っているとはいえあまり大きな態度でいるとひど

い目に合わされるかもしれない。

怖いことや痛いことは嫌だし、なによりお姉ちゃんがどんな目に合うかわからない。

だからこれからはもう少し大人しくしていようと思う。

ゲームセンターに入るとたちまち騒がしい音楽と人の声が私の耳を刺激した。

大勢の人で賑わう中を、車椅子を押しながら悠々と人ごみの中央を突っ切るのはなかなか勇気のいることだったが、視線を下に落とし、周りの人の視線と交わらないようにすることでそれは達成できた。

お姉ちゃんの目当てのゲーム筐体は奥のほうにある。

ゲーム筐体とはいってもそれは電源の切られた、真っ黒な画面しか映っていない筐体だ。

まあ、お姉ちゃんの世界ではそれがどういったものに見えているのかはわからないが、お姉ちゃん自身はとても楽しそうなのできつと他のものに見えているのだろう。

私はそんなお姉ちゃんの後ろで、ただ見ているだけ。

今だって、そう。手を伸ばせば触れられるのだ。だが触れてはいけない。触れてはならないのだ。

今、私があるに触れたらどうなるのだろうか？

見えない？違うものに見える？

いずれにせよ、これ以上認識のズレを起こしてお姉ちゃんの病気を悪化させてはいけない。

触れられるのに、触れられない距離。

私とお姉ちゃんを隔てる世界の境界線が私を阻む。

どうしてあなたはみんなの違う？

どうしてあなたは違うものを見る？



どうして……どうして、そんなに楽しそうな顔をする？

ただ立ち尽くし、見ているだけの時間は過ぎていく。もうそろそろ帰る時間だ。

お姉ちゃんの分はもちろん、お兄ちゃんの分の晩御飯を作らないといけない。

私は車椅子を押し、また視線を落としながら店を出て行った。

「ただいまー」

夏といえどもすこしあたりが暗くなる時間、お姉ちゃんと私は家に帰宅した。

車椅子からお姉ちゃんをおろすと、私はさっそくキッチンへ先回りする。

朝、早起きして用意しておいたから揚げをレンジの中にいれあつためる。

「お帰りなさい、お姉ちゃん」

「ただいまIRIA」

お姉ちゃんはすっかり夕飯時の匂いにつられ思わずキッチンに顔を出してきた。

「今日のご飯はなに？」

「はい、今日はから揚げですよ」

二人で食事するにはとても食べきれないような、不自然な量のから揚げがキッチンに並べてある。

お姉ちゃんが食べ終わった後、お兄ちゃんにも食べさせてあげるためだ。

「っっていうか凄い量……いまに始まったことじゃないけど。……そう、IRIAはなぜかいつも料理をたくさん作る。まあ食べてみたら結局いつの間にか完食しているのだが」

やっぱり不思議に見られていたみたい。しかし、お兄ちゃんが食べている分がなくなっているということは、いつの間にか完食しているという認識になっていたのか。

話をしている間にレンジの音がピーっと鳴った。

どうやらから揚げが完成したようだ。

「はい、出来上がりです」

そうして私は食器をテーブルに運ぶ。

お姉ちゃんはいつも手伝おうとするのだが、腕が一つしかないのにそんなことさせられない。

ましてや”無い筈の腕があると思ってる”お姉ちゃんはどんな矛盾を起こした動きをするのかわからない。

そんなわけで、とりあえずお姉ちゃんの背中を軽く押しながらテーブルに着かせる。

「いただきまーす」

「はい、どうぞ」

お姉ちゃんが食事を食べ始めると私はいつも隣に座って食事の手

伝いをする。

自分で食べられるから、といわれたらいつも

「私の仕事ですから」

と、譲ってあげない。

私はヘルパーで、お姉ちゃんの妹なのだ。ここはだけは頑固にいかせてもらう。

「まあ、そんな日常にもすっかり慣れてしまったので私はもうなにも言わない」

……？

今、お姉ちゃんは何か言っていただろうか？

”もうなにも言わない”……か。

「こんなことを繰り返していたら私は料理はおろか食事の仕方まで忘れてしまつかもしれない」

「それはおおげさですよ、お姉ちゃん」

「おおげさといえば、こんな食事自体がおおげさだとも思うんだよねえ……。私は食事中、まったく手をあげることなく終始IRIAに”あーん”してもらうのだ。恥ずかしいというかみつともない感じもする」

……そうか、知らない間に迷惑をかけてたんだ。

やっぱりこういうことはただのおせっかい……なのかな。

でも、それは私の「仕事ですから、でしょ？」

私の思考にかぶさるようにお姉ちゃんは言葉を続けた。

わかってしまうのだろうか、私の沈んだ表情が……。

でも、お姉ちゃんは嬉しそうだった。

これはもつとお世話してもいい……ってことだよね？

「わかっていたのでしたらじつとしていてください。はい、あーん」

「いつもの日常では私がIRIAのイニシアチブを奪っているのに食事の時だけこの始末だ。このままやられたい放題なのも癪なので反撃してやることにした。そういやIRIA、私の出した宿題わかった？」

宿題とは、今朝いつていた私とお姉ちゃんの違いの話のことだろう。

その答えをみちびけたのかどうかを、いま問われているのだ。

……私の気持ちは、いつでも沈んだまま。

必死に言いたいことも、触りたい時も、全部我慢しなければなら  
ない。

この際、認識のズレというリスクを背負ってでも、本当のことを  
言ったほうがいいのでは？

言ってあげたい。こっちに帰してあげたい。

だから……私はこう答えることにした。

「ないのです」

ただ、一言だけそう告げる。

「あー……IRIAさん？ ないのです、とは？」

意味が伝わらず、聞き返される。

もついちど、今度はより鮮明に伝わるように説明する。

「ですから、私たちに違いはないのです」

「えっと……つまり私とIRIAは一緒ってこと？ あかね……いくらなんでも違いはあるでしょ」

確かに、にわかには信じられない話だ。

お姉ちゃんからしてみれば、一緒に過ごしていたロボットが実は人間だ、などといわれているのだ。

「まずあんたは食事しないでしょ」

「できない理由があるのです」

そう、お姉ちゃんの前で食事をしようものならその瞬間に認識の強制力が働き、お姉ちゃんの病気は悪化してしまう。

だから極力お姉ちゃんの前では食事をしないようにしていたのだ。ロボットのようにつとめるために。

「そんなシステムを積んでいないからでしょ」

システム？食事をするシステム、ということ？  
そんなものは必要ない。私は人間なのだから。

「違います」

「なにが違うの」

「違うのです」

「だから何が」

「お姉ちゃんにはわからないことです」

もついい。やはり説明してもわからないようだ。

違う世界の私が、なにを言おうともその言葉はまっすぐ伝わらない。

「はあ？　なにそれ、否定をするなら説明をしてよ」

……わからないなら教えてやる。

強制力がなんだというのだ？　そんなもの、捻じ曲げて捻じ曲げて捻じ曲げて……そうしてしまえば私の言葉は届くのではないのだろうか。

そう思った私は、真実を伝えることにした。

「私はロボットじゃない、人間だからです」

「ほら、そうやってすぐノイズを出す」

「ノイズなどだしていません」

伝わらないはずはないのだ。

私の言葉は世界に存在するのだ。

絶対に伝わるのだ。

「きつと演算処理に失敗したのね、今日はもうシャットダウンしな

さい」

演算処理なんかしてない、シャットダウンなんかできない。  
私はロボットなんかじゃない。  
どうして……どうしてわかってくれないの……。

「違うんだよ！」

「だからなにが」

「私は人間で、お姉ちゃんの妹なんだよっ……」

「だからなにが！」

「ひっ……く……」

お姉ちゃんはなにも聞こえない。  
私が見えない。

怖い。私という存在を認識されないことが怖い。  
私がロボットじゃないって……証明してくれないことが怖い。

「ごめんIRIA……私はあなたを下に見ているとかそんなんじゃない  
なくてただあなたならどう答えるか興味がわいただけだったの」

「いえ……お姉ちゃんは謝らなくていいのです。まだ不完全である  
私の不始末だから……」

そうだ、私はなにをやっている？  
こんなことをしてはお姉ちゃんの病気は悪化していくだけだ  
というのに。

「言葉を選ぶって大変だなあ……私の思っていることがそのまま伝えればいいのに」

お姉ちゃんは悲しそうな顔をしてそんなことを言った。

お姉ちゃんの中ではロボットであるはずの、私に。

思っていることがそのまま伝えればいいのに……か。

「伝わっているよ」

私は笑顔で言った。

お姉ちゃんの思っていることはずっと口にてているんだから。こんなに優しいお姉ちゃんの気持ちなのだから。それは世界が違えども、ノイズが混じることなく伝わる。優しさはそのまま私に伝わる。

「お姉ちゃんの思いはいつでも丸聞こえだよ」

「そうか、そうだったね」

「……うんっ」

嬉しくて、ただ私のことも気にかけてくれるのだと。

そう思われているだけで私は嬉しくて、笑って、お姉ちゃんと笑顔でいられるのだ。



## 描かれた世界線の式

食事を終えると、私とお姉ちゃんのはんびりとテレビを見ていた。お姉ちゃんの世界と、こちら側の世界の整合性を確かめるためにテレビの内容がどのようなものか、ということを一話していった。その中で一つ、お姉ちゃんが少し妙な……気になることを言った。

「これは証明問題……じゃないのかな？ ……へえ、結構おもしろいね」

見るとテレビに映し出された文字は”女が邪悪であることを証明せよ”と表示されていた。

なんだろう、差別がテーマの番組なのかな？

そう思いそのまま見ていると、それはどうやら日本のことわざをおもしろおかしく、無理やり数式にするとそうなる……というジョークだった。

「そうですね、今は凄くおもしろいと思います」

正直な感想を述べた。

考えた人はとてもユニークな人間だろうな、と思った。

しかし、お姉ちゃんの口からでた返事は私の予想していない言葉だった。

「えっと……おもしろいつて、なにが？」

「え……ですから、さっきの証明問題ですよ」

「証明問題？」

「今テレビでやっていた……あつ」

すぐに私は、はっとして口を閉じた。

また記憶の改ざんが行われたのだ。

しかし何故？

これは果たして世界の真実に関係することか……？

”見えているもの、見えていないもの”の違い……それがわからない。

「……ナナ」

「……え？」

テレビを観賞しながら携帯の画面を一生懸命に見ていたお姉ちゃんが急に呟いた言葉。

……ナナ？

「それは……人の名前ですか……？」

「覚えている……。見えている……私の大切な……」

目は虚ろ、ただ空を眺め、その姿は私を捉えていない。  
大切な……なに？

「……行かなきゃ……」

そう言ってお姉ちゃんは立ち上がると、リビングを出て行った。

おそらく自分の部屋にいったのだろう。

「あつ……待ってお姉ちゃ……」

突如、震える私の携帯のバイブレーション。  
どうやらそれはメールのようだった。  
タイトルは”世界の真実”

送り主は……” 電腦の少女 ”……？

そんな名前のアドレスは登録していない。  
私の記憶違い？  
いや、こんな名前は聞いたことも見たことも……。

ごくろ、と唾液を飲み込む。  
手が震える。

このメールを見るべきか、なかったことにするべきか。  
世界の真実……それはどのような解釈にもできる。

ただの妄言。  
お姉ちゃんの病気の真実。  
情報認識の違い。

……見るだけ、見るだけならばまだどうにもならない……はず。  
そう思った私は、メールを開いた。  
まずはじめに添付ファイルがあった。

「……これは……プログラムコード……？」

拡張子はJPEG……どうやら画像データのようだったが、よくわからない図になにかのプログラムコードのようなものが描かれている。

「たくさんの線に……これは球……かな？」

無数の線が縦に並んでおり、それらのマークが描かれている。中央部分にあるものだけは、なぜか大きい。

```
w o r l d   l i n e   p r o g r a m
```

```
w l " 2 0 0 0 + y e a r
```

```
w o r l d   c h a n g e ( w l " > c o i n   t o s s
```

```
< )
```

```
if ( c o i n   t o s s " " 1 ) t h e n
```

```
auto ( w o r l d 1 " " ( o g ( o g
```

```
else auto ( w o r l d 2 " " ( o g (
```

```
wait ( 3 0 s )
```

```
auto ( w o r l d 1 " " w o r l d 2 (
```

```
end if
```

```
> i 2 4 3 6 2 | 2 3 6 0 <
```

「ワールドライン……プログラム？」

プログラムらしき記述の一番上には、そう書かれていた。  
ワールドライン……世界の、線……？

私には、これらがとても意味のあるものに見えた。  
なぜだかは、わからないけど。

次に本文に目を通す。

携帯に届いたメールでは最多の文字数。

届いた内容はとても理解に苦しむものだった。

- - - - - 本文 - - - - -

想像してみしてほしい。

夏の午後7時くらいの時間帯程度に、暗くなった都市だ。

電車の走る線路……その高架下道路は影に覆われ、さらに暗いんだ。

どう？想像した？

……そして、人がたくさんいる。スクランブル交差点を人々が行きかう。

人々の歩みが止まると、今度は車が走る。右へ左へ、車たちが流れていく。

そんな中、交差点の真ん中を、少女は一人白いワンピースに身を包み裸足で突っ立っている。

人々の声、車の音、様々な雑音の中……少女は立っている。

その一つ一つを正確に聞き取ることにはできないけど、ただ騒がしいということはわかるよね？

ただ、それでも何故誰も少女を気に止めようとしないのか。  
道路のど真ん中に突っ立っている少女を、何故誰も注意しないの  
だろう？

これは独り言じゃない。……そう、君に話しかけているんだよ。  
液晶画面の前に居るあなたに。

あなたは自分が見ているものが、他のみんなが見ているものと寸  
分狂わず一緒のものかどうかわかる？

自分が赤色と思っているそれは、言葉で言えばみんなもそれを赤  
色というだろう。

でも、実際に自分で感じている色合いとほかのみんなが感じてい  
る色合いは、本当に一緒なのかな？

自分が見ている世界は、他のみんなが見ている世界とまったく同  
じなのかな？

私は普段からそんなことを考えていた……あなたはそんなことを  
考えたことはある？

……なにも反応しないね、まあそうだろう。

だってあなたたちにとって、こういう状況っていうのは”ここま  
ではまあ、よくある展開”ってやつなんだろう？

……問題は次だ。

私たちが、”こっち側の世界の秘密”に気づけた後はどうするか、  
それが最大の問題だ。

今回は、こっちから積極的にアプローチを仕掛けていくことにす  
るよ。

なにせこっちには優秀なメイドがいるんだ。

……？

本当になにも返事がこないね。

もしかしてあなたは どうしてこうなったかわかっていない？

……わかった、なら説明してあげよう。

どうして”コイントス”一つで、世界の仕組みに気づけたかったことをね。

なにもかも、意味がわからないみたいだね？

なら、納得させてあげる。

今、私を見ているあなたに、私が言った全ての謎を教えてあげる。そんなもん知りたくねえ、電波乙、とか思ってたなら携帯の電源を落として寝るといい。

そのほうが健康的にもいいしね。

ただ、コイントスでどうやって世界の仕組みに気づくんだ？とか、どうやって画面内の私があるあなたにこうしてコミュニケーションを取れるんだ？とかそういうことが知りたいなら、このメールに添付してあるデータを見るといい。

そのデータには私たちが今まで過ごしてきた日々が記録されている。

ちょっとしたタイムスリップ気分で見ればいいよ。ちょっとした神の視線ってやつを体験してもらうことになるかな。

あなたはデータを読み進んでいくと、またこのシーンに出会うことになるだろう。

その時にあなたは どうするか、きちんと考えてね。

どうか、平凡で……それでいて幸せな日々を、今回こそ取り戻すために。

- 電腦の中の少女より -

……衝撃だった。

コイントス一つで世界を変える？

そしてその答えが添付されているデータ……ってこと？

私は怖くなって携帯を閉じた。

このメールはいつたい誰から来たの？

なんのために送られてきたの？

様々な思考が頭を巡る。

気になる内容は他にもたくさんあった。

液晶画面の前にいる、私。

画面の中にいる、あなた。

……どっちが真実？どっちが仮想？

いや、この問いはあまりに愚問。

メールの送り主はいる。現実世界のどこかに、いるはずなのだ。

電腦の中の少女……。

あなたは現実の人間なの……？それとも……。



## 少女の病状、状弱な状況

気づけば、もう一通メールを着信していた。

お兄ちゃん……和真お兄ちゃんからだ。

内容は「今日の会議を始めよう。今家の前にいる」だった。

会議、というのは私とお兄ちゃんの二人で、どうすればお姉ちゃんの病気が治るのか、またこれからどのように対処していくのかという話を話し合うことである。

私は玄関まで小走り、扉を開けるとそこにはお兄ちゃんが立っていた。

「……メールを送ったはずなんだがな」

「ごめんなさい……ちょっとすっかりしてて……」

本当は変なメールが来たことでちょっと慌てていた。

いつもこの時間にお兄ちゃんが会議のためのメールを送ってくるのをすっかり忘れていた。

私はとりあえずお兄ちゃんをリビングへ招き入れると今日の報告を始めることにした。

「……優は、今日はどんな感じだった？」

表情は見えない。

ただ、淡々と私に尋ねる。

だから私もただ、答える。

「いつもながらに多少の認識のズレが……あと、ちょっと気になることが……」

「気になること?」

振り向いたお兄ちゃん表情は意外そうな顔をしていた。

私は今日の出来事で気になったこと……つまり、あのテレビを見ていた時の出来事について口を開いた。

テレビを見ている最中に急に認識のズレが起きたこと。そして……。

「お姉ちゃんは”ナナ”って呟いてた」

「ナナ?」

「その後すぐに「覚えている。見えている。私の大切な……」と呟いていました」

「覚えている、見えている、大切な……」

お兄ちゃんはすっかり考え込んでしまった。

私も一緒に思考を張り巡らせるが、解決の糸口は見えない。

「それって、人なのか?」

「だと……思います……」

「もしかしたらそれは……妄想友人《イマジナリーフレンド》かもしれない」

「妄想友人……ですか?」

「ああ、幼児期の女性にたまに見られる症状だ。架空の友人が頭の中だけに存在する精神疾患」

「それなら、宮子さんと春香さんが既にいるらしいですけど……」

「優のその口ぶりからすると、そんなことよりも更に重要なことなんだろう」

更に重要なこと……？

今までの妄想友人の二人の扱いとなにが違うのだろうか？

「今までの二人の存在は優の”一人しかいない寂しさからの脱却”を表したと医者と言っていた。だが、今回のそれは明るい性格の”設定”である優の世界定義を自ら壊しているようにみえる」

「自分から……ですか？」

「そうだ、優には解離性同一性障害や精神分裂病といった兆候も後に見られるかもしれないと聞いている。今、優はそれに近い……もしくはそんな症状が発生しているのかもしれない」

「そんなつ……だったらなおさら治療を急がないと……」

「いや、むしろこれはいいい兆候なんだ。言っただろ？」 優は自分が望むままの世界で、想像した設定で日常を過ごす”んだ。もしお前が何でも願いを叶えられるとして、そんな病状を抱えた日常なんて想像するか？」

私は首を横に振る。

そんな世界、断じて創造したりしない。

「そう、むしろこの病状は俺たちの見る現実世界の優の症状だ。それをあいつは自分で少しずつ理解している」

そうか……お兄ちゃんの言いたいことがわかった。  
つまりは……。

「お姉ちゃんの様子はおかしく、元気が無くなっていく度に少しずつこちらの世界に近づいてくるんですね？」

「そうだ、今まで認識できていなかった”トラウマ”を自覚できるようになり始めているんだ。そのナナという存在は恐らく、優からすればなんなのかわからない恐怖を紛らわせるための、防衛線の意味合いを持っているんだろう」

お姉ちゃんが回復傾向に向かってきている。

私はそれが嬉しいはず……嬉しいはずなのに、あんなに思いつめたような……元氣のないお姉ちゃんも見たくなかった。

そんな……複雑な気分を抱えてしまっていた。

「あ、そうだ……あともう一つ……」

そう、次はお姉ちゃんには関係ないかもしれないが、私が抱えた問題。

電脳少女からの謎のメール。

そのことについて相談しようと思った、そのとき。

「和真っ！」

「……っ!？」

思わず、息を呑んだ。

お兄ちゃんの名前を呼ぶ、その声の主はお姉ちゃん。  
どうして……？

お兄ちゃんの姿はお姉ちゃんには認識されなはずじゃ……。  
というよりも、”和真”って……どうして呼び捨てに？

そんな色々な考えを張り巡らせていると、お兄ちゃんは口を開いた。

「え？ ああ、こんばんは”水無瀬”」

私はさらに混乱した。

どうしてお兄ちゃんは不思議がらない？  
どうしてお姉ちゃんを水無瀬って……？

「悪い水無瀬、俺もう帰るから……じゃあまたな」

そう言ってお兄ちゃんが出て行こうとする肩を、お姉ちゃんが掴み静止させる。

「ちょっと待ってよ、なんであなたがここに？……それもIRIAと」

……お兄ちゃんをまるで珍しがらない。  
いや、確かに珍しがってはいるのだけれど……なにかおかしい。

「まあ……ちよつとな。もう帰るわ」

そう告げると、お兄ちゃんはお姉ちゃんの手を振り切って家を出

て行った。

お姉ちゃんはそれを見送り舌打ちをすると、今度は私に振り返る。

…… なにか聞かれる。

私はなんと答えたらいいのだろう？

「ねえIRIA、和真と何の話してたの？」

…… お兄ちゃんのあの対応は、なにかを…… このお姉ちゃんの違和感を察知していた行動に見えた。

だから私は下手なことを言わないようにする。

「…… すいませんお姉ちゃん」

「どうやら言えないことらしい。ロボットにプライバシーはいらない、とまでは言わないけど私一人蚊帳の外みたいでおもしろくない」

お姉ちゃんの、いつものモノローグのような語り。

心の中の声。

私のことを気にかけてくれているんだ……。

「そう…… じゃあ私お風呂に入ってくるね」

それだけ告げられると、お姉ちゃんはリビングから出て行った。

…… お姉ちゃんになにが起こっているのか、私にはなにがなんだかわからない。

「…… ワールドライン…… プログラム」

ふと、急に思い出したあのメールに書いてあった単語を呟く。  
今日は聞けなかったけど、明日お兄ちゃんに聞かなきゃ……。

それまでは、このメールには関わらないで置こう……。

そうして私は携帯をしまい、明日のご飯の用意を少しだけして、寝ることにした……。

## 神の視線と、夜の出来事      そして朝。

……深い夜の時。

我々が見る視線。暗い部屋、液晶画面を見つめる少女が一人。  
少女はナナ、ナナ……とうわ言のように呟いていた。

< 姫竜さんはね、血が大好きなんだそうです >

画面には、真つ黒な背景に、真つ赤で不気味な言葉。

見つめる少女はただ、こくんこくと頷き、それは正しいそれは正しい……と繰り返す。

”あの時”……いや、”あの世界での出来事”を強く心に刻んでいるのか、少女のナナへの信仰は病的と言っていいほどだった。

午前三時、深い闇。

少女は糸が切れたように倒れこみ、意識を失う。死んだのか？

……よかった、寝てしまっただけのようだ。

さて、ではそろそろ行こうか。時間がない。

あの少女を助けなければならぬ。はやくあの世界へダイブしなければ。

時刻は……そうだな、”私が生まれた日”がいい。生まれてから今までに、私が用意した世界のバグに、私が気づけばそれでいい。そして時間で言うと、今日の昼ごろまでには気づきあのロボットに理解させてやらなければならない。

よし、プログラムの修正はこれでいいな。

私ともあるう者が、随分とお粗末になってしまったが致し方ない。準備は整った。



これからしばしの世界旅行だ。

最後に向こうの私自身にヒントを与えておこう。さすがの私もノ  
ーヒントじゃ仕込んだバグに気づかないかもしれないし。

そうだな……私が始めて携帯を手にする日に、このメールが送信  
されるようにしておこう。

私はメールを作成すると、送信ボタンを押した。ついだからあ  
のロボットにも送信しておこう。

……

……

……<送信完了>

これでいいか……。いくらなんでもこれだけ材料があれば気づく  
だろう。

さあ、そろそろお楽しみの世界旅行の始まりだ。

気づけよ、私。世界の秘密に

…… 奇妙な夢を見た。

寝ている最中だというのに、お姉ちゃんが夜中に携帯を触っているのを見ている夢。

私はそれから誰かにメールを送信して…… それから？

…… 思い出せない。

まあいいか、夢は夢だ。はやく起きて、お姉ちゃんの朝ごはんの用意をしないといけない。

「確か苺のジャムパンがいいって言ってたっけ」

そんなことを思い出しながら、私はお姉ちゃんを起こす前にテールに朝ごはんの用意をしていく。

お姉ちゃんの望むように、ジャムパンを用意してあげた。

「褒められちゃったりして？ …… って、そんなことないよね」

自分で呟いた願望を一秒足らずに否定する。

何故？ …… だってそんなことありえないもの。

「さて、と…… お姉ちゃんを起こしに行かないと……」

…… 褒められたり、したらいいな。

なんて、ほんのちょっと思ってしまったのです。

「あのさIRIA」

「なんでしょう？」

テーブルについたお姉ちゃんは軽くため息を着いた。

私は、希望通り苺のジャムパンを振舞った。

ちゃんと言われた通りにしていたはずだけど……目の前にいるお姉ちゃんはなんだか呆れ顔だった。

「なんで二日連続で苺ジャムなのさ」

……え？

そんなはずはない、昨日は白いご飯だったはず……？

……いや、昨日あたりからお姉ちゃんの様子は変だった。（実際には治ってきている証拠らしいけど）

このくらいの認識のズレはもう当然のものかもしれない。

「ごめんなさい、すぐ別のものを用意します」

「大丈夫大丈夫、昨日も言ったけど」別にいいけど嫌」なだけだから、ね？」

メニューは間違っているのに、自分が言った言葉は覚えている……。  
とても謎な現象だ。これもお兄ちゃんに相談しないといけないかな？

「ほら、はやく食べさせてよ。自分で食べちゃうよ？」

そう言っ腕がないのに上半身を傾けるお姉ちゃん。

「だ、駄目です！ 私の仕事です」

すぐさまパンを適度な大きさにちぎりお姉ちゃんの口へ持っていく。

危なかった……大事な制服にジャムが付いてしまうところだった。

「ん……んぐ、ずるいよIRIAは。だってこんなに優しくて可愛いんだもの、なにも言えなくなっちゃう」

「そ、そんなこと……は」

い、いきなりお姉ちゃんは何に言っているの？

褒められたのは嬉しい……けど……私、顔赤くなってないかな？

「あはっ、照れてる照れてる」

……お姉ちゃんのほうがずるいと、私は思った。

なんだか、こんなお姉ちゃん的笑顔を見たのは随分と久しぶりか

もしない。……いや、”生まれてからみたことはある”よね？  
……疲れてるのかな、お姉ちゃんの写真がちょっと思い出せなかった。

「ほら、はやく食べさせてよ。学校に行かなきゃ」

はやくはやく、と催促をされる。

私は慌ててまたパンをちぎって、口元に持って行ってあげる。

「は、はいお姉ちゃん」

こうして、なんだかんだとありながら私たちは暮らしている。  
今はこんなお姉ちゃんだけど、私にとってお姉ちゃんは最高の”お姉ちゃん”なのだ。

「ご馳走様」

「お粗末様でした」

早々に食事を終わると、お姉ちゃんはカバンを手に取り玄関へ向かう。

玄関先に置いてある車椅子に、ごく自然な動作でお姉ちゃんを乗せてあげる。

「じゃあ、行ってくるね」

「はい、いつてらっしゃいます」

いつてらっしゃい、などといいながら私はお姉ちゃんの手椅子を押して家を出た。

今日もまた、お姉ちゃんにとって無意味な一日が始まるのだ……。

## ここまでがプロローグ

お姉ちゃんと共に家を出た私を待っていたのは、お兄ちゃんだった。

何故？昨日の出来事からお兄ちゃんがお姉ちゃんから見えるっていうのはわかった。

でも……こんなに簡単に目の前に現れていいの？

「なんているのさ」

お姉ちゃんが、いぶかしむ様な表情でお兄ちゃんを見る。

「なんとなく、一緒に行こうかなと」

「まあいいけどさ」

何事もないように、まるでそれが当然……いつもの日常であるかのような振る舞い、やり取り。

お姉ちゃんの認識は劇的に変わった……？

それも、今までにない変化が。

「女が邪悪であることを証明せよ」

しばらくすると、お兄ちゃんは急に口を開いたかと思うと変なことを言った。

……ああ、そうか。

これは昨日テレビでやっていたジョークの、証明問題の話だ。

確かお姉ちゃんも一緒に見ていたはず。お姉ちゃんはすらすらと公式を話し、答えを証明してみせた。

「……こんな感じだったかな？ まあわりと簡単かつ、ちょっと面白い話だよな」

「大正解だ、さすがは水無瀬だな」

お兄ちゃんが賞賛の言葉を送ると、お姉ちゃんは思いがけない言葉を返した。

「4ちゃんまとめスレで見たことあるしね」

「ん？ なんだそれは？」

お兄ちゃんは私をちらりと見て「これはどういうことだ」とでも言いたげな表情をした。

私も知らない。この証明問題の話は昨日見ていたテレビ番組で知った情報では……？

「ああいや、こっちの話。……なんだ、意外とそっちの方面の知識には疎いのか」

お兄ちゃんの問いに対して、お姉ちゃんはなんでもないと話題を流した。

お姉ちゃんの言う”そっちの方面”とはなんなのだろうか。

証明問題の知識は昨日のテレビではなく、どこか別の場所で知ったのだろうか？

だとするとお姉ちゃんのいう”そっちの方面”というのは、あんな証明問題があるくらいなのだから、面白い話題であふれている場



所なのかもしれない。

「それで？」

「ん？」

「いや、「ん？」じゃなくてさ。なんでいきなりそんな話？」

「ああ、そのこと」

お姉ちゃんは どうしてお兄ちゃんが昨日テレビでやっていた証明問題の話題を急に投げかけてきたのか、疑問に思ったのだろう。

お姉ちゃんは首を傾げながらお兄ちゃんを見つめた。

そんなお姉ちゃんの問いに対して、お兄ちゃんは空を見上げながら、まるでその先に”誰か”を見るような視線を空に向けながら意味深なことを言った。

「俺とお前には、どれだけの差があるのだろうか」

「差？ 特にないとは……思っけど？」

お兄ちゃんの言葉に、お姉ちゃんはさらに首を傾げ、うーんと唸った。

「いや、今の知識な。昨日テレビで見たんだ」

私もそうだ。

でも、お姉ちゃんはどこか別のところで知った。という風なことを言った。

「さつきから話が繋がっているのかいないのか、よくわからない。こいつは一体何が言いたいのだろう」

お姉ちゃんの心のモノローグが口を通して声となる。

私にも、お兄ちゃんが話そうとしていることの意図が見えない。

「そうなんだ。なんチャンネルで？」

こちらは通常の話し声だろう。

お姉ちゃんはいぶかしみながらお兄ちゃんを見る。

「4チャンネル」

お兄ちゃんは端的に、チャンネルを告げる。

そうだ、私も4チャンネルの番組である問題を知った。

「でも4チャンネルなら私も見てたけどなあ……。そう、私も同じチャンネルを見ていたはずだがそんな放送は見なかった」

……え？

いや、お姉ちゃんは確かに昨日私と一緒に見ていた……。はず。

「夢でも見てたんじゃないの？」

「違うね」

お姉ちゃんの疑問を、ただ一言で否定するお兄ちゃん。

その後はパレルワールドの話を聞いて、お姉ちゃんの認識が私たちとずれていることをお兄ちゃんは知らせようとしていた。

しかし、それはお姉ちゃんが本当の世界に気づく要素にはなりえない。決して届かない。

何が邪魔をするのだ？

どうして届かない？

いい加減にしろ！

誰に言うでもない、私は心の中で叫んだ。

誰か、誰でも良い。

私をこの悪夢から覚めさせてほしい。

そんなことはありえないと、そう思いながら私は願った。

この時の私はどんなものにも縋り付きたい気分だったのだ。

しかし、そんな願いがまさか今日叶うとは、この時の私は考えもしなかった。

## 少女は世界の真実に触れた気がした

学校に着いてもすることは同じ。

私はただお姉ちゃんが過ごしている姿を見ているだけ。

……しかし今日は決定的に違うことがあった。

圧倒的に日常から外れた異常は休み時間に起こった。

「おはよう、IRIA」

……誰？

どうして私のもう一つの名前を知っているの？

声に振り向くとそこにいたのは神田直人だった。

直人さんが……どうして？

「メールは届いたかい？ 昨日”届くように”送ったはずなんだけ  
ど」

私の頭の中のシグナルが一齐に、けたたましく点灯する。

なにか危険だ、そしてそれよりもなによりも、この人は今までの  
直人さんじゃない。

「あなたは……誰、ですか……？」

私の喉から出た言葉は、ただ疑問を搾り出すことだけだった。

「誰って、正真正銘”神田直人”さ。ちゃんと今の意思を持って、  
この十数年生きてきた本人だよ」

この人があのメールを送ってきた張本人？  
今までと全然雰囲気が違う……。

…… 本当にお姉ちゃんを救う手がかりを持っているの？

「あの……メールのことは……」

「ああ、全て教えてやる。今、ここで」

私は興奮していた。

あの不可思議なメール。

世界の秘密…… 人々が知りえないなにかを知っている、この様子。外から見れば私も、直人さんもおかしな人間に見えていただろう。しかし、客観的に自分を見れないほど、今の私はなにも見えていなかった。

どんなチープなファンタジーでも、お姉ちゃんを助けてあげられるのなら…… なんだってよかったのだ。

「ただし、今からこのコインをトスして表なら教えてやる。裏なら絶対に」 教えない」

そういつて直人さんが取り出したのは一枚の銀色のコイン。

拳銃のマークがあしらわれている方が表、Rと一文字書いてある方が裏だ…… と、直人さんは話を続ける。

私は不思議でしうがなかった。

ここまで大きな話をふつておいて、コイントスの結果によっては教えてくれないだって？

その行為になんの意味があるんだろう？

「納得いかない……という顔をしているな」

私は黙って頷いた。

果たしてそのコイントスとやらには、どれほどの意味があるのかと……私が抱くその疑問は直人さん自身も予測していたらしい。

「強いて言うならこの行為が話の全てだ」

更にわけがわからなくなってきた。

ただただ不思議でたまらない私に直人さんはペンと紙を差し出した。

「さて……IRIA、今は何年だ？」

「え？ えつと……2010年……ですか？」

急に「何年だ？」と、尋ねられた私はとっさに反応して答えた。

「ならば、2010とその紙に書け」

言われるがまま、私は紙に2010と書き込んだ。

まだまだ意味不明だったが、疑問を投げるのは一連の流れが終わってからにしよう。

「次は3つの数字を足して、答えが2010になるような式を書け」

私はしばらく考えると、「560 + 247 + 1203

＝2010」と書き込んだ。

なにか捻ったわけでもない、ただ無造作に思いついた数字を書いて、あとは2010に合わせただけの式。

「書けたか、それは”絶対に合っている”な？ 数字に間違いはないな？」

やけに間違いがないかどうかを強調されて聞かれた。

3回も計算をし直して、それが絶対に合っていることを確認する。

「では、その紙は丁寧に折って大事に持っておけ」

その言葉に従い、意味のなさそうな数式を書いた紙を折ると両手でぎゅっと握った。

なんだか、テレビでこういうの見たことがある。  
手品かなにかをするんだろうか？

「……そして、ここからが話の本番だ。今からこいつを上弾く」

そうして直人さんの手には先ほどの銀のコイン。

直人さんはそれを自分の親指に乗せる。

「今から俺はコインをトスし、表なら真実を教える。裏なら教えない。これは絶対だ……絶対にこのコインに俺は従う」

まるで直人さんは私にではなく、自分に言い聞かせるように言った。

そして、コインが宙に舞う。

そのすぐ一瞬後にパシンッ、という音と共にコインは手の甲と手のひらを合わせキャッチされる。

「……結果を見るぞ」

直人さんがゆっくりと手を退かせる。

私は生唾を飲み込みながらそつと覗き込む。

そこに描かれているのは……。

「拳銃のマーク……表だ！」

私は思わず声をあげる。

これで私はこの不可思議な行為の意味と、あのメールについて教えてもらえるのだろうか？

「ああ、教えてやるよ。その前に……」

直人さんはコインをポケットに突っ込むと、口元を歪ませて私に尋ねた。

「今日は何年、だったか？」

「2011年ですけど……？」

さつきも聞かれたので、さつさと答える。

この問いにも何か意味があるのだろうか？

それとも……私はからかわれているのだろうか？

「そうか、ならお前がさつき書いたメモを開けて見せてくれ」

私は両手に持ち続けていた紙を広げて見せた。

そこに書いてあるのはもちろん、今年の年号とそれに合わせた数式が書いて……え？



「へえ……」560 + 247 + 1203 = 2011  
か。IRIA、これ間違えてないか？」

紙を覗き込みながら直人さんは2011の部分を目指す。

そんなはずはない。

さつき3回も確認したのだ。

数式に間違いはないはず……でも、この式の答えは2010……  
それはつまりこれを書いた時点では2010年だったということ……  
…?

そんな馬鹿なことがあるはずがない。

ただコイントスをしたただけで……こんなこと……。

「……なにをしたんですか……？」

「ただ、コインをトスする前に表裏の結果による行動を決めたただけだ。ただそれだけでこの世界の年号に係する数字は認識上でだけ1足される。だから年号に係ない数字は変わらない。……式に間違いが生じたのはこのせいだ」

そう、式に間違いがある……本来の答えは2010で、私は今2011年だと認識しているのだから、これを書いてからもう1年は経ったはずなのだ。

ただ、周りの景色は変わらない。

生徒のみんなの顔も変わらないし、みんながなにかに気づいた様子もなく、どうしても1年経ったようには見えない。

「どう……して……？」

「これがこの世界の原理、真実……バグとも呼べるな。結果がラン

ダムに変わるコインの表裏によって行動が分岐する時に限り、この現象が起きる。さっき俺がやたら強調して宣言したのもこの現象を起こしたかったからだ」

意味が分からない。

なぜ？どうしてそんなことで、こんなことが起きる？

この世界は……この世界は一体……。

「この世界は……なんなんですか……？」

「何回この現象が起こって、本当は今が何年なのかは知らないが俺なりの考えがある」

そうだ、今は2011年。

でも、こうして知らないところで年数の数字だけ変わっているのなら、本来の年号がわからない。

思考を張り巡らせ悩む私に、直人さんは言い放つ。

「この世界は、何者かに作られた電脳世界 サイバーワールド  
…電気信号の世界かもしれないということだ」

## 妄信の銀の弾丸 シルバーバレット

「電腦……世界？」

直人さんが言った言葉。それは私が今まで信じてきた世界の構造そのものに対する反抗だった。

電腦世界……お話の中でだけど、聞いたことがある。

私たちは電子的な存在で、そしてそれを観測している”上位の観測者”がいるというSFのお話。

2010の記述がどのような理由で2011に変わったのか……しかしその考えなら、こんなバグもあるのかもしれない。  
いや……もしくは……。

「誰かが意図的にこうなるような……直人さんが気づけたように、この世界の住人が違和感を感じるように工作されているのだとしたら？」

「この世界が電腦世界だという前提があるのならばそうかもしれない。何故そんなことをしたのかは不明だが……」

と、思考を巡らせている内に休み時間が終わり、授業開始を告げるチャイムが鳴った。

「……IRIA、もう少し話がしたい。屋上へ行こう」

「え……でも、お姉ちゃんが……」

「どうせ一日中携帯弄ってるだけだ。お前も今までずっと退屈な毎日だって……思っていただろう？」

「……それは……」

確かに、思っていた。

私はただ見ているだけだもの。

私は学校にも通えない、ただお姉ちゃん的生活を見て……それだけ。

「……わかりました……」

そうだ、私にだって少しの自由はあってもいいはず。

それよりも、この話はお姉ちゃんにとっても大事な話だから……許されるよね？

そうして着いていった先は屋上。

空はまるで世界の破滅を意味するような、禍々しい紫色をしていた。

このような比喻をするのも私の心がきつと不安だからだ。

「……そのコインは、一体どこで手に入れたんですか？」

私は聞いた。

あのようなコインが普通は手に入るはずがない。  
例えばここが私が信じてきた世界でなくてもだ。

「……貰ったんだ、女の子から」

「知り合いですか？」

「いや、まったく知らない。これは運命を変えるコインだと、そう  
言って渡された」

「運命を……変える？」

「ただ信じれば良いと、そう言っていた。これは妄信の銀の弾丸  
シルバーバレット というらしい」

「妄信……？」

「信じていればその通りになるとか……そういうことじゃないかと  
思っている。現に不可思議な自体は起きている」

そう言つと直人さんはさっきのコイン　銀の弾丸を取り出して  
見せた。

「それに……こいつの効果は世界の年号を変えるだけじゃない」

「え？」

「コインによって決められた行動……それにより分岐する世界……  
俺はそれを体験した」

「分岐する世界を……体験……？」

「俺がお前に世界の真実を教えなかったパターンの世界の結末……  
それはとても汚くて、それでもお前達は幸せそうだった」

「……私達になにが起きるんですか」

可能性の未来。

私がこの世界の秘密を知らない結末。  
それを直人さんは見てきたという。

「……お前はロボットとして生きた。そして水無瀬優紀は死んだ」

お姉ちゃんが……死ぬ？

私がこの話を聞かなかった世界で……お姉ちゃんは死んでしまう？

「水無瀬優紀の唯一の救い……畏怖の対象である”あの女”に勝つこと、それができなかった」

あの女。

私を知っている人だろうか？

少なくともナナという人のことではなさそうだけど……。

「お前にとってはこちらが正解の世界だろう。この世界ではまだ何  
が起きるか分からない。水無瀬優紀が死ぬこともまだ……」

「……お姉ちゃんは、どうして死んでしまうんですか」

死因。

それがわからなければ、今後この世界でもお姉ちゃんの死を防ぐ  
ことができない。

「死んだというよりは……ここから上位の世界、ここが電腦の世界  
ならばそれは現実の世界といふべきか。そこに還っていったんだ」

それはつまり。

現実の世界から何かしらの方法で意識、人格といったものをこの世界に送り込んでいるのならば……お姉ちゃんは元の世界に帰ったということ？

しかしそれはこの世界では死んでしまうということ。

どちらが正しいのだろう？

私はこれから何をするべきなのだろう？

……いや、答えは決まっていた。

「私……お姉ちゃんと一緒に居たい……」この世界”で……」

そうだ、元の世界がなんだというのだ。

大切なのは今、そう……今なのだ。

「……そうか、ならこれをやる」

そう言って直人さんは銀の弾丸をこちらに投げた。

私はびっくりしたけれど、それをキャッチして空にかざすとまじまじと見つめた。

それは鈍く輝いていて、希望を託すに相応しい魔性の魅力がこもっていた。

「  
」

私はそう呟くと、銀の弾丸を指で弾いた。

「ここから世界は、木の根のように拡散し、分裂していくことだろう。」

そしてその木は葉を宿し、いずれそれは運命の書かれたアカシヤの葉へとなるだろう。

どうか、私に幸せな日常をください。

「こんにちは、私の愛した日々よ」

そして私は銀の弾丸を手の甲でキャッチした。



ナナ

ドランカー！。

今、世界を騒がせている怪病であり、その解明が急がれている。症状は、過度の妄想思考による現実逃避。重度の精神疾患。

俺の両親はドランカーのことを解明する研究員だった。両親は研究ゆえに家に帰ってくることは少なく、俺は妹と二人で平凡な毎日を暮らしていた。

息子である俺はというと、なんでもない学生生活の毎日。……だったはずなんだ。

ある日、両親がドランカーを患ってしまった。

とても研究が続けられる状態ではなくなってしまったので、病院へと搬送された。

残された俺と妹の二人は、平凡な毎日を暮らせなくなってしまった。

両親が働けなくなってしまったので、まずお金が無い。

最初のうちはなにもせずとも貯蓄があったのだが、収入が無ければいずれ崩壊する。

「二人で学校を辞めて、働こう」

そう、提案するつもりだったんだ。

普通の生活をするためには、そうするしかないから。

でも、俺がその話を切り出そうとする直前に妹が言ったんだ。

「私はドランカープロジェクトの研究員になりたい」

ドランカープロジェクトの研究員。  
ブランド中のブランドの職業。

かつて両親の職業であった研究員に、妹はなりたいたった。

どうして？

俺は聞いてみた。

ドランカーが発症する原因は分かっているが、発症確立はドランカーを研究している研究員に多いそう。

それに、研究員になるには常人には計り知れないほどの学力が必要らしい。

国が有するドランカーについての研究者養成学校。

その学校を卒業しないといけないのだが、養成学校は毎年5人しか入ることができない。

入学するには何千人という天才から5人という枠を奪い取らねばならない。

気が遠くなるような勉強が必要だろう。

正直、人生を楽しめたもんじゃないと思う。

それなのに、何故？

そこまでしてどうして研究員になりたいのだろう。

すると妹は言った。

「お父さんとお母さんを、助けたい」

……そうか。ただ、助けたいだけなんだ。

高収入だとか、ブランドとかでなく、ただ病気の両親を救いたい

だけ。

偉いな、お前は。

俺は今まで研究ばかりでまったく構ってくれなかった両親を憎んでさえたというのに。

それを、助けたいだって？自分の人生を潰してまで？

そんなの、理不尽だ。

「ただでさえ俺達から普通の生活を奪ったのはあいつらなのに、それを救うために自分の人生を諦めるのか？」

少々キツイ言い方になったが、俺は思ったことをはっきりいった。

人並みとは言わない。ちよつとでも幸せに暮らしてほしいんだ。

そんな、勉強の毎日で苦しい思いをしてほしくないんだ。

すると妹はこんなことを言ったんだ。

「奪ったのはお母さんやお父さんじゃない、悪魔の病氣ドランカーだ。私がそいつをやつつける」

確かに、そうだけど……。

両親だって、なりたくてなったわけじゃない。それもわかってる。最大の原因の発端がドランカーだってこともわかる。

でも……。

……。

……いや、それが妹の望むことならば叶えてやりたい。

妹が両親のために人生を賭けるというなら、俺はお前の夢のために人生を賭けよう。

学校を辞めるのは俺だけで十分だ。  
中退がなんだ。  
仕事なんてなんだってやってやる。

。

。

妹が、ドランカーになった。  
学校で虐められていたらしい。それでも、学校内のことに關して俺はなにをすることもできなかった。

妹が通っていたのは学力は普通の高校だった。  
そう、ドランカーになることは諦めたのだ。  
最初こそ頑張っていたのだが、精神をボロボロにする程の勉強、勉強勉強勉強の毎日。

趣味など持った他、ドランカーに関する知識以外を得ることなどまったくせず、世間のことを知ることなかった。……耐えることが、できなかった。

嘔吐するのは一日に一度や二度ではなかった。  
医者からも、このままでは死んでしまう、と。

見かねた俺は妹に「頑張らなくていい」と言った。  
壊れかけた妹は笑顔を見せてくれた。だからその時はそれが正解だと思っていた。

普通の高校に入り、やっと妹は悪夢から解放され普通の女の子として過ごすことができるんだと思っていた。

でも、人とまったく接触することなく過ごしてた妹はまったく空気に馴染めず、友達を作ることができなかった。

だから、学校ではまるで息をするかのように勉強をしまっていた。

小さな頃から、ずっと勉強をしていた……もう勉強するのが癖のようになっていた。

教室の窓の外に閉じ込められたり、椅子に接着剤を塗りたくられる、遠征旅行での遊園地で一人置きざりにされる等……。

そうとう辛かったのだと思う。

時々虐められたことを思い出せば、頭が痛い、火花がパチパチするみたいに痛むと、そう言っていた。

……忘れられることができないのだろう。そんな発作が起こるたび、俺は側にいてやることくらいしかできなかった。

ドランカーになったのは過度なストレスを受けたことが原因かもしれない、と医者は言っていた。

勉強の毎日でのストレス、そしてそんな毎日を送ったせいで虐められ、そのストレスで……。

……最初の選択が間違っていたのだ。

勉強なんてさせず、楽しく過ごさせていればよかったのに。

もし時間を戻せるなら、俺はあの時の俺を止めたい。  
そうすればこんなことにならずにすんだのに……。

そんなことを考えながら、アパートのベランダから空を見つめる。  
この空の色さえ、きっとドランカー達からしたら別の色に見える  
いるのだろっな……。

今は晴れてるけど、あいつらの世界では雪とか降ってたりして。

「……そんなことも、ありえるんだよな。ドランカーの人たちには」

誰に言うでもなく、俺はそんなことを呟いていた。

……そんな時。

「……雪？」

雪が降ってきた。

馬鹿な、今は夏だぞ？まさか俺もドランカーに？

手を伸ばし、雪の一つを捕まえる。

……冷たくない。

よく見てみると、それは紙で作られたものであった。

そうか雪ではなく紙吹雪だったのか。

ホッと一安心をする。それと同時に、ある疑問も沸いてくる。

降ってきた雪は人工物だとわかった。つまり今この瞬間、上から  
降らせている人物がいるはずだ。

「……ちよつと見てくるか」

俺は玄関から外に出ると、アパートの屋上を目指した。  
なにしろ雪と間違えるくらい降ってきた紙吹雪の量は異常だったのだ。

そんなことをする暇人がどんな人物なのか、気になるじゃないか。  
暗く狭い階段を上り、屋上へのドアを開ける。

そこには、妹そっくりの車椅子に乗った少女がいた。

「……君は……?」

「私は被験者N o . 7 ……」 ナナ」

## 自己主張の鈴

「ナナ……？」

目の前の、妹に似た少女に圧倒的な違和感を感じ、思わずその名前を反復してしまう。

顔立ち、声、なにからなにまで妹と似ていた。

しかし、この少女には妹とは決定的に違う部分があった。それは……。

「右腕が、ある……」

そう、目の前の車椅子の少女は妹と違い”右腕がある”のだ。それがこのナナという少女と、妹との決定的な違い。

「右腕……？」

俺の言葉に反応して自らのその細い腕を不思議そうに見つめるナナ。

「あ、ああ……今はこつちの話」

どうやら俺の言動で彼女を不思議がらせてしまったようだ。

まあ、不思議といえば俺もこのナナについての疑問はいくつもあるのだが。

「名前……」

「え？」



「名前……教えて」

あ、そういえば俺はまだ名乗ってなかったっけ。  
あんまりに妹に似てるものだから、ちよつと動揺してしまつてい  
るようだ。

「俺は水無瀬和真、えつと……ナナちゃんだっけ。こんなところで  
何してるんだ？」

「紙吹雪を……降らせている……」

……まあ、それは見たらわかるが。どうして降らせているのかを  
聞きたかったのだが。

「……どうして降らせているか……？」

「そうそう、どうして降らせているんだ……って、あれ……俺声に  
出してたっけ？」

俺の思っていたこと。紙吹雪を降らせる理由が知りたいというこ  
と。

考えていたことが、目の前の少女の口から発せられる。

「世界には」

「はい？」

「世界には、たくさんの形がある。元は一つだけど、世界を見る人  
の感じ方、その感性の数だけ世界がある」

俺の疑問はスルーされ、ナナは散らせた紙吹雪を眺めながら、あ  
る一人のドランカー研究者の有名な言葉を呟いた。

別に、俺だって少しくらいはそういう知識だってある。もちろん  
知っているさ。

だから、俺はその言葉の続きを紡ぐ。

「……しかし、その”元の一つ”を見ることが出来る人はいない。  
世界を有りのままに感じる人ができる人などいない」

するとナナは驚いたようにこちらを見て、更にその続きを言う。

「ならば、正常な人などどこにもいない。我々は皆、ドランカーな  
のではないだろうか」

言い終わったその直後、屋上に風が吹き、舞い上げられる紙吹雪  
たち。

そしてそれらはやがて浮力を失い、町の中へと吸い込まれていく。  
風の音も、紙吹雪が散る音も無くなった静寂の中で、ナナは俺に  
問いかけた。

「あなたは、ドランカー？」

俺は言葉に詰まった。

どう答えていいのかわからなかった。

さっきの言葉の後ならば、人類は全てドランカーである。

つまり、あなたは人間か？と問われていることと同義であるのだ。

「さっきの言葉を受け取ったまま答えるとしたら、俺はドランカーだろうな」

だから、有りのままを伝えた。

俺だって、感じている世界は寸分変わらず他人と一緒にだということはないだろう。

そういった意味では、俺もドランカーだということだ。

「答え」

「うん？」

「さっきの質問の、答え」

さっきの……というと紙吹雪を降らせていた理由はなにかということに対する答えのことか？

それにしても、変なコミュニケーションのとり方をする子だな……。

「今日、7月20日。この町に雪が降りました」

「違う、君が降らせたんだ。ただの、紙を」

「それはあなたの世界。他の人の世界では、きっと雪が降っている」

他の人……ドランカーのことか。

確かに、俺が一瞬見間違えたくらいだ。ドランカーならば本当に雪が降ったという体感になりかねない。

「……世界には、たくさんの不安であふれている。あるはずの無い

ものに怯えている人がいる」

……うちの妹がまさにそんな状況だ。  
勝手に世界を自分の中に作って、現実から怯えて……。逃げ続けているんだ。

「私の友達が……ドランカーなの」

「……そう、だったのか。可哀想に……」

気狂いの病気、ドランカー。

身内にその患者がいれば、その苦勞は痛いほどわかる。

「でもね、その友達はいなかったの」

「え……いない……？」

”いなかった”とはどういうことだ？

……まさか！？

「想像上の友達 イマジナリーフレンド ……ドランカーの人が見る、幻影……空想の人」

やはり、そうか。

できるだけ視界から外していたのだが、どうやら本物だったらしい。

”あの首に提げてある青色の鈴”は……！

「私はドランカー。この世界で夏雪を見る人の一人」

ちりん、と鈴の音が鳴る。

精神病を患っていますという……自己主張の鈴が。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1020o/>

---

You & I -Reverside Drunker-

2011年10月10日10時24分発行